

わ-6-1

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司

9784048702706
ISBN978-4-04-870270-6
C0193 ¥590E
1920193005905
ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 590 円
※消費税が別に加算されます



電撃文庫

魔王城は六畳一間!?

フリーター魔王さまが繰り広げる
庶民派ファンタジー!

第17回 電撃小説大賞 銀賞受賞作

電撃文庫

地に足のついてない小説は嫌ですが、
地に足のついた魔王はもっと嫌です!(笑)

「狼と香辛料」著者 支倉凍砂

はたらく魔王さま！

世界征服まであと一歩だった魔王サタンは、勇者に敗れ、異世界『日本』の東京・笹塚にたどり着く。

そんな魔王が日本でできること。それはもちろん“世界征服”!! ——ではなく、駅前のファーストフード店でアルバイトをしながら生活費を稼ぐ、いわゆるフリーター生活だった！

その頃、魔王を追って時空を越えた勇者エミリアもまた、テレホンアポインターとして日本経済と戦っていた。そんな二人が東京で再会することになり——!?

六畳一間のアパートを仮の魔王城に、今日も額に汗して働くフリーター魔王さまが繰り広げる庶民派ファンタジー。第17回電撃小説大賞〈銀賞〉受賞作登場！



わ-6-1

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司

電撃文庫
¥590

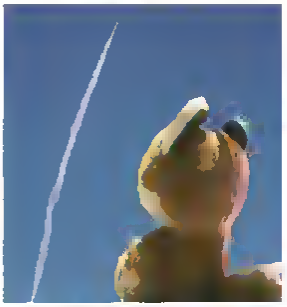
9784048702706

ISBN978-4-04-870270-6
C0193 ¥590E

1920193005905

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 590 円
※消費税が別に加算されます





わがはらさとし
和ヶ原聡司

『舞い上がる和ヶ原を見上げる相棒』

和「今の俺なら宇宙にだって行ける！」
相「地に足つけて仕事しなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま！

おにく
イラスト：029

アルパカとお肉をこよなく愛す関東在住のフリーの絵描き。
HP●http://029.animech.net/

カバー　暁印刷



はたらく魔王さま!

和ヶ原聡司

電撃文庫

2078



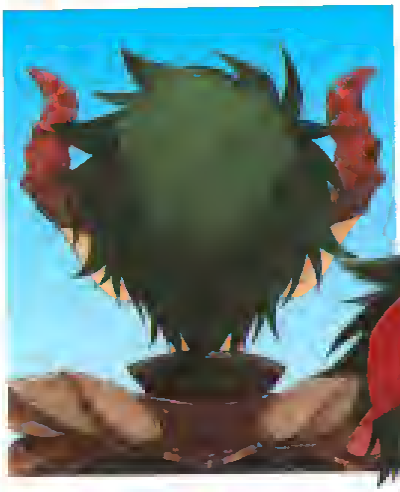
ぼっちの魔王です！



Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

和ケ原聡司
イラスト ■ 029

履歴書



ふりがな　まおう　さだお
氏名　真奥貞夫

考えた年　ことも月ない日生（満300歳）　性別

ふりがな　いらっしゃいませ　しゃく　さ

いいか勇者エミリア、俺は、この世界で正社員になってみせるぜ！

年	月	
日本橋真保元年～	寛政	11年頃 魔界の
明治3年		魔
平成2X年		魔
平成2X年		マクロナル
平成2X年		



魔王サタン
真奥貞夫（まおうさだお）

勇者に敗れ、異世界エンテ・イスラから日本にやってきた。日本征服のため正社員を目指しながら、幡ヶ谷駅前のファーストフード店マグロナルドでアルバイトをしている。

by 真奥

履歴書



バカじゃないの、魔王がスクランブルエッグだけの朝ご飯なんて！



勇者エミリア
遊佐恵美（ゆさえみ）

異世界エンテ・イスラで、勇者として魔王と戦っていた。魔王を追って日本にやってくるが、生活費を稼ぐためテレホンアポインターをすることに。東京で魔王と再会するが……？

履歴書



もう少し計画的にお金を使ってはいかがですか、魔王様。

悪魔大元帥
アルシエル
芦屋四郎（あしやしろう）

魔王サタンとともに日本にやってきた腹心の部下。いつかエンテ・イスラに戻るべく、日々節約生活を送っている。主夫として魔王の生活を支える。

履歴書



真奥さん、やっぱり凄いですね！

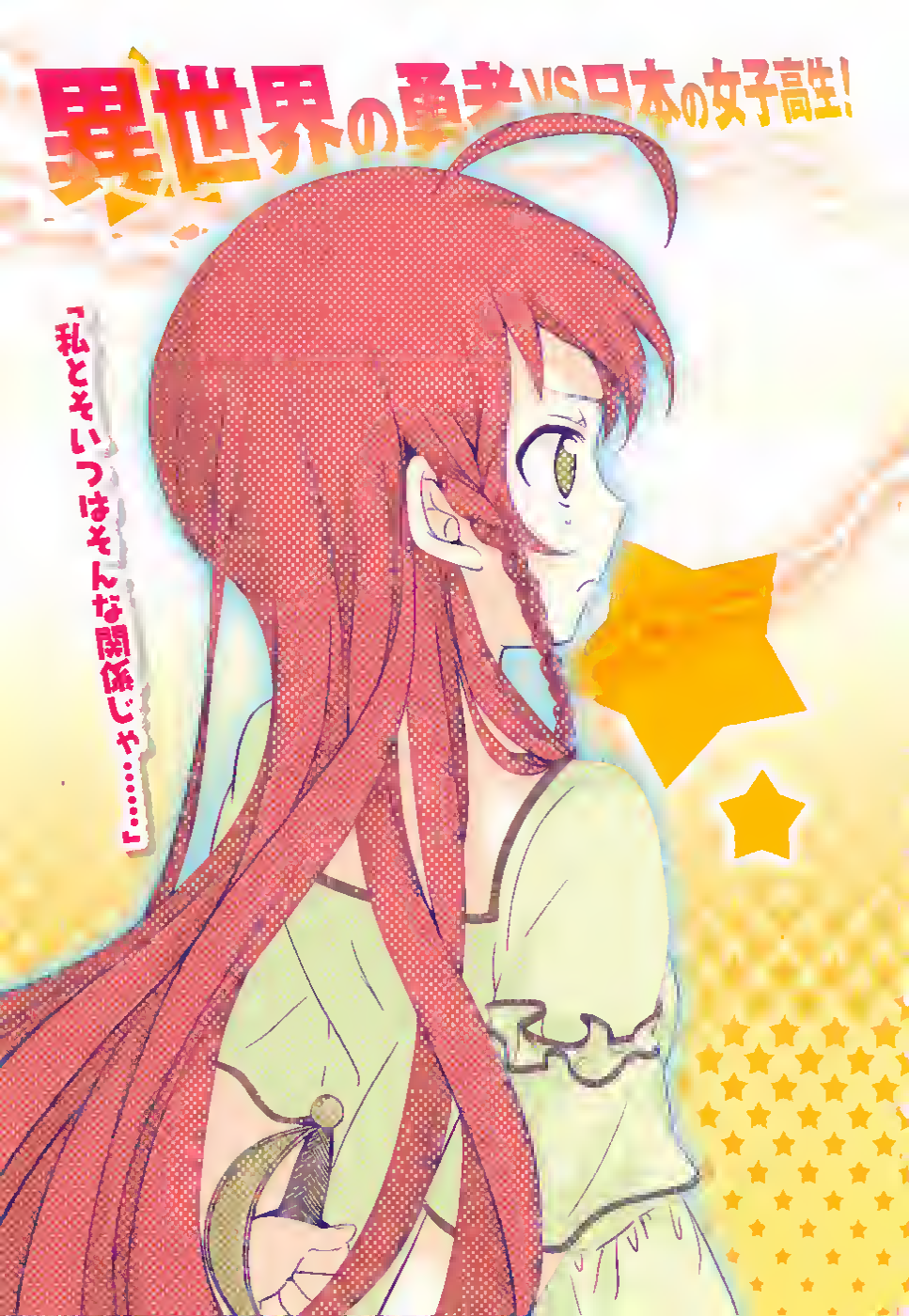
年	月	
平成XX年	3	渋谷
平成XX年	4	東京
平成XX年		二年

佐々木千穂（ささきちほ）

真奥と同じ幡ヶ谷駅前のファーストフード店マグロナルドでアルバイトをする高校二年生。目標に向かって働く真奥を慕っている。


仁義なき女の戦いがはじまる!?
「お姉さん、もしかして真奥さんの元カノか何かですか」
「二人とも落ち着け…」

異世界の勇者VS日本の女子高生!



MgRonald.

CONTENTS

魔王、生活のために労働に励む
P011

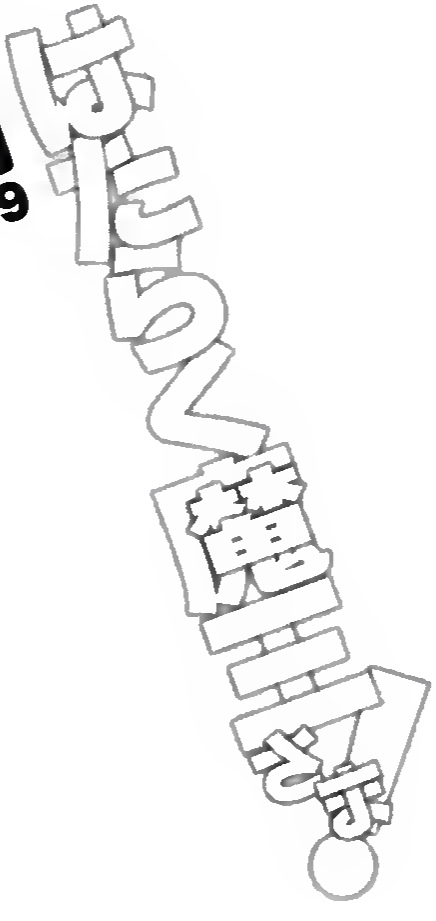
魔王、新宿で後輩とデートする
P097

魔王と勇者、笹塚に立つ
P193

デザイン ● 木村デザイン・ラボ

Satoshi Wagahara
Illustration ■ Oniku

和ケ原聡司
イラスト■029



魔王、生活のために労働に励む

銀行の預金が尽きた。

理由は至極単純、お金を使ったからである。

何に使ったかと言えば、まずは念願の冷蔵庫。夏を前に食料の保存にいささか不安を覚えていたから、絶対に必要な買い物だった。

次に自転車。変速ギアもついていない最安値のシティサイクルだったが、バイト先への行き帰りに使うなら十分だ。

更には洗濯機。最初はコインランドリーで済ませればいいと思っていたのだが、これが意外に面倒だし時間がかかる。やはり夏前には揃えておきたい家電だった。

そしてそれらを一括現金購入したために預金が底をついたのだ。

「もう少し計画的にお金を使ってはいかがですか」

咎めるような声が彼の耳を打つ。

「じゃあお前、俺が悪くなったもの食って腹壊してもいいって言うのか！　着たきり雀でいいって言うのか！」

「そういうことではありません」

冷静な低い声がたしなめる様に言う。

「当座の資金が足りなくても、勤め先があって勤務態度は良好。来月以降の収入もある程度保障されているのですから、分割払いという手もあったのではありませんか」

「俺ローンって嫌いだ」
「あのですね」
「大体分割払いは手数料がかかるだろ！　俺実体が無いものにお金払いたくないし」
「ですが」
「買い物するなら自分が持っている以上の額を使うべきじゃない。俺は借金が嫌いだ。お金は無いなら使うべきじゃない。だから一括現金払いでしか買い物はしたくない」
どこにでもありそうな六畳間の和室。その中央で、傷だらけのカジュアルコタツを差し挟んで座る二人の男がいた。
説教する青年と、説教されている青年である。
説教をしていた上背のある細身の青年は、やおら立ち上がると件の冷蔵庫の扉に手をかけた。
「ではお聞きしますよ、魔王様」
説教される中肉中背黒髪の青年を〝魔王〟と呼んだ、上背のある青年は、本来はそれなりに鋭いであろう眼光に諦観をにじませつつ冷蔵庫の扉を開けて〝魔王〟を睨んだ。
「こんにゃくときゅうりと牛乳で、どうやって次の給料日まで食い繋ぐおつもりか？」
「そ……それはっ」
説教されている魔王と呼ばれた男は座ったまま言葉を詰まらせる。
「べ、別に一文なしになったわけじゃないし、財布にはまだ金残ってるし」

上背のある男の目は、それは答えになっていない、と言っている。

「ほ、ほら、バイト先の賄いとか……」

「これから次の給料日まで毎食スーパーサイズミーですか。さぞ健康によろしいでしょうね」

冷蔵庫のすぐ脇にむき出しのまま置いてある自治体指定のゴミ袋の中には、有名ファーストフードチェーンの紙袋が無数に押し込まれていた。

「この体、まだ若いから」

「お若いうちからハイカロリー高コレステロールで毎日過ごしていれば、十年後が楽しみですね。帰還する前に生活習慣病で急逝していなければよいのですが」

なおもチクチクと皮肉が続く。

「時間の感覚もかつてとは違うのです。人間として生きる十年は短いようでとてつもなく長く、健康を維持するのはとても難しいのですよ？　そういった計画性をお持ちですか」

「うっせぇな！　持ってないよ、持ってませんよ！　これでいいか！　あーもう！　大体こうなったのだって俺だけの責任じゃないんだからな！」

「確かに我らの不甲斐なさはお詫びのしようもございません。が、再起のため雌伏し時を待てと、檄を飛ばされたのも魔王様でございます。本来ならば勤勉励行、健康保持の第一人者であらねばならないのに」

言われて、魔王は押し黙る。顔を俯かせ反省しているのかと思いきや、

「バイトの時間だっ！」

突然立ち上がると逃げ出すように部屋を飛び出してしまった。魔王のあまりに素早い動きに、台所に立っていた青年は一瞬遅れを取る。

「お、お待ちください魔王様！　まだ話は……」

「うっせぇうっせえ、アルシエル、説教なら帰ってから聞く！」

追いすがる寸前で乱暴に閉じられたドアに、危うく鼻をぶつけそうになる。

「魔王様っ！」

〝アルシエル〟と呼ばれた男がドア越しに呼びかけると、素直にドアが開いた。そこには魔王がいて、物凄い形相でアルシエルに向かって手を出している。

「雨！　傘！」

見ると朝方は快晴だった空に、灰色の雲が低く垂れ込めている。丁度雨粒が落ちはじめた様子だった。有無を言わさぬ迫力に、思わず玄関脇に立てかけられている使い古されたビニール傘を手渡してしまう。

「サンキュ、じゃ！」

また目の前でドアが閉められ、カンカンと階段を駆け降りる音が聞こえてきた。

「行くぞ！　我が愛騎デュラハン号！」

魔王と呼ばれた、全身一目でユニシロと分かる衣類で身を包んだ青年は、跨った新品の自転

車のベルを雄々しく鳴らし、騎馬兵の構える突撃槍のようにボロボロのビニール傘を掲げて、アパートの前の小路を抜けて走り去った。

説教していたアルシエル、やはりこちらもユニシロフルセットの男は、共用階段の手すりから身を乗り出してしばし呆然とした後、深く深く嘆息する。

そしてカマボコの板に〝真奥－MAOU－〟と、マジックで書いた表札が掲げられた賃貸アパートの部屋へと戻っていった。後ろ手に扉を閉め、頭を振って重い溜息をつく。一体何故こんなことになってしまったのか。雨雲と雨音で視覚的にも精神的にも暗くなった室内は今の彼の心中そのものである。

そんなくすんだ部屋に飛び込む呼び鈴の陰気な音。呼び鈴。そうだ。このアパートにはインターフォンと横文字で呼べるものすら無い。芦屋は再びドアを開けると言った。

「……うちにはテレビはありません」

MHKの集金人とは最早、顔見知り状態だ。実際この部屋にはテレビは無い。最近流行のワンセグ携帯だけで事足りる、とは家主にして彼の主たる魔王の意見だが、今のところその最新流行機種に変更するほど彼らの懐は豊かではない。

「一応伺いました。もし買ったらこの納付書持って銀行にどうぞ」

集金人はその事務的口調を封じ込めたような味気ない封筒を手渡し、愛想笑いすら浮かべずに帰っていった。

※

魔王サタンの名を知らぬ者など、エンテ・イスラの世界広しと言えどいるはずがない。それは闇の生き物が蠢く魔界を統べる、恐怖と残酷を代名詞とする存在である。

彼は神々の見守る世界とされている、聖十字大陸エンテ・イスラに侵攻し、人間世界を支配して全ての闇の生き物達の王道楽土を建設する野望を抱いていた。

人間達にとって絶望的なことに、その強大無比の魔王には、主に勝るとも劣らぬ力を持つ腹心の四天王がいた。

アルシエル、ルシフェル、アドラメレク、マラコーダの四人の悪魔大元帥。

大海イグノラに浮かぶ一際広い中央の大陸を中心とし、東西南北の大陸を十字架に見立てた神々の見守る大地エンテ・イスラ。その東にアルシエル、西にルシフェル、北にアドラメレク、南にマラコーダの軍を展開した魔王はその勢力を全土に拡大させ、人間を初めとする神の勢力をあと一歩で殲滅するところまで行ったのだ。

しかし、異変は西大陸のルシフェルの軍に起こった。

たった一人の人間の手によって、ルシフェル軍が壊滅したとの報せがもたらされたのである。

ルシフェル軍を壊滅させた人間は自らを〝勇者〟と名乗り、生き残っていたわずかな人間を

束ねて反抗しはじめたのだ。

ルシフェルは元々天界から堕ちた天使であった。

西大陸は、人間達の中では天界と最も近い存在である大法神教会の勢力が強い大陸だった。天界の事情に精通するルシフェルこそ天の力を借りて戦う大法神教会軍攻略に最適であると踏んだのだが、その目論見は〝勇者〟などと名乗る人間たった一人のために水泡に帰した。

しかし長く戦っていれば、目論見の一つや二つは外れるものだ。ルシフェルは運が悪かったが、残りの悪魔大元帥達の力を結集すれば、勇者駆逐は容易いとサタンは高をくくっていた。

それが間違いの元だった。

サタンは、人間を地を這う地虫のような存在だと思っていた。

しかし、考えてもみよ、地虫を絶滅させる方法はあるだろうか。巨大な獅子が取るに足らぬ毒虫の一噛みで死ぬこととてあるではないか。

ルシフェルに続きアドラメレク、マラコーダがたった一年の間に相次いで敗北する。四天王一番の知将であったアルシエルは、その段階で東の地を捨て魔王の本拠地のある中央大陸を守るための拠点防衛戦を進言した。長き年月をかけて進めてきたエンテ・イスラ征服作戦を、たった一年でひっくり返されたのだ。サタンも、最早楽観はできなかった。

急速に勢力を盛り返した人間達は勇者と大法神教会の名の下、一体今までどこに隠れていたのかと驚くほどの大軍勢で魔王の治めるエンテ・イスラの中央大陸まで押し寄せた。

中央大陸は瞬く間に攻略される。たった一人の勇者などという人間を、虫ケラと侮ったがために、魔王軍の勢力は散々に打ち砕かれてしまったのだ。

サタンとアルシエルは、勇者と三人の仲間達を中央大陸の魔王城で迎え撃つ。

流石の勇者達も魔王と悪魔大元帥を同時に相手にしたために、簡単に決着をつけることはできなかった。それでも確実に勇者の力がサタンとアルシエルを凌駕していた。

やがて勇者の持つ聖剣がサタンの片角を砕いたとき、アルシエルは撤退を決意し魔王に上申する。このままでは敗北を喫するだけでなく、存在の消滅さえあり得る。

サタンも苦渋の決断でそれを承諾する。即ちエンテ・イスラよりの逃亡。異世界へと逃げ込み、再び力を蓄え戻るその日を待つことに決めたのだ。

聖剣が己の心臓を貫かんとしたその瞬間、紙一重の差で異世界への門〝ゲート〟に飛び込んだ時の勇者の悔しげな表情も、サタンの溜飲を下げさせはしない。

サタンは最後の咆哮を、天にも届けとばかりにエンテ・イスラ全土に轟きわたらせた。

「人間どもよ！　今このときは貴様らにエンテ・イスラを預けよう！　だが俺は必ず貴様らを、エンテ・イスラを、この手に収めるために戻ってくるぞ！」

だが異世界へ渡るための〝ゲート〟を意のままに操るにはそれ相応の魔力が必要であり、勇者との戦いで傷ついたサタンとアルシエルには制御しきれなかった。

ゲートの奔流に流されるまま漂着した異世界は、大悪魔たる二人をして驚くほど高度な文明

を有した国だった。

サタンとアルシエルも見たことのない、悪魔の常識を超えた高層建築と、無数の煌く光を宵闇に投げかける謎のエネルギーが満ち溢れていた。

二人がいるのは大都市であるようだったが、薄暗い裏道でもあった。巨大建造物の狭間にあって、彼方からの聞いたこともない騒音が耳を叩く。一体どんな知的生命体が支配し、どんな凶暴な生き物がいるか分からない場所だ。誰にも見つからないように、まずは傷を癒す場所を探さねばならない、と二人確認しあったそのときであった。

突然二人に鋭い光が投げかけられた。

「あんた達そこで何やってんの！」

男の声がした。サタンが概念を理解できる、整った言語だった。見ると、エンテ・イスラに蔓延っていたのと同じ、人間型の生き物が立っていた。その手に持つ筒のようなものから光が向けられている。

「怪我してんの？　ケンカ？」

どうやらこの世界には、人間が文化的な支配者として君臨しているらしい。男の後ろにもう一人、似たような姿の人間が立っていて、それもこちらを見ているようだ。

アルシエルは面倒事を避けるためにも、

「控えよ！　このお方をどなたと心得る！」

と怒鳴り声を上げ脅そうとしたが、何故か男は動じず、困ったように眉根を寄せる。
その事にアルシエルどころかサタンも驚きを禁じえなかった。悪魔の声には発するだけで魔力が宿る。それをこうもあっさり受け流すことができる人間などいるはずがないのに。
「あちゃー、外人さんかぁ参ったな」
最初の男は首を捻り、何か黒い箱のようなものを取り出して突然独り言を呟きはじめた。
「警ら係りササキです。軽度傷害事件発生の模様。マルヒはアジア系外国人、場所は……」
見れば丈夫そうな皮とも布ともつかぬ素材の衣類に、腰には短刀のような柄のある武具。かぶり物の額には、何かの植物をあしらったと思しき金色の紋章が見て取れた。よもや、この世界にある国の騎士か何かなのだろうか。
独り言はなんらかの手段による遠距離通話だろう。彼が騎士だとして援軍が大挙して押し寄せてくれば、傷ついた自分達の身が危ういかもしれない。
今なら相手は二人。油断もしているようだ。アルシエルは目撃者を消すため、残る魔力を弾丸に変えて男にぶつけようとした。しかし、
「なっ……」
魔力が思うように集まらない。それどころか制御しようとすればするほど体内から魔力が流れ出してしまい、それを止めることができない。異常事態を上申しようとサタンを振り向くと、
「ま、魔王様……その、お姿は……っ！」

狼狽に声が震える。アルシエルは見た。光に照らし出された魔界の王の姿を。

「アルシエル、魔力を使うな、この世界を知るまでは」

サタンは落ち着いて見えるものの、やはり何かに抗うように歯を食いしばっている。

戦いの傷らしきものを残した、脆弱な生物、人間の姿をした魔王サタンがそこにいた。

「とにかくほら兄ちゃんたち、すぐ車来っから、何もなけりゃすぐ帰れるからさ、オーケー?」

男達はサタン達の姿をまるで恐れていない。驚愕から立ち直る暇もなく、アルシエルは己の手を見た。見たこともない、人間の手だった。

やがて白黒に色分けされ、得体の知れぬ赤い光を撒き散らす馬の無い馬車が現れた。さらには最初の男と同じ兵装の男が次々と現れ、サタンとアルシエルをその馬車に放り込んでしまう。

「日本語分かる? 夏場にそんな格好してて暑くねぇの?」

最初の男が二人の姿を見て尋ねた。元々普通の人間を凌駕する体躯を誇っていた大悪魔の二人である。人間の姿になってしまった今では、赤子がシーツを羽織ったような不自然極まりない姿であり、しかも王や将としての威厳を保つための禍々しい装飾がそこかしこについている。

サタンはアルシエルと顔を見合わせるが、何も答えられないし、答えたところでどうやら自分達の言葉は男に通じていないようだ。

「……まあ、あの辺には面白い格好の若い人いっぱいいるわな」

男は自己完結したのか、以後は何も喋らなかった。結局サタンとアルシエルは、ケイサツショというこの世界の警吏の集まる建物に連れてこられてしまった。

その中の一室で調書を取られる際の立ち居振る舞いは、流石に魔王サタンとアルシエルでは格が違った。サタンは、取調べの係官に催眠魔術を施し、この世界に関する情報を引き出して見せたのだ。戦場で戦う一兵卒より、城でふんぞり返っている貴族や士官ほど脆弱な精神力しか持ち合わせていないのはどこの世界の人間も同じらしい。

催眠状態に落ちた係官曰く、二人が流れ着いたのは〝チキュウ〟という世界の中の〝ニホン〟という島国だという。そのニホンの中の〝トウキョウ〟という首都地区に敷設された〝テツドウ〟という交通網の〝ハラジュク〟という駅近くに自分達はいたらしい。

この国では魔法や魔力、魔王や悪魔と言った存在は全て空想上の存在であり、実在しないと認識されていた。魔力はその世界に住む者の意識によって世界に空気のように湧出するのだが、無いものは供給されるはずもない。

「では、私は魔力を失った……ということですか」

アルシエルはその衝撃をこらえきれず、座り込んでしまう。

「あ、でも、魔王様は……」

「俺はまだ若干の余力を残している。とはいえ、流出を食い止めるのは中々骨だがな」

魔王と他の悪魔とでは体内に備蓄できる魔力量がケタ違いであり、勇者との戦いで消耗し

ても それはアルシエルのなお数倍に達する。サタンは余力で催眠魔術を使うことができたのだ。

「放出量を調整すれば、すぐに枯渇することはなさそうだ。だが……」

問題は、使ってしまうと再び蓄える手段がないということだ。

傷はいつか治るが、このままでは魔力は永遠に回復しない。それではゲートを開いても制御することもできず、エンテ・イスラに帰るどころか、より危険な世界に迷い込む恐れすらある。

迂闊な賭けに出るよりは、この世界でなんらかの方策を見つけた方が得策であると思えた。

悪魔や魔力の概念が無い代わりに、神や破邪の概念もまた希薄である世界だったことも幸いした。忌みごとを払う儀式のようなものはあるらしいが、完全に形骸化し、その行為に神聖な力を宿すことができる者は存在しないと考えてよさそうだ。

この〝ニホン〟にいる限り、すぐに魔の者として討伐されることはないだろう。取調べの係官には調書を完成させ、問題ないという結論を出させて、二人はケイサツショを出た。

サタンとアルシエルは街灯の灯りが届かぬ裏道に入って今後の方策を話し合った。

まずはこの世界で、魔力を蓄える方法を見つけなければならない。そのためにはある程度の長期滞在は覚悟する必要があるだろう。

そして魔力が蓄えられない、ということは、悪魔である二人にとっては魔法を行使できない以上に生命の危機に関わる。

高等悪魔が食事をしなくて済むのは、魔力を生命エネルギーに変換できるからであり、魔力

が存在しない世界というのは、食べ物が無い世界に等しいのだ。
では何故悪魔の中に食事をする者がいるのか。食事という手段でも、普通の生物と同じようにエネルギーが摂取できるからである。
魔力供給の無いこの世界で生きていくためには否応なしに食事をしなければならない。ニホンでは貨幣経済が成立しているらしいから、食料を手に入れるには金が必要だ。
だが当然二人はこの世界の貨幣など持っていない。
「アルシエル、一応確認する。お前先ほどの警察官なる連中を、やろうと思えば振りきれたか？」
その問いにアルシエルは沈痛な面持ちで首を横に振った。サタンも納得したように頷く。
かつて人間全体を膝下に置こうとした二人の大悪魔は、たった数人の人間を振り払い、あの場から逃げることもできなかったのだ。
それはこの世界の人間が強いのではなく、自分達が弱っていると見るべきだろう。それだけ勇者との戦いは熾烈を極めたのだ。
「では、この姿も……」
アルシエルは、自分の手を、異物を見るように眺めて顔をしかめた。柔らかく薄い皮膚。のっぺりとした顔にばさばさの髪、丸く頼りない爪に、まるで力が入らない全身の筋肉。
「情けない話だが、魔力不足のせいで高等悪魔の姿を保つことができないのだろうな」
悪魔の外見は、本人の力の質に比例する。敵を切り裂く爪や、城壁を飛び越える脚力、空を

舞う翼に蛇の髪などの形態は、全て魔力によって維持されるものだ。

「まさかそれが剝げ落ちた姿がこれとはな。案外人間というのは、全ての生き物の根幹を成しているのかもしれん」

「お戯れを。我が身の根幹が人間であったなど、考えたくもありません。恐らくこの世界や、ゲートの作用によるものでしょう」

「……まあ、いずれにせよ、今問題なのはそこじゃない」

ゲートを行使する魔力も無い。この世界の人間を圧倒する力も無い。つまり、この先生き延びるには、この日本という国で、人間達のルールに従いながら生活するしかないということだ。

人間のルールに従う。魔王と悪魔大元帥にとって、誇りの根底を砕かれるに等しい事態だ。

しかし目の前にあるのは、働かざる者食うべからず、という過酷な現実だった。

魔王と悪魔大元帥は、元々羽織っていた悪魔のローブをずるずる引きずり、未知の世界への不安な一歩を踏み出した。

警察から得た情報で、ニホンで最低限の生活をするのに必要なのが〝コセキ〟と〝ジュウシヨ〟であるらしいことが分かった。この二つが無ければ金を稼ぐための仕事を得ることすらできないようだ。

〝コセキ〟と〝ジュウショ〟は〝クヤクショ〟という場所で手に入るらしい。そのため最初の目的地は〝区役所〟に決まった。傷ついた体に鞭打って原宿警察署に最も近い〝シブヤ区役所〟に足を運べばなんと翌朝にならなくては開庁しないという。

サタンとアルシエルは大変に惨めな思いで、区役所の玄関前で膝を抱えながら夜を過ごした。

一時も灯りが落ちない街は、朝になると一段と活気づきはじめる。色とりどりの服を纏う人間達の中に、黒や紺を基調とした画一的な姿をした男達が多く現れるようになった頃、ようやく渋谷区役所は業務を開始する。それと同時に窓口に飛び込み、サタンとアルシエルの奇怪な姿に驚いた顔の職員を催眠魔術の力で操り、二人は無事〝コセキトウホン〟の原本を作ることに成功した。

次に行くべき場所はいくつもの住居を斡旋する商売をしている〝フドウサンヤ〟だ。

エンテ・イスラでは人間の言語をわずか三日で習得したサタンとアルシエルである。ここらあたりでなんとか頑張って、実践的な〝ニホンゴ〟を習得しなければと意気込む二人。

その結果、不動産屋の社員は、二人のカタコトの日本語と奇抜な衣装を外国の文化と誤解してくれて、非常に多くの情報を懇切丁寧に教えてくれた。

サタンはそんな仕事熱心な不動産屋の男に、あまり賃料が高い場所には住めないと伝える。

催眠魔術は一度限りならそれほど大きな魔力を使わないが、金を払えないと追い出されてしまうわけだから、高い賃料のところに住むと収入が多く得られなかった場合、大家に延々催眠

魔術をかけ続けなければならない。だから無理のない賃料、最低限の生活ができる場所、という条件を話すと、男は苦りきった顔で一つの物件を提示してきた。

「こちらの大家さんが、非常に奇特な方でして」

それはこの渋谷という地域の〝ササヅカ〟という街にある集合住宅の一室だった。

家賃四万五千円、敷金礼金無し、保証人不要、築六十年の六畳一間、風呂無し、トイレは部屋毎のアパート、〝ヴィラ・ローザ笹塚〟二〇一号室。

「お客様方のように、はっきり申し上げて身許不確かな方や、怪しい人を率先して引き受けると仰っているんです」

散々な言われようだが、他に紹介してもらえないならここに決めるしかない。不動産屋の自動車（と言う乗り物らしい）に乗ってたどり着いたのは、閑静な住宅街にある二階建てのアパートだった。漆喰が剝がれかけた壁に、所々瓦が欠けた屋根。その屋根にへばりついているだけの雨どいは錆び放題で、二階の共用廊下に上がる階段が水平を保っていない。人の気配がしないから、恐らく全ての部屋が空室なのだろう。

「こ、これは……」

アルシエルが呻く。

「あ、ああ、流石に私も、分かるぞ」

悪魔の言葉でやりとりする二人。この世界の事情に暗い二人ですら分かるほど、明確に老朽

化した建造物だった。

仮にも、魔界という一つの世界で頂点と栄華を極めた王と将である。落ち延びた身とは言え、こんなボロ家を仮の住まいにできようはずがない。というか全て空室ということは、この世界の人間すら住もうと思わないほどの建物ということではないか。

到底こんな所には住めない。そう言おうとして振り向くと、そこにいたのは若い不動産屋の男ではなかった。

「……人……か？」

悪魔である二人の感性をして異様、としか言いようのない外見の謎の生き物であった。人間型でもかなりの長身であるアルシエルに迫る上背。豊満と言ってもまだ控えめな表現の肉付きは、その生き物が人間の女性であることを辛うじて二人に認識させた。

天高く盛り上がった紫と銀のマーブルに染め上げられた髪に、色鮮やかな紫陽花のヘッドドレスを載せ、薄紫のストールをショッキングパープルのサマードレスの肩に羽織り、全ての手の指には大粒のアメジストの指輪、曇りない紫のエナメルのピンヒール。紫のルージュに紫のアイシャドー、叩けばひび割れるのではないかというほどの分厚い真っ白なファンデーションに、わずかに入ったチークが眩しい。その様は、所々皮を剝かれた巨大な紫芋を彷彿とさせた。

「ごきげんよう、あなた方が、今回入居をご希望されたお二人ですのね」

「し、喋った！」

アルシエルが反射的にそんなことを口走るほどに、既にその存在感は二人を威圧していた。

「私が、〝ヴィラ・ローザ笹塚〟のオーナー、志波美輝ですの」

硬直しているサタンとアルシエルは、その紫色のナニモノカの向こうで、不動産屋の車が背を向け去っていくのを見た。

「〝美輝〟は、〝美しさ〟が〝輝く〟と書きますの。あ、でも、気軽に〝ミキティ〟と呼んでくださって結構ですのよ」

徐々に日本語が分かるようになってきているはずの二人だったが、この志波と名乗る謎の大家の言葉だけは、本能が理解を拒否した。

絶対に、深く関わってはいけない。そう思ったのに、気づけば二人はボロアパートの一室に引き摺り込まれ、あれこれ書類にサインさせられ、室内の設備の説明を受けた挙句、

「それでは、今日からここはお二人の安息の場となります。私は隣の土地の家に住んでおりますので、分からないことがありましたらいつでもお声をおかけくださいな。それでは、御免あそばせ」

紫色の嵐が過ぎ去った後、部屋に残っていたのは唖然としたまま声も出ないサタンとアルシエル、そして紫色のキスマークが捺された賃貸契約書だけだった。

なし崩しに賃貸契約を結んでしまったサタンとアルシエル。しばらくの放心状態から立ち直り、冷静になってから考える。

外観はボロいし、大家は人間とは思えないほど恐ろしい。しかし、住所不定無職の青年二人という、この世界の常識的にはこれ以上ないほどに怪しげな入居者を受け入れてくれるような物件が他にあるだろうか。それを思えば、むしろ今は最低限、雨風を凌げる場所が手に入っただけでもよしとするしかない。

できるだけ大人しく生活し、賃料をしっかり納めて必要以上に大家と関わらずにいよう、と二人は心に誓った。

「この世界には〝臥薪嘗胆〟という言葉があるらしい。こんな棲家もまた一興だろう」

勇者との戦いで肉体は傷つき、ゲートの奔流に弄ばれて体力を消耗し、見知らぬ世界で精神をすり減らした。そして魔王サタンともあろう者がたった二回の催眠魔術で息切れするほど、失われる一方の魔力。サタンは、かつて体験したことのない疲労の極致にあった。

傷つき疲れ果てた体と心を癒すため、魔王サタンはそれから三日三晩眠り続けた。

そして傷ついた体に飲まず食わずで三日三晩眠り続けたために、サタンは栄養失調で病院に運ばれてしまった。脱水症状とビタミン欠乏で足腰立たなくなってしまったのだ。

虚ろな目を宙に彷徨わせ、青白い顔で肌も乾燥してしまった瀕死の主を助けるため、アルシエルは入居三日目で早くも大家の志波に助けを請わざるを得なくなった。この世界の医療がどういうものか、まるで見当がつかなかったのだ。

志波が〝電話〟なる遠距離通話機で召喚したのは、赤い光を放つ白い車〝救急車〟であった。

担ぎ込まれた病院のベッドに点滴を受けながら横たわる主の姿を見てアルシエルは、魔王も自分も外見だけでなく、本質的な構造がこの世界の人間に準拠してしまったことに気づき、屈辱に耐え切れず涙を流した。

そんなアルシエルの悲嘆とは無関係に現実は非情であった。

この世界、医療費が大変に高額なのである。個人の医療費負担を軽減する公的なシステムがあるらしいのだが、当然サタンもアルシエルもそんなシステムには加入していない。

提示された医療費は、まだこの国の貨幣価値に疎いアルシエルにも分かるほど暴利としか思えない額だった。退院許可が下りたサタンは医療費を誤魔化すためにまたも催眠魔術を使うハメに陥ったのだ。

とにかく今必要なのはお金だった。だが警察に捕まったり魔力を浪費するような方法で入手してはならない。

絶対に国民健康保険にも入っておかねばならない。

最後の催眠魔術、と決めて二人は〝ギンコウ〟に行き、銀行口座と資金を調達した。行員を催眠状態に落とし、その行員から一万円を失敬して、普通預金口座を開設したのである。

立派な犯罪だが、悪魔たる者、窃盗を躊躇うようでは話にならない。心の中に起こった、何かが色々と間違っているんじゃないかという葛藤を押さえ込み、生活の元手を手に入れた。

その一万円で、当座生き延びられる食料と、〝リレキショ〟を購入する。金を稼ぐ仕事を得

るには〝リレキショ〟が絶対必要らしいのだ。

必要事項を記入してしかるべき場所に届けると〝メンセツ〟の約束を得られ、その問答に合格すると働くことができるらしい。

しかしサタンもアルシエルもこの国で通用するような特別な技術は一切持っていない。まさか『職歴・魔界の王、特技／趣味・世界征服』などと書けようはずもなく、〝初心者歓迎〟の職種にターゲットを絞らざるを得なくなった。

二人はリレキショを何通も書いた。

悔しさと屈辱に耐え、いつの日か勇者を倒しエンテ・イスラの覇権を掌握することを夢見て、名前を力強く書いた。

「名前……真奥貞夫……っと」

「名前……芦屋四郎、この名前、変じゃないですよね？」

「今さら言うな。もう戸籍作っちゃったんだから」

こうしてヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室の六畳一間を仮の魔王城とし、魔王サタンこと真奥貞夫、悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎のエンテ・イスラ再征服の野望が花開いたのだった。

二人は最低限の職への足がかりと細い命綱を手に入れたが、休んではいられない。電気、水

道、ガスといったライフラインを維持するにも金は必要なのだ。

サタンは雷雲と大波と業火を自在に操っていた過去を振り返り涙した。

今のサタンとアルシエルは、真奥、芦屋と名乗るどう見ても二十歳そこそこの、冴えない無職の青年でしかなかった。

魔王と悪魔大元帥はいくつもの求人雑誌を読み漁った結果、日雇いという形式の職があることを発見する。

所定の会社に登録して短期の仕事を斡旋してもらうのだ。日給は五千円から一万円の即日払い。仕事ぶり如何では昇給もあるらしい。

早速なけなしの十円玉を公衆電話に放り込み、面接の約束を取りつけた。

新宿にあるという支社に行ってみると、面接というよりはもう採用決定後の就労説明会のようなもので、登録はすぐに済み、その日のうちから仕事を回してもらえることになった。

二人は初心者ということで、比較的簡単な〝イベント会場の設営補助〟という仕事を与えられ、所定の日給分の仕事をこなした。

会社から手渡された一人七千円の手当を眺めながら、サタンは確信した。

これを続けていけば当座の生活費が稼げる。ある程度の金額が貯まったら今度は長期的に働けるアルバイトを探せばいいと。

ところがその目論見はわずか二週間で崩れることになる。



毎日仕事をこなし、受付の正社員達から顔を覚えられる程度になった矢先のことだった。
会社が国から事業停止命令を喰らい、職場斡旋事業を休止したのである。青天の霹靂だった。
稼ぎ口が突然閉ざされ、消沈して帰る二人の耳に、街頭テレビのニュースが飛び込んでくる。
違法な現場の斡旋だとかピンハネだとか、色々な報道が会社を糾弾する形で為されていた。
人間如きが定めた法律のために、何故大悪魔である自分達が職を失わなければならないのか、恨みがましく街頭テレビを見上げたサタンは、ふと我に帰る。
「ちょっと待て芦屋」
「アルシエルとお呼びください」
「そもそも俺達の目的は人間世界の征服であって、日銭を稼ぎ糊口を凌ぐことではないぞ」
「はあ、確かに仰る通りですが」
「お前、なんとか魔力を回復する手段を見つけ出せ、労働は俺がする。俺の方が生命力も魔力も上だからな。だがお前は俺が見込んだ知将。日本で魔力を手に入れる策を見つけ出して欲しい」
「真奥様……」
「魔王だ。とにかく、二人で稼げば生活は楽かもしれんが、手段と目的を間違えちゃいかん。この世界にも魔王や魔力といった概念だけは存在するんだ。概念には元がある。その元を探り出せばもしかしたら」
「魔力を回復する手段がある、と」

サタンは大儀そうに頷いた。

「二人でバイトしているよりはいいだろう。魔力を取り戻すだけに限らず、この世界の新たな力すら身につけて、再びエンテ・イスラへと攻め込もうじゃないか」

芦屋、いや、アルシエルは、幾日ぶりかの魔王の覇気ある言葉に感極まって膝をついた。

「かしこまりました魔王様。私の一命を賭して、エンテ・イスラへの道、魔王様の魔力、取り戻す策を探して参ります！」

「……おい立てアルシエル、ここは横断歩道だ、恥ずかしい」

往来を行く人々が、突然跪いて何事か叫びはじめたアルシエルをなんの感情も籠らない目で見つめそして通り過ぎていった。

魔王サタンは、真奥貞夫として日本人に身をやつし、力の限り必死で働いた。様々な仕事をこなした。道路工事現場の交通整理。製品のピッキング業務。引越し屋の補助。朝の鉄道ラッシュの行列整理などその職種は多岐に渡った。

アルシエルは芦屋四郎として、真奥が日々を健康に過ごし、全力で仕事に打ち込めるよう、家事に精を出し、空いた時間に魔力調査に出かけ、家計簿をつけて厳密に出納を管理することで毎日を過ごしたのだ。

そして二人が日本に来て丁度半年経った頃、真奥は大手ファーストフード、マグロナルドの長期アルバイトに採用される。

仕事初日、真奥は店の賄いをたくさん抱えてホクホク顔で帰ってきた。曰く、「これでもう、食糧が枯渇する心配は無い」だそうだ。

芦屋も最初は食べ物の心配をしなくて済むことを喜んだ。しかし、毎日毎日ハンバーガーだフライドポテトだフライドチキンだとカロリーが無闇に高く味の濃いものを食べ続ければすぐに飽きてしまう。そして一週間も経てば、胸焼けがしてもう二度と見たくなくなる。

しかし真奥は店の味がお気に召したらしくそんなものばかり食べていた。

畢竟芦屋が毎日の食事に、より一層気を配らざるを得なくなる。おかげで魔力回復の方策を探すことに関して全く進展が無い。毎食ジャンクフードという惨事を避けるためにも、芦屋は毎日閉店ギリギリのスーパーに飛び込んで徳用品に目を光らせなければならなくなるのだ。

真奥はその仕事ぶりが評価されたのか、わずか二ヶ月で時給が上がった。

その日を芦屋は忘れられない。時給が一気に百円も跳ね上がった、と本気で喜ぶ魔王サタンの姿をどうして涙なしに見られようか。

その後も順調に昇級を重ねた真奥は今やマグロナルド幡ヶ谷駅前店のA級クルーだ。

時給は入社した半年前の二百円増し。これは破格の待遇であるらしい。催眠魔術を使えば魔力が減って芦屋にもすぐ分かるので、真奥は本当に猛烈に働いて実績を挙げたのだろう。

お客様からの声の投書メールがマグロナルド本社に届き、それが真奥の接客を褒めたものであるらしく、月間クルーMVP賞を受賞したこともあるそうだ。

自分を評価するあそこの店長には見る目があるだの、最近入った後輩アルバイターが優秀だの、およそ世界征服を目指す者がする話とも思えず、終いには店長を超える事が世界征服の第一歩だなどと言い出し、真奥の魔王としてのスケールは、日を追うごとに小さくなっていった。

真奥、いや、魔王サタンの覇業を支えることを生きがいとしてきたはずの芦屋をして、最近はそんな主の様子に気苦労ばかりが先に立ち、明日を見失いがちになってしまう。

芦屋は手の中のMHKの料金納付所の封を、開封もせず状差しに放り込んだ。忠義の臣として様々な不満や不安を胸の内に納め、今日も都内の美術館、博物館を巡るのだ。

芦屋は調査の末、やはり地球のどこかには魔力の存在する、または存在した場所があると確信していた。

イギリスのストーンヘンジや、エジプトのピラミッド、ペルーのナスカの地上絵など、世界各地に魔力で構成したと思しき建造物や文化が確かにあった。

図書館で世界の遺跡や文物をしらみ潰しに調べた結果である。真奥と芦屋の魔王城にインターネットなどという気の利いた設備は無い。

しかし、どこが本物か、という特定ができない。

海外に行くだけのお金は無いし、魔王の催眠魔術で首尾よく渡ったとしてそれが本当に魔力文明であるかどうかは、実際に行ってみなければ分からないのだ。

それでハズレだったら目も当てられないし、魔王の魔力を回復するほどの力が残っているかどうかも分からない。

だから芦屋はまず手近な文物を当たることにしたのだ。

都内の博物館や美術館は、定期的に海外の博物館に収蔵されている文物を借り受けて展示しているらしい。その中に自分達の魔力と波長の合致するものがないかを探すのだ。

この日は上野の国立西洋美術館の特別展に目標を定め、まずは新宿に出ることにした。

外は雨なので、真奥が道端で拾ってきたビニール傘を手に持ち、盗まれるものなど何もない部屋の、少々頼りないシリンダー錠のドアをしっかりと施錠して家を出た。

芦屋はふと、この生活が永遠に続いてしまうのではないか、という空恐ろしい思いに囚われて、春だというのに身震いした。

「ん？」

実際に自分が揺れているということに一瞬遅れて気づいた。地震だ。

日本が地震大国であることはこの一年の生活でよく理解しているから慌てることもない。しかし築年数が殿堂入りの名前負けアパートに住んでいると、体感震度が三割増してあるのには辟

易する。

案の定、十秒程度で揺れは収まった。エンテ・イスラでは一度地震が起これば、規模に関わらず、神の怒りだ魔王軍の侵攻だと人間達がパニックに陥るが、日本ではこの程度の揺れでは気づく人間も少なく、電車だって止まらない。

そもそも芦屋は新宿に出るのに電車など使わない。笹塚から新宿までは京王線で一駅。男の足で歩けばたったの二十分だ。もう一度ドアノブをひねって施錠を確かめると鍵をポケットにしまって、共用階段をゆっくり降りる。

芦屋自身、たった一駅分の交通費を、理由をつけて浮かせることに喜びを覚えるようになってしまった自覚はまったく無いのだった。

※

愛騎デュラハン号を駆った真奥貞夫は一路アルバイト先を目指す。

笹塚の魔王城から、幡ヶ谷のマグロナルドまでは順調に走れば十分とかからない距離だ。しかし芦屋の説教に付き合っていたせいで雨が本降りになってしまっていた。

骨が歪み、柄が錆び、ビニールがくすんで透明でなくなってしまっているボロ傘ではカバーしきれないほど強い降りだ。

しかし真奥は力強くペダルを踏みしめる。

今日は月末。しかも休みを前にして開放感で財布の紐が緩む金曜日だ。キャンペーン商品の地区売り上げ一位がかかった大事な日でもある。真奥は燃えていた。今日こそはブラックチリペッパーポテトの売り上げベストを更新してみせる！

「芦屋なんかに言われなくても、俺だって俺なりに考えてるんだからな！」

エンテ・イスラを征服するという野望は今もある。だが、帰る手段が無いのだから何もしようがない。帰れたとしても魔力が戻らなくてはあっという間に討伐されてしまうのがオチだ。

その点、日本なら真面目に生活していれば討伐される心配も無いし、今日の活動が将来征服者として君臨するための小さな積み重ねだと考えれば、魔王としての矜持も満たされる。

今はこれでいい、真奥はそう信じて疑わなかった。

赤信号の横断歩道で止まる。ブレーキが耳障りな音を立て、前輪が水溜りに突っ込んだ。

デュラハン号はお得な買い物だったがこのマンドラゴラの悲鳴のようなブレーキ音が欠点だ。

甲州街道から一本裏に入る住宅街を突っ切る道路の交差点には、小さな公園と壁一面がガラス張りのお洒落なレストランがある。

真奥の来た方向とは横断歩道を挟んで反対側にある、そのレストランの雨よけの庇の下に、真奥は女性の人影を認めた。

ランチタイムが近くそこそこ人通りも多い中、その人物が目を引いた理由は一つ。この雨の

中、傘を持っていないようなのだ。遠目にも、その女性が顔をしかめて手にした小さなハンカチで、髪や肩を拭っているのが分かった。

赤信号の間、その女性は恨めしげに空を睨んでいた。予想外の雨だったのだろう。案の定信号が青になっても、途方に暮れたようにその場を動かない。

真奥は交通ルールを順守し、自転車を降りて横断歩道を渡る。渡りきったところで、その女性はこちらに気づいたらしく目を向けてきた。軽く目礼した真奥はレストランの庇の下に入り女性に並ぶ。真奥は警戒されないよう、自然に女性と自分の間に自転車を挟み、

「よかったら、これ」

ビニール傘を畳んで女性の方に柄を差し出した。

「え？」

澄んだ声で戸惑いを浮かべ、女性は意味なく左右を見る。

「いきなり降ったから困ってるんじゃないかと思って」

通りの向かいから見た姿や振る舞いは大人びていたが、こうして相対すると高校生くらいの少女にも見える。少なくとも真奥の外見年齢よりは年下だろう。

花柄のチュニックにタイトなシルエットのデニムが似合う美人だった。毛先が緩くカールするロングヘアは雨粒で逆に艶めくほどに美しい。しかし肩から提げた小さなポーチに折り畳み傘の用意を怠っていたようだ。

意志の強そうな瞳が真奥の顔を不安げに覗き込んできた。
「て、でも、いいんですか？　だって、私が借りちゃったら……」
もちろん真奥も予備の傘など持ち歩いていないし買ったこともない。大体この傘も拾い物である。
「バイト先がすぐそこだから、チャリで飛ばせば二、三分で着くし。置き傘もあるから」
差し出された傘の柄をおずおずと受け取る女性。それを見た真奥は、これ以上の押し問答になる前に、素早く自転車に跨りこの場を去ろうとした。
「あの、ありがとうございます。その、何かお礼させてください」
だが女性は思いのほか強い語気で真奥を押しとどめる。真奥は手を横に振り、
「別にいいよ。ボロ傘だし、用が済んだら捨てちゃってもらって構わないから」
「そういうわけには……」
気が済まなそうな様子の女性を見て、真奥は言う。
「じゃあこうしよう。俺、すぐそこのマグロナルドに勤めてるから、暇なときに食いに来て」
「すぐそこ……ああ、幡ヶ谷駅前の」
真奥が指差した方向に目をやり、女性は得心したように頷いた。
「そ、もし俺がいたらフェア中のポテトこっそり増量サービスするから」
真奥の必殺技、草の根営業トークである。お客様となる可能性のある全ての人物に対し、マ

グロナルドのクルーとして接する。その心構えは昇給という形で結果に現れているのだ。

「分かりました。必ず伺います。あの……」

女性は姿勢を正すと真奥の目を真っ直ぐに見る。

「傘、ありがとうございます」

そしてしっかりした口調で、真奥に頭を下げた。

憂鬱な心の雨雲を吹き飛ばす、太陽のような美しい笑顔だった。

「じゃ、気をつけて」

少し気恥ずかしくなった真奥は、それを誤魔化すようにそっぽを向くと、軽く手を上げて雨の中に躍り出た。もう振り返りはしない。

「うおおおお、つめてっ！」

ちょっと格好つけすぎただろうか。しかしこれも明日のため、営業のため、そして世界征服のためである。

それに正当な理由で傘がなくなれば、財布の紐をセメントで固着している芦屋も、新しい傘を買うことを許してくれるかもしれないじゃないか。ダメなら、店の置き傘からマシなものをもらってこよう。

再び信号が赤になった交差点で、女性は真奥の姿が見えなくなるまで、その場から動かなかった。

結論から言えば、フェア商品売り上げ地区一位は達成できなかった。ランチタイムを過ぎて突然ポテトを揚げるためのフライヤーが一機故障したのである。

メンテナンスが来るまでに二時間を要し、その二時間が生死を分けた。

真奥は悔しがりながらも、今日もたくさんのジャンクフードを手土産に夜中の帰路に着いた。

あんなに激しく降っていた雨も、夕方頃には上がっていた。おかげで店から傘を借りずに済んだが、あの雨が昼の客足に影響を及ぼしたことは疑いない。

雨やフライヤーの故障以外に至らなかった点は無かったか。帰りの道すがらそのことばかり考えていた真奥は、昼に女性に傘を貸した、あの交差点に差しかかっていた。

「……あれ？」

時間帯は深夜である。レストランはとうに閉店して灯りも落ちている。人通りの絶えた交差点を照らすのは、外灯と、明滅する信号のみ。

あの、レストランの庇の下の影から、ゆらりと人影が浮かび上がる。

夜の闇に紛れて気がつかなかったが、出勤時に出会った女性ではないか。

「あれ？　昼間の……」

しかし、真奥は言葉を途中で止める。どこかおかしい。

女性は言葉を発さず、真っ直ぐに真奥を見ている。その視線の冷たさは何事だろう。
にわか雨に虹をかけそうな明るい笑顔の持ち主のはずなのに、今の表情はまるで太陽すら凍りつかせんばかりの極北の氷河だ。
間違いなく、今の彼女は、こちらを睨みつけている。その視線に気圧されて、真奥は唾を呑み込む。
何故こちらを睨みつけたまま何も言わないのか、空気に耐えられなくなった真奥は、とりあえず声をかけてみた。
「あの後、大丈夫だった？　濡れずに帰れた？」
「大丈夫じゃないわ」
「は？」
声もまるで真冬の放射冷却のように冷たい。
「今日、あなたの店に行ったわ」
「え、そ、そう。あ、ありがとう」
営業トークを咬んでしまう。カウンター業務をしている間、この女性が来た記憶は無い。
女性がこちらに一歩踏み出し、真奥はバランスを崩して倒れそうになった。慌てて自転車から飛び降りると、今度は昼とは全く違う意味で、お互いの間に自転車を挟んだ。
「ずっと向かいのお店から観察してたの」

「観察……って、店を？」

店の向かいには通りを挟んで書店があったはずだ。そんなところからずっと店を見ていたとは、まさか噂に聞く、本社の抜き打ち監査というやつだろうか。

「いいえ、あなたを」

「お、俺？」

真奥はますます混乱する。店の前まで来ておきながら、傘を返しに来るでもない。袖摺り合う程度の縁しかなかった真奥を追うような女性に知り合いなど……。

「……外見があまりに違いすぎるし、気の迷いかと思った。でも、そのうち気づいたわ」

一人だけ、

「まさかと自分の感覚を疑ったわ。このあたりにいるとは分かってたけど……」

いる！

「あなたの中に残るわずかな魔力だけは、私には隠しようがないわ！」

まさか！

「魔王サタン！　何故あなたが幡ヶ谷のマグロナルドでアルバイトをしているの！」

流れる漆黒の髪、美しく透き通った肌、魔性の物を見逃さぬ双眸、まさかこの女は、

「お、お前……っ、勇者エミリア！」

エンテ・イスラを魔王の手から奪い返した勇者の名こそエミリア・ユスティーナ。エンテ・

イスラの聖女とまで讃えられる勇者が何故笹塚に。
「いかにも私はエミリア！　何故ここにいるかは分かってるわね！」
「ま、まさか……」
「あと一歩で逃した魔王サタンと四天王の生き残りアルシエルを追って世界を渡った！　あなた達を放置しておけば世界はまた闇に閉ざされる！　そうなる前にあなたを倒す！」
「ま、待てエミリア！　話せば分かる！」
「問答無用！　魔王覚悟っ！」
勇者エミリアは、突然ナイフを取り出して真奥に向かって切りかかってきた。間に挟んでいた自転車越しに突き出された切っ先を、真奥は後ろに跳んでかわす。支えを失い倒れたデュラハン号が、突然の粗末な扱いに抗議の騒音を立てた。
「うわっ！　あぶねっ！」
「避けるな！　大人しく殺されなさい！」
「そんなわけに行くか！」
デュラハン号を飛び越えて鳩尾に繰り出されたナイフの二撃目をまた間一髪で避ける。
間合いを取り直した真奥だったが、彼はバイト帰りであるが故に武器など何一つ持っていない。俄然不利な状況であるのは明らかだが、真奥には余裕があった。既にエミリアが今どのような状況に置かれているのか、その武器を見ただけで把握したのだ。

「お、おい、勇者エミリア」
「何、命乞い？　今さら敵と語り合う言葉は持たないわ！」
迫力に気圧されるが、真奥は何とか声を絞り出す。そしてそれは思わぬ効果をもたらした。
「お前、聖剣はどうした」
「……っ」
小さく息を呑む音。
「そのナイフ俺も持ってる。笹塚の百円ショップで買ったんだろ」
「な、何故それをっ！」
エミリアに大きな動揺が走る。手の中のナイフが赤信号に照らされ鈍く光った。
「お前……もしかして聖法気を失ったんじゃないのか？　いや、失わないまでも、無駄遣いできないんだろ？」
「……っ！」
エミリアの歯噛みするような態度は真奥の言葉が図星であることを示していた。
エンテ・イスラから追っ手がかかることはある程度予測していた。流石に初っ端から勇者本人が来るとは思わなかったが、勇者もゲートをくぐりこの世界に渡ってきた。恐らくは真奥達の魔力の航跡を追ってきたのだろう。
「て、でもっ……それはあなたとて同じことでしょう？　あのときとは比べ物にならないほど

脆弱な魔力しか感じられないわ！」
「まあそりゃそうだが……」
真奥はエミリアの言葉に心の中で舌打ちするが、隠しても無駄なので正直に認める。
「聖剣など無くとも、魔力を失いアルバイトで生活する魔王など恐るるに足らず！　覚悟っ！」
エミリアがナイフを高々と振り上げる。
光が、真奥とエミリアを貫いた。

国立西洋美術館の特別展調査が空振りだった芦屋は、パンフレットを状差しに片付け、徳用四百グラム入りうどんをきっかり二百グラムだけ鍋で茹でながら真奥の帰りを待っていた。
冷蔵庫に残された食材だけではとても生きていけない。博物館調査費用捻出のためにも芦屋は芦屋できちんと貯金をしているので最低限の買い物をすることはできるのだ。真奥には内緒のヘソクリである。
「はぁ……今日もなんとかペッパーポテトを持ち帰られるのだろうか……」
開け放しの窓から飛び込んでくる羽虫を追い払いながら芦屋は時計を見た。
「魔王様遅いな」

「で、君が真奥貞夫で、あなたが遊佐恵美さん？　なんであんなとこでケンカしてたの」
「この人を倒すためです！」
幡ヶ谷駅前交番で、真奥とエミリアは警官の渋い顔を前にパイプ椅子に座らされていた。
「あのね、彼氏が何したか知らないけど、刃物は勘弁だよ刃物は、ちゃんと話し合ってだね」
警官のその一言に勇者エミリアこと遊佐恵美は激高した。
「わっ……私とこの男がどういう関係だと……っ！」
「痴話ゲンカかなんかだと思われてんだろ」
真奥は仏頂面で一人ごちる。
「最近そういう事件多いんだからさ、誤解されるよ？　もうちょっと彼氏と話し合って、その、別れるならもっと穏やかにさ」
「だから私とこの人はそういう関係じゃ……！」
交差点での喧嘩を近隣住民に通報され、魔王と勇者は揃って交番で油を絞られている真っ最中なのだった。
解放されたのは痴話喧嘩と決めつけられて小一時間ほど説教された後である。
何か心に重大な傷を負ったらしいエミリアは、憔悴しきった有様で言う。
「……今日はこれくらいにしておいてあげるわ。でも……次は無いわよ」



「今回特に何かあったか？」
真奥の突っ込みをエミリアは受け流した。
「ふん、命が永らえたのを今だけは喜ぶのね。今日のこのときも無駄じゃなかった。あなたの住所は暗記したわ。明日から枕を高くして眠れる日は無いと思いなさい」
「お前それ正義の味方のセリフじゃねぇよ」
あからさまな脅迫に顔をしかめる真奥。ふと思いついて尋ねた。
「そういえばおい、貸してやった傘は」
エミリアは一瞬、何を問われたのか分からない、という表情を作ったが、すぐに思い出したのか鼻で嗤って答える。
「用が済んだら捨ててよかったんでしょ。綺麗に分解して捨ててやったわ」
「ひでぇっ！」
真奥は心の底から悲嘆の悲鳴を上げた。最近の渋谷区は環境美化運動が盛んで、なかなか放置されたビニール傘を拾えないのだ。
「ふん、勇者たる私が魔王に傘を借りて感謝までしたなんて、末代までの恥よ。そんな汚らわしいもの、一秒たりとも手元に置いておくわけないでしょ」
そこでわざとらしく、妙に可愛らしいピンクのハンカチで手を拭ってみせるエミリア。
「魔に属する全てが、私の敵よ。明日から夜道には気をつけることね」

エミリアはまたも勇者らしからぬ捨てセリフを吐いた後、ふらふらと覚束ない足取りで夜の幡ヶ谷に消えた。

「……めんどくせぇなあ」

魔王を追って異世界を渡ってきた勇者。

何故だろう。なんら重大なことが起こる気がしない。明日もバイトだ。

「あー、あいつがいるって知ったら芦屋うるせぇだろうな。しばらく黙ってようかな」

そう呟いてようやく帰路についたのは、もう日が変わってからのことだった。

翌朝にはバレた。

真奥の出勤は昼からだ。なので芦屋が昨夜の売れ残り徳用生卵Mサイズで作った朝食兼昼食の、具もケチャップも無いという意味でスクランブルな卵焼きを食べている最中だった。

呼び鈴が鳴って二人は顔を見合わせる。MHKは昨日来たし、新聞各紙には既に勧誘を諦められている。

家賃や携帯電話料金は引き落とし。ということは、あとは新参の訪問販売しか。

宅配便や郵便という発想が無いのは悲しいが現実なのである。

「どちら様ですか」

芦屋が立って中から声をかける。換気扇が回っているので居留守は使えない。
「どちら様とはご丁寧な挨拶痛み入るわね。四天王にして悪魔大元帥アルシエル」
その声に真奥はむせ返ってしまい、そのせいでスクランブルエッグが気管に侵入し、反射で咳き込み、飛び出したカケラは鼻の裏に飛び込んで一人で悶絶しはじめた。
「な、何者っ！」
芦屋は一瞬でドアから後ろに飛びずさり身構える。
「何者？　そうね、あなたは魔王城での戦いの時も私に向かってそう言ったわ。忘れたわけではないでしょう？　勇者エミリア・ユスティーナの名を！」
「勇者エミリアだとっ！」
芦屋は慌てて真奥を振り返るが、鼻に入った卵が出てこなくて真奥は涙目になっている。
「さぁ！　分かったらこの扉を開けなさい！　大人しく成敗されるのよ！」
信じられないが、自分のことをアルシエルと呼ぶ者がこの日本で真奥以外に存在するはずがない。魔王を追ってくる者がいるのではないかと危惧したことはあるが、まさか最初から勇者本人が現れるとは。
予想外の事態に一瞬慌てるも、アルシエルは魔王軍一の知将である。エミリアの行動の端々から既に敵の弱点を掴み取っていた。
芦屋はドアの施錠を確認し、しっかりチェーンをかけると、共用廊下に面する窓を全部閉め

て換気扇を止めた。
「魔王様、勇者です！　勇者が現れました！」
「こ、こらっ！　アルシエル！　開けろって言ってるでしょ！」
芦屋の行動の意図を悟った勇者の声が焦りに彩られる。
「あー、あー、分かってる、芦屋、ティッシュ取って」
「魔王？　魔王もいるのね！　観念してここを開けなさい！」
キンコンキンコンと呼び鈴が連打されるが、芦屋は意に介さない。
「いかが致しましょう！　まさか勇者が攻めてくるとは！」
「あー取れない。悪い、黙ってたんだけどさ、実は昨日会ったんだ」
「な、なんですって！」
真奥が洟をかみながら放ったなんでもない一言に、芦屋は腰を抜かさんばかりに驚いていた。
「バイト帰りにそこの交差点で襲われてさ。それをケンカだって通報されて、交番に引っ張られちまったんだ。それで昨日帰りが遅くなったんだよ」
「私の人生最大の屈辱よっ！　魔王と……魔王とカップルと思われるなんてっ！」
ドア越しに怒りの波動が飛び込んでくる。芦屋は一瞬ドアに視線を走らせたが、すぐに真奥に向き直り悲鳴のような声で尋ねた。
「そのようなこと、どうしてお報せくださらなかったのですか！」

「いや、別に実害なかったし、それにあいつも俺達と同じみたいだから」
「同じ……と申されますと？」
卵のカケラが入ってしまった鼻の穴をほじりながら真奥は言う。
「昨日あいつは俺を魔王サタンと判断したのに、聖剣を出してこなかった。聖剣は天界の力である〝聖法気〟を吸収する天界の金属〝天銀〟で出来ている。それが出てこないということは」
「……勇者も無駄に聖法気を使うことができない？　勇者もまた天の力を補充する術を持たないということですね」
「そう。まぁ勇者達にしてみれば魔王を倒すために聖法気を使うことを無駄とは言わないだろうが、奴らと俺達では致命的な差があるからな」
「寿命、ですね」
外の怒りの権化が地団太を踏む。共用廊下の安普請の床が抜けてしまいそうな音だ。
「俺達を倒してから寿命を終えるまでに聖法気を再び蓄えられる保障がどこにも無いからな。エンテ・イスラの人間なんて生きて五十年。まぁ日本は女性の平均寿命長いから米寿まで生きたとしても、もうその頃にはこっちが故郷になっちまうだろ」
「つまり勇者もゲートを制御する力が無い、と」
「結果的にはそういうことだ。おい、入れてやれよ。外で泣き始めたぞ」
気づけば外からはおいおいとむせび泣く声が聞こえているのであった。

「ひっどい部屋」
エミリアは部屋に入るなり、鼻と目を真っ赤にしながら勇ましくもそう言い放った。
芦屋は怒りの声を上げそうになるが、真奥は事実だから、と制した。
「物が無いから散らかってないのが救いだ」
「それにしたって、本当にこんなところに男二人で住んでるなんて……」
「魔王城は基本的に、居住性より機能性を重視するんだ」
真奥はようやく鼻から卵が出たらしく、朝食を続けている。
「寂しい朝食ね」
「お前、芦屋は凄いぞ。何も無いところから魔法のように朝飯を作る」
「お褒めに預かり光栄でございます、魔王様」
皿と箸をカチカチならして胡坐をかく真奥の後ろに感極まって跪く芦屋。エミリアはうんざりしたように顔をしかめる。魔王と悪魔大元帥がこんな貧弱な食卓を前に、一体どんな茶番だ。
「バカじゃないの、魔王がスクランブルエッグだけの朝ご飯なんて。せめて食パンくらい買いなさいよ」
「貧乏なんだよ、悪いか」

まったくこたえない真奥。

「悪いわよ！　何よ！　私こんなくたびれた奴を殺すために世界を渡ったの？　最低よ！」

トランクス一枚によれよれのランニングシャツを着て胡坐をかき、中古のカジュアルこたつで朝食をとる真奥の姿にエミリアは泣き崩れる。

陽に焼けきったマンションサイズの六枚の畳。部屋の隅には、畳が傷つかないよう底にしなびたダンボールを挟んだ安っぽい三段重ねのカラーボックスが置いてあり、反対側の壁面は、これまた襖がとことん日焼けした押入れだ。

開かれた窓には網戸とベランダが無く、錆びた柵が申し訳程度にへばりついている。窓枠に所狭しと洗濯物が吊るされていて、大半が型崩れした無地のTシャツと、使い古されたトランクスと靴下だった。それらを洗った洗濯機は室内に設置できずドアの外の共用廊下にある。見回すとトイレと思われる塗装の剝がれた木のドアには、住人以外は使わないだろうにわざわざ『便所』と書かれたプラスチックのプレートが貼りつけられていた。便器は当然和式だろう。

台所には百円ショップで揃えたと思しき薄くてテカテカと光る脆そうなプラスチック製の台所用品や、季節感を無視した陶器の食器が積まれており、明日にでもゴミ収集に出すのだろうか、マグロナルドの紙袋が一杯詰まったゴミ袋が一つ、隅に放られている。

新たなゴミ袋を入れられたステンレス製の花柄のゴミ箱は、リサイクルショップからでも調達したのだろうか、所々へこみがあり、貼りついたまま剝がれなくってしまったガムテープの

貼り跡があった。

手狭な台所を更に圧迫している冷蔵庫は中型の単身世帯用のもので、ドアには『今月のシフト』と手書きされたマグロナルドの卓上カレンダーが、欠けた磁石で貼りつけられていた。

「一人暮らしの私だって、もうちょっとマシな生活してるわよ。働ける男が二人もいて、これは酷すぎるわ」

エミリアは真奥の不甲斐なさを糾弾したつもりなのだが、真奥は全く違う受け取り方をした。

「お前、仲間いないのか」

「うるさいっ！」

エミリアは思わず手元にあったティッシュボックスを真奥に投げつける。真奥はそれをひょいと避け、ティッシュボックスはビニール紐で結ばれたフリーペーパーや就職情報誌の束に当たって情けない音を立てて畳に落ちた。

「本当は……本当は大神官が一緒に来るはずだったのよ！　あなたを倒したら、さっさと帰ることになってたのよ！　それなのに……それなのにっ！」

逃した魔王を追うために、すぐさまゲート突入を決めたのはエミリアだった。

エミリアは先頭に立ってゲートに突入したが、ゲートが彼女一人を飲み込んだ時点で突然閉じたのである。

後ろを振り向いて最後に見たエンテ・イスラの光景は、仲間であった大法神教会〝六人の大

神官〟の一人、オルバ・メイヤーの何が起きたのか分からない、と言いたげな驚愕した顔だった。

「ふうん」

「何よ」

いきなり相槌を打った真奥を睨む恵美。真奥はなんでもない、と首を振り続きを促す。

日本に降り立ってからのエミリアの行動の軌跡は、残された力を節約しながら生活を成り立たせた真奥達と大差が無かった。

違いといえば真奥よりもずっと時給がいいバイトをし、しかもいいマンションに住んでいることくらいだ。

「携帯は？」

「ドコデモよ」

エミリアが取り出したのは、最近発売されたモバイルパソコンに匹敵するという高機能が売りの、液晶パネルをタッチして操作するタイプの機種だった。

「……負けた」

「何がよ」

真奥と芦屋の携帯電話は古い不人気機種で操作性も悪く、申し訳程度のカメラ機能がついているだけだ。携帯電話なんか、通話とメールで十分だという結論に達した故だ。

「て、お前日本に来てどんくらいだ」
「まだ一年は経ってないわ」
「今年いくつなんだ」
「十七よ！　それが何！」
十七ということは日本人なら大半は親の庇護の下、高校に通っている年齢である。
それで何故真奥達より良い生活をするだけの余裕があるのだろうか。真奥は内心首を傾げたが、それを知ったところでどうにかなるものでもないと考えることを諦める。
「まぁこんな世界で人生消費する前に、さっさと帰る手段を見つけることだな。俺たちはお前に見つかったからって引っ越す金も無いから、当分ここに住んでる。この六畳一間の魔王城から、俺の新たな世界征服事業は幕を開くんだ」
箸の先でエミリアを指しながら、堂々とした啖呵を切る真奥。エミリアは部屋の様子を見回した後、疑いと憐憫と警戒を織り交ぜた複雑な表情を浮かべた。
「行儀悪い魔王ね……アルバイトでその日暮しのあなたが、そんなことできるの？」
「俺がいつまでも力で全てを解決するような凡百の悪魔だと思うな。日本で生活する日々で、俺がただ安穏とアルバイト生活を送っていると思うなら、とんだ間違いだぜ」
「えっ？」
疑問の声を上げたのは何故か芦屋だったが、真奥はそれを無視して高らかに笑う。

「俺は、日本を征服するつもりでいる」

エミリアは、ようやく飛び出した〝魔王〟らしい言葉に体を緊張させる。芦屋がそのそぶりに気づき、何が起こってもいいように身構える。真奥のたった一言で高まった緊張。それが、

「いいか、マグロナルドにはな、アルバイトが正社員になれるシステムがあるんだ」

「……は？」

やはり真奥の一言で破られた。エミリアと芦屋は、揃って首を傾げる。日本征服と、マグロナルドの人事システムに一体どんな関係があるというのだ。

「日本では学歴や職歴が社会的地位に大きく影響することはエミリアも知ってるだろう？」

「気安く名前を呼ばないで！　それが何よ！」

「察しの悪い奴め。いいか、この日本で魔力も体力も無い俺が手に入れられる唯一の力、それは〝正社員の肩書き〟だ！」

真奥は、エンテ・イスラを恐怖に陥れた悪魔の哄笑とともに、宣言した。

「いいか勇者エミリア、俺は、この世界で正社員になってみせるぜ」

「……そんなこと、私に言われても……」

エミリアは、どう反応して良いか分からず硬直してしまう。

「いずれ俺は、店長を超える。そして、正社員となって金と社会的地位を積み重ね、いずれはこの日本で、多くの人間を膝下に跪かせる実力者になってみせる。その力を武器に、俺は再び

エンテ・イスラに攻め込むんだ！　どうだエミリア！　お前にそれが止められるか」
芦屋は何も言えずに二人の話を脇で見ていることしかできなかった。
真奥は箸を持ったまま、エミリアは唖然とした表情のまましばし睨み合うが……。
「……バカバカしい」
やがてエミリアから視線を外した。真奥はそれを見て、勝ち誇ったように胸を張る。
「ふん、俺の崇高な志を人間如きが理解できるとは思ってはいないがな！」
「多分、理解したからこんなこと言われてるんだと思いますが……」
芦屋はぽつりと呟く。
エミリアは溜息をつくと、脱力したようにがっくりとうな垂れて言った。
「なんか、疲れた……どうでもよくなっちゃった。今日のところは帰るわ」
赤くなった目を拭ったエミリアは、真奥を睨む。
「でも、勘違いしないでね。あなたを理解したわけでも、見逃すわけでもないわ。私が残った力を使えば、あなたを殺すことなんかいつでもできるけど、それをやるときっと帰れなくなる。帰ろうと思うと、あなたを殺せなくなる。そういうことよ」
「それを俺に言ってどうすんだよ」
わざわざ自分の窮状をさらけ出してどうしようと言うのか。真奥が首を傾げると、エミリアはさも当然のように言ってのけた。

「私だけあなたの事情を知るのはフェアじゃないでしょう」
これには真奥も芦屋も面喰らう。
「それはそれは、ご立派な心がけだな」
「エンテ・イスラへの帰還と魔王討伐を両立できるようになるまで、命は取らないでおくわ。でも油断はしないことね……はぁ」
疲れた表情でエミリアは玄関に向かう。
「それと、日本での私の名前は〝遊佐恵美〟よ。間違えないで」
「あいよ、了解」
ドアを開けたエミリアは立ち去り際、
「それにしても〝貞夫〟って何？　今時の若者の名前じゃないわね」
そう言ってドアを力任せに閉める。埃が舞った。唖然として閉じたドアを見る芦屋。外の廊下から階段を降りる音が聞こえて、やがて消えた。
見えない〝恵美〟の背に向かって魔王はツバを飛ばす。
「日本全国のサダオさんに謝れ！」

※

「いらっしゃいませー、店内でお召し上がりですか？」
「外で話があるんだけど」
マグロナルド幡ヶ谷駅前店は今日もそれなりに繁盛している。朝とは違ってグレーのスーツ姿の恵美が、仏頂面を隠そうともせず真奥のいるレジ前に立っているほどに。
「テイクアウトですね。ご注文をどうぞー」
「今夜バイトが終わったら、昨夜の場所に来なさい、拒否は認めないわよ」
「セットでよろしいですか？」
「一人で来なさい」
「単品ですね、かしこまりましたー、脇にずれて少々お待ちください、ビッグマグロバーガーワンプリーズ！」
「戦うつもりはないわ。必ず来なさい」
「ありがとうございます！　またお越しくださいませー」
恵美はフェア中のバーガーを、きちんとお金を払ってテイクアウトして帰った。
終始営業スマイルを崩さなかった真奥が頭の中で考えていたのは、ただただ『面倒くさい』の一言だった。絶対に話が穏やかに済むはずがないからだ。
「真奥さん」
と、後ろから声をかけられる。

「何？　ちーちゃん」

後輩クルーの佐々木千穂だった。入ったばかりの高校二年生で、研修で真奥が面倒を見たため正クルーとなった後も何かと真奥のことを頼るのだ。

仕事中はセミロングの髪をまとめており、持ち前の明るさと衒いのない素直な笑顔がお客様にも評判が良い。仕事の飲み込みが早いのも真奥のイチオシポイントだ。

「何か、変なお客さんでしたね？」

「今の女……の人？」

「そうです、なんか暗いしブツブツと声も聞き取りにくいし」

「色々な人がいるからね」

「何かお話してたみたいですけど、お知り合いですか？」

恵美は知り合いではある。それは間違いない。考えてみれば十七歳の恵美は、高校二年の千穂とは同い年くらいのはずだ。それなのに何故こうも受ける印象が違うのだろう。恵美の場合、年の割りに大人びている、と言うより、苦労の末に老成している、といった塩梅だ。

「んー、ちょっと、ね」

適当にはぐらかしたい真奥だが、千穂の好奇心は曖昧な返事を許すつもりはないようだ。

「あー、怪しい！」

「何が？」

千穂は真奥を上目遣いに覗き込み、手を後ろで組んで見せる。
「確かにちょっと美人でしたもんね？　ね？　真奥さん、ね？」
「ねって三回も言うな！　ちーちゃん何よ？　俺があの女といらっしゃいませ！」
もはや脊髄反射で何をしていてもお客様ご来店に体が反応する。
「いらっしゃいませ、店内でお召し上がりですか？」
今度は千穂がレジに立った。繁忙時間帯ではないので、仕事ができれば特にレジは誰がやらなければならないという決まりは無い。入って間も無い千穂だが、こういった隙間隙間できちんと仕事を求めて立ち回るのである。真奥は感心して、千穂のために一歩下がった。
赤ん坊を抱えた人の良さそうな母親と、その足元に小学生になるかならないかくらいの男の子。昼のピークのサラリーマンの群れが一段落した後は、住宅街に近い幡ヶ谷駅前店でよく見られる組み合わせだ。
母親がメニューと千穂の顔を交互に見ながら注文を進めていたが、ふと千穂がレジ操作の手を止め、少々お待ちください、と言って真奥を振り向いた。
「あの……真奥さん」
「ん？」
客前で後輩に助けを求められた時には、こそこそ話してはならない。お客様とクルーの間で発生した問題を一緒に話し合って解決することが、クルーの成長にとっても、お客様に与える

印象もプラスとなる。千穂は親子連れに目配せしながら言った。
「お兄ちゃんが、アレルギーを持ってるみたいなんです」
「アレルギーですか、かしこまりました。どのような食材に対して発症するんでしょうか」
事情を説明しているのは千穂だが、それを真奥は千穂を介したお客様の言葉として捉え、敬語で対応する。
「海老と蟹と、あと、果物だそうです」
真奥は頷くと、母親に向けてカラフルなメニュー表を提示しながら解説する。
「海老は法令規定で表示義務のある品目ですので、こちらのメニュー表に表示されているよう、魚介がメインとなるメニュー全てに使用されております」
「へぇ！」
と、母親と一緒に、千穂も感心したような声を出す。
「それから果物ですが、表示を推奨される品目の中にあるキウイ、オレンジ、桃、リンゴの中で、唯一リンゴがいくつかの調味料に使用されております。例えば照り焼きバーガーのソースやサラダのドレッシングなどですね。またこちらのサイドメニューでは、季節のフルーツソフトクリームや野菜ジュースは避けていただいた方がよろしいでしょう」
母親と千穂は真剣に真奥の解説に聞き入っている。真奥は避けるべき食材を使用したメニューを全て指摘した。納得してそれらのメニューを避けて注文を済ませた母親に、真奥は言う。

「ところで、よろしければ電子レンジ、ご利用なさいますか？」
「え？」
「え？」
千穂と母親が、同じように声を出した。真奥は、母親に抱っこされた赤ん坊を見て、
「レンジで調理できる離乳食等をお持ちなのであればと思いまして。お母様もお子様も昼食を召し上がるのであれば、赤ちゃんも一緒の方がと、差し出がましいこととは思いますが」
母親は自分の抱える赤ん坊の顔を見ると、はにかみながら頷いた。
「ありがとうございます。これ、レンジで四十秒で出来上がるので……」
母親は肩のバッグの中から、小さなレトルトパックを取り出す。真奥はそれを受け取ると千穂に手渡し、
「佐々木さん、これ、レンジで二十秒。ご注文の品と一緒に出せるようにしてね」
客前なのできちんと千穂を苗字で呼ぶ。受け取った千穂は一瞬厨房に走りかけて、
「……あれ？　でも四十秒って」
「それは家庭用レンジの話。店のは業務用で出力が家庭用の倍以上だから二十秒で十分だよ」
「わ、分かりました！」
千穂は尊敬の眼差しを真奥に送ってから、厨房へと消えていった。
お会計を済ませ、注文の商品をトレーに載せてお客様に差し出すと、逆にお客様の側から何

度もありがとうと言われた真奥。これもまた、正社員登用への布石、日本征服のための小さな一歩である。確かな前進の手応えを感じていると、

「……何、ちーちゃん」

いつの間にかまた傍らに立っていた千穂が、目を輝かせて真奥を見上げていた。

「真奥さん、やっぱり凄いですね！」

「へ？」

「だってだって！　アレルギーの食材とか何に何が入ってるとか、全部覚えてるんですか？」

「お店の事務室のマニュアルファイルに全部載ってるじゃん」

真奥はなんでもないことのように言うが、千穂の興奮は収まらない。

「でも凄いですよ！　それに赤ちゃんの離乳食のことまで気づくなんて」

「そうかぁ？　そりゃピークの忙しい時は難しいけど、時間のある時はやっぱ、お客さんのニーズに応じた柔軟な接客対応をすることが、長期的にはプラスになるもんなんだよ」

どんな仕事もきちんとこなそうという意志の強い千穂は、感動して溜息をつく。

「なんか格好いいですね真奥さん！　社会人って感じで」

「ハハ、まぁ、バイトだけどな」

今にも背景に薔薇を飛ばさんばかりの尊敬の眼差しを送ってきた千穂は、突然我に帰ったように表情を変えた。


McRonald

「あ、そういえば真奥さんち、昨日地震平気でした？」
「えーっと」
女子高生の話題の飛躍ぶりといったら、異世界を渡るゲート並みに予測がつかない。これは千穂と働くようになってから知った驚きであったが、流石に慣れた。
「別に何も？　住んでるアパートがボロいからルームメイトは大きい地震だと思ったみたいだけど、実際そんなに揺れなかったんだろ？　俺は何も感じなかったし」
「え？　あ……えーと、やっぱりそうなんですか！」
ところが千穂はその答えに驚いたらしい。驚き方が少々不自然にも見えたが。
「学校の友達に聞いてもみんなそう言うんですけど、うちヒドかったんですよー」
「へぇ？」
真奥が聞く姿勢を取ったのを見た千穂は、身ぶり手ぶりをつけて大仰に話しはじめる。
「お母さんが言うには、何か爆発したかもってくらい凄い音と震動だったらしくて、学校から帰ってきたら本棚の上のCDとか全部落っこちちゃってて、もう最悪だったんですよ」
「えー？　そんなに？」
「あ、真奥さんまで疑うんですか」
千穂は膨れてみせる。真奥は苦笑しながら手を振り、
「そういうわけじゃないけど、それで？」

「もう食器とか沢山割れてお掃除大変で、お父さんもあちこち電話かけまくったらしくて」
「なんで電話を？」
「お父さん警察官なんです。昨日は非番で家にいたんですけど、うちが地区の役員で町会緊急連絡係とかやってたんでその関係で色々電話したみたいです。結局区の防災課に問い合わせたら、大したことない地震だって分かってがっくりきちゃって」
「ふうん……」
「真奥さん？」
「……」
「真奥さんってば！」
「え？　ああ、いや、なんでだろうなって。ちーちゃんの家だけそんなんなってるのは確かに不思議だ」
「ですよね！　……と、ところで真奥さん」
「ん？」
今の今までばたばたと慌ただしく話していたと思ったら、急に声のトーンが一段階落ちる。
少し上目遣いになって、
「さっき、ルームメイトって、言ってましたよね？」
と言い出した。見下ろすと、何故か少しだけ目を逸らす。

「ああ。昔からの部下……じゃない友達と」
古い友達とルームシェアで貧乏暮らしをしている、というのは、芦屋と取り決めた対外的な言い訳だ。九割方真実なのだが。真奥は渋い顔で嘆息して続ける。
「それって、か、か、かの……」
「古くさいアパートに男二人で寂しい貧乏生活さ」
「え？　あっ？　あー、なーんだ。そうか、なーんだ。良かった」
「良かったって何が？」
「なっ、なんでもないです！　あ、真奥さんの部屋って一階ですか？」
「いや、二階。友達は、二階なのに揺れを感じなかったから、大した地震じゃないと思ったみたいだけど、ちーちゃんちってマンション？」
千穂は若干引きつったような笑顔で首を横に振った。
「い、一軒家です。あ、その……」
「え？」
「もし……そのよかったら今度……」
「こらこら若者ども」
会話に割り込んできたのは、真奥よりも頭一つ高い長身に、モデル体形。シャンプーのCMに出演していてもおかしくないほどに艶やかな長い黒髪をアップにまとめ、マグロナルドのカ

ラフルな制服を身に纏った幡ヶ谷駅前店店長、木崎真弓だった。
「あ、木崎さん！」
「現在は私語厳禁が鉄則の仕事中だ。ちーちゃん、夕方の店内チェックやったの？」
「あ、しまった、すいません！　すぐやりますっ」
二時間おきに行う店内の整理整頓と清掃チェックを指示された千穂は、慌ててレジ下の棚からチェックシートを手に取り、カウンターから飛び出してゆく。
「まーくんも、ちーちゃんをあまり甘やかすなよ」
木崎は眉根を寄せるが、別に本気で怒っているわけではない。幹部社員がいる時以外は従業員をあだ名で呼び、自分を店長と呼ばせない鷹揚な女傑なのだ。
彼女目当てに店に通う男性客も多く、幾度となくトレーペーパーの広告写真に素顔を載せている名物店長でもある。これだけ抜群のプロポーションと容姿を持っていながら何故こんな場末のファーストフード店で店長をやっているのか、その理由は謎に包まれている。そして年齢と身長と体重のデータは、それ以上のトップシークレットである。
「ようやくシフトに安定して居ついてくれそうな学生だから、あんま厳しくすんなっつったの木崎さんじゃないすか」
そう言った途端、客席の脇にある掃除用具などをしまうスタッフルームのドアの向こうから、色々なものが崩れるような音が聞こえてきた。慌てて掃除道具を蹴倒してしまったのだろう。

失礼しましたー、とドア越しに慌てふためいた千穂の声が聞こえた。

「まぁそうなんだけどな、最近幹部が抜き打ちで店舗チェックに来たりするんだよ。だから、あんまり私語が多いとイザって時に言い訳できないでしょ」

なるほど、恵美のような人間にまで観察されているこの店である。どこで誰に見られているか分かったものではない。

最も真奥は、木崎が幹部社員に言い訳する姿など見たことがないし、幹部社員の方で木崎を避けている気配すらある。

「で、まーくん、レイトタイムのレジチェックは？」

木崎に言われて真奥は、ランチタイムとディナータイムの間の空白の時間帯の、客入りと売り上げを調べるための伝票を打ち出す。伝票を受け取った木崎は、ざっとそれを眺めると満足そうに頷いた。

「うん！　今日は早くも日商目標額を余裕のクリアだ！　よくやった諸君！　今日の一杯は私の奢りだ。ディナータイムも頑張って労働に励みたまえ！　お、そうだまーくん、さっきの接客は文句なしの百点満点だ。引き続き、後輩の模範として頑張ってくれ」

そもそも木崎は、その日の日商と店内環境を良くすること以外に興味が無い人間なのである。だからこそ、真剣に仕事に打ち込み売り上げを伸ばした真奥を正当に評価し、時給を上げる判断を下してくれたのだ。

彼女を越える事が、将来の世界征服の第一歩であると真奥は強く信じている。
「あ、そう言えば木崎さんち、昨日の地震大丈夫でした？」
「地震？　そんなのあった？」
伝票を眺めながらの木崎の返事はその程度。木崎も近くのマンション住まいのはずだが、そんな程度の認識では体感すらしなかったのだろう。
「ま、今はそんなこと、気にしてても仕方ないか」
千穂には悪いが、目下、考えなければいけないのは仕事を上がってからの真夜中の会談である。真奥のシフトは、閉店時間の十二時までだから、恐らく昨夜と同じくらいの時間になってしまうだろう。考えれば考えるほど憂鬱にしかならない真奥だった。

※

「て、話ってなんだよ」
深夜の住宅街の交差点で恵美は仁王立ちで待っていた。昼とは違い細身のデニムパンツとブラウスで手ぶらではあるが、どこから凶器が飛び出すか分からないので油断はできない。
真奥は木崎の奢りの『今日の一杯』であるマグロナルド特製プラチナローストアイスコーヒーをいつでも投げつけられるように右手に構え、

「一つ聞かせてもらおうと思って」
かつ、いつでも逃げられるようにデュラハン号から降りようとはしない。
「あなた、エンテ・イスラに帰るつもりあるの？」
「はぁ？　何言ってんだお前？」
真奥は恵美が何を言い出すのか、はかりかねた。
「当たり前だろ？」
「この世界でずっと暮らそうとは思わないわけ？」
「思うわけねーだろ。いきなり何言い出すんだ」
「今日のあなたの勤務態度、見せてもらったわ」
「どこでだよ！　また向かいの本屋か！」
真奥の疑問に恵美は答えない。
「ハキハキとした物言い、明るい笑顔、店長から信頼され、後輩からも頼られ、確かな実力に裏打ちされた柔軟な顧客対応。正に理想的なマグドのクルーね」
「お前関西人か」
マグロナルドの正式な略称についての争いは、穏やかな日本人をして東西に分断せしめるほどの紛事の火種であると真奥も知っている。ちなみに真奥は東に属する〝マッグ〟派だ。
「今朝のあなたの話、戯言と聞き流しそうになったけど、今日のあなたの様子を見てると、あ

ながち嘘でもないんじゃないかと思ってね」

恵美は肩を竦める。

「このままあなたがこの世界で明るく人生を過ごしてくれるなら、私は無理にあなたを倒そうとは思わないわ。後輩の女の子、可愛い子じゃない？　随分慕われているみたいだけど」

「ああ、ちーちゃんは俺が一人前のクルーにしたようなもんだからな。まだ正クルーになって間も無いけど、仕事の飲み込みも早いし、敬語も綺麗に使えるんだぞ」

魔王とは思えない見当違いなポイントでふんぞり返る真奥。

「あなたがここで人生を終えてくれれば世界は平和よ？　幡ヶ谷駅前店はあなたの力で栄え続ける。私は無闇に戦う必要も無くなる。アルシエルと一緒にこの世界に骨を埋めたら？」

「アルシエルは大切な部下だが、何が悲しくて部下と老後をともにせにゃならんのだ」

「最近そういう生活も流行りって聞いたわよ」

真奥は思い切り顔をしかめた。

「お前は、男二人で終生ともに暮らすような生活を人に勧める趣味があんのか」

「そんなわけないでしょ、言ってみただけよ。とにかく」

恵美は言葉を切る。

「エンテ・イスラを諦めなさい。ここであなたの新しい生活を見つけてもらいたいんだけど」

真奥の返事は素早かった。

「あり得ない。俺は必ず、エンテ・イスラを征服しに戻る」
そこに込められた意志は本物だ。その強さまではまだ失ってはいない。
恵美にもそれは十分に伝わったようだ。
「……分かったわ」
「話は終わりか」
「ええ、終わりよ。私はあなたを殺すまで永久に追い続ける。それが決まっただけよ」
「今に始まったことじゃないだろ」
真奥がデュラハン号のペダルに足をかけ、話は終わったとばかりに踏み込んだその刹那、
「おわっ！」
前輪に衝撃が走り、バランスを崩した。そしてそのまま転倒する。
颯爽と立ち去ろうとしていた恵美すら驚くほど芸術的に横倒しになる。少し場所が悪ければ歩道の縁石に頭を打ちつけていたところだ。
手に持ったままのアイスコーヒーのカップも投げ出して、氷もろとも道路にぶちまけてしまう。
「ちょっと何やってんのよ！」
恵美はほとんど無意識に駆け寄って真奥を助け起こした。
「って！……あー、ビビった。何か踏んだか？」

「あなた本当にそれでも魔王なの、しっかりしなさいよ」
「うるせえ」
驚いて少しだけ涙目になっている真奥を脇に立たせ、恵美は自転車を検めるが、
「残念だったわね、新しい自転車なのに」
スタンドを立てると前輪を指差す。
「あー！　パンクしてる！」
真奥は地面に膝を突き悲しげな叫び声を上げた。
一瞬いい気味だ、と思った恵美だが、
「しっかりしろデュラハン号！　傷は浅いぞ！　買ったばかりで逝っちゃダメだああ！」
安物の自転車相手に真剣に嘆き始めた真奥の泣き言を聞いて、憐れみが先に立ってしまう。
「ちょっと、パンクくらいで大げさよ。明日自転車屋さんに持っていきなさい。チューブのパンクだけなら千円くらいで直してくれるわよ。タイヤ交換だと結構かかるけど」
「ほ、本当か！」
デュラハン号を抱きかかえたまま涙目で恵美を振り仰ぐ。恵美は真剣に身を引き、
「ほ、本当よ、て言うか近い！　離れなさい！　汚らわしい！」
「汚らわしいとか言うな！　でも、そうなのか……じゃあ明日朝イチで直しに行く。悪いな、教えてくれてサンキュ」

「どういたしまして……って何よ！　あなたに礼を言われる筋合いは無いわ！　私はあなたが自転車のパンクくらいであんまり惨めったらしく取り乱してるからつい」

恵美は最後まで言葉を続けられなかった。

「え、地震？」

一瞬、間違いなく二人の立つ地面が揺れた。そしてそれを真奥に確認する間もなく、軽い破裂音がどこかから聞こえ、今度はデュラハン号の後輪が弾かれたのだ。、

「うお！」

「いやっ！」

叫ぶ暇もあればこそ、今度は信号のライトが粉々に砕けた。割れた破片が地面に降り注ぐ音に首を竦める魔王と勇者。

「俺達……」

「……撃たれてる？」

答えは、二人の足元の破砕音で返された。

「おいおいやべぇぞおい！」

「に、逃げましょう！」

二人は手近な小路に飛び込む。火花と炸裂音がそれを追う。

闇の笹塚で、発砲音のしない狙撃が牙を剝いて魔王と勇者に襲いかかった。

「何よ！　一体何がきゃあっ！」
「きゃあじゃねぇよ！　勇者が車止めにつまづくな！」
狙撃から逃げるために、二人はそばのコインパーキングの車で身を隠しながら甲州街道に飛び出た。ここなら人通りはないが、車通りは絶えることはない。
頭上の首都高が天を隠す。シャッターの降りたオフィスビルを背にして二人は息をつくが、
「なんだったの今の？」
恵美が上がった息で尋ね、真奥が上がった息で答える。
「魔王と勇者が揃った場所に謎の狙撃だ。エンテ・イスラ絡みだと考えるのが普通だろ。そうでなくたってこの国は武器の所持に関して異常に法律が厳しいだろうが」
「わかんないじゃない！　不良少年がエアガンか何かでいきなり……」
「今時の不良はそこまで根性ねぇよ！　伏せろっ！」
真奥は恵美の頭を強引に下げさせる。
今の今まで恵美の頭があったのと同じ高さあたりのシャッターに小さな穴が開いた。
「……それにBB弾はビルのシャッターを貫通したりしねぇ」
「ちょっと！　いつまで髪に触ってるのよ！」
恵美は真奥の手を振り払う。真奥は素直に手を引っ込めるが、払われた手をしげしげ眺めながら尋ねる。

「やっぱお前も肉体強度は日本人準拠？」
「どんなに強くなっても、包丁で指切っちゃうし、足の小指を柱の角にぶつければ痛いわよ！」
要するに恵美も、以前のように強靱な肉体ではないのだと解釈する。真奥は本来悪魔なので、通常の人間よりも遙かに膂力も防御力も生命力も高いはずなのだ。しかしそれが標準的日本人の成年男性レベルに落ちていることは、この一年の日本での生活でよく理解していた。
「今、前から来たわね」
「そうとも限らねぇだろ。さっきからお前、銃声聞こえたか？」
「それらしい音は聞いてない……わ！」
言うなり恵美は真奥に体当たりする。そのままもんどりうって二人は同じ方向へ転がるが、一瞬でも遅れたら二人は蜂の巣になっていたはずだ。すっかり風通しのよくなってしまった哀れなシャッターがそれを物語っている。
「大したもんだ」
「これでも勇者よ、バカにしないで」
「それは失礼。それじゃ俺の上からどいてくれ。次の狙撃を避けられない」
「あなたが勝手に私の下敷きになったんじゃない！　言われなくてもどくわよ！」
あんまりな言い草だが、もめている場合でもないので二人は素早く立ち上がり、体勢を立て直した。

攻撃がどこから来ても大丈夫なように、背中合わせに周囲を警戒しながら、恵美が言う。
「駅まで逃げる？」
「そうだな。笹塚駅前ならまだ居酒屋が開いてるから人も大勢いるはずだ。賭けのような気はするが相手がそこでどう出るかだな。走れるか？」
「自転車に乗ってラクしてるあなたよりは健脚のつもりよ」
「よし、行くぞっ！」
走り出した二人に狙撃は追いついてくるだろうか。今まで通行人の姿は無かったが、駅に近づくほどに人通りは増えていった。駅に隣接する居酒屋ビルは煌々と明かりを放ち行き場を探すサラリーマンの群れがそこかしこにたむろしている。
二人は駅舎の壁を背に油断なくあたりをうかがった。通りがかりの中年サラリーマンが二人をはやし立てるような声を上げるが、取り合っている余裕は無い。
結局そのまま十分はその場に固まっていただろうか。周囲に人がいる場所での狙撃は無いと判断するころには心身ともに疲れきっていた。
「なんだったのよ、今のは」
恵美は大きく息を吐く。前髪が汗で額に張りついてしまっているのを払いながら問うと、真奥も荒い息を吐きながら答えた。
「分からねぇけど……ただの狙撃じゃない。魔力エネルギー弾だ」

「魔力……？」
恵美は目を剝いた。
「ビルのとこでお前の頭を狙った一発は、俺達が逃げてきた方角から飛んできて、俺達を追うように向きを変えてきた。それくらいは分かる」
「……ということは」
「相当な力の持ち主。しかも俺とお前の正体を知っている」
「アルシエル以外にそんな奴いるの？」
「いるんだろうな。気配は感じなかったし誰だか見当もつかないが」
真奥はようやく緊張がほぐれ大きく伸びをした。
「やれやれ、お前のせいでとんだ目にあった」
その物言いに恵美が噛みついた。
「何よ！　私のせいだって言うの！」
「お前がもっと穏やかな時間と場所を設定してれば、こんな騒ぎは起きなかったろ」
「あなたがこんな時間までバイトしてるからでしょ！」
「別に朝だっていいじゃん」
「朝と昼は私が仕事してるのよ！」
「知らねぇよそんなことは」

「ちょっと！　どこ行くのよ！」
疲れた顔で立ち去ろうとする真奥を恵美は呼び止める。
「帰るんだよ」
「一人で逃げる気!?」
「当たり前だ。お前は自分ちに帰れよ。好きな時間にこの辺うろついてんだから近いんだろ。じゃあな」
「ちょっ……」
恵美の叫びは笹塚の雑踏に置き去り、真奥は一人家路についた。買ったばかりの自転車を放置するのは気が咎めたが、まだ襲撃者があのあたりを張っている可能性がある。デュラハン号は明日の朝にでも回収するしかあるまい。
そして先ほど恵美には言わなかったが、真奥は今回の襲撃に小さな希望を見出していた。
敵がある程度は自由に魔力を行使できる立場にあることが分かったのは大きな収穫だ。何者かは知らないが、こちらも魔界を統治し、エンテ・イスラ全土を掌握しかけた魔王だ。価値ありと見れば温存している魔力を解放して戦い、敵の魔力もろとも取り込む自信はある。
実際彼はそうやって魔界で力をつけてきたのだ。
明日はバイトも休みである。徹底的に痕跡を洗ってやる。そう心に決め、意気揚々と住宅街の暗がりをアパートに向かって歩き出した時だった。

後方から何者かがついてきていることに気づいた。

襲撃者か？　そう思ったが殺気も魔力も感じられない。同じ方向に帰るだけの酔っ払いだろうか。それにしては意識がこちらを向いているし、一定の距離を保っているようにも思える。

アパートはもう見えているが、魔力が底をついている芦屋を万が一にも戦闘に参加させるわけにはいかない。

彼の力はこれからも必要だ。エンテ・イスラ征服のためにも、笹塚で生活していく上でも。

真奥は住宅街を縦横に走る小道の一つ、街灯の光が当たらない場所に素早く飛び込んだ。近隣住民なら追い抜いていくだろうし、尾行者なら慌てるだろう。

足音は止まらない。そして暗がりの真奥に気づくことなく先へと進んでいく。勘違いだったか、真奥が少しだけ顔を出した時だった。

よりにもよって人影は真奥のアパート、ヴィラ・ローザ笹塚へと向かっているではないか。影は階段前で少し躊躇ったそぶりをみせて二階へと上がっていく。

そして、『真奥－ＭＡＯＵ』の表札を掲げた二〇一号室の扉の前で足を止めた。

「お前よぉ、確かにいつでも来いとは言ったけどよぉ」

真奥は声をかける。真夜中の訪問者は後ろから声をかけられると思っていなかったのか、驚いたように身を竦めて真奥を振り向いた。

「さっきの今で夜討ちだけは勘弁しろよ。近所迷惑だろうが。大家さんだってすぐ近くに住ん

てて、できれば会いたくねぇんだからさ」

「……そんなんじゃないわよ」

先ほどとはうって変わって覇気のない恵美がそこに立っていた。顔面は蒼白である。そして呼吸が浅い。恐ろしく緊張している気配だ。具合でも悪いのだろうか、それとも気づかぬ間に魔力弾を被弾していたのだろうか。

「お、おい、どうした……」

心配になって声をかけると、思いのほかしっかりした言葉が返ってくる。

「あなたなんかにこんなこと頼むのは業腹……それどころか世界への背信なんだけど」

「挑発しにきたのかおのれは」

突然な発言に突っ込まずにはいられなかったが、

「……今日……と、……と……」

「と？」

先ほどまで蒼白だった顔を今度は一瞬で真っ赤にしながら、恵美は俯いて言った。

「と……泊めてもらえないかしら？　その……財布、落としちゃって……」

真奥は顎がはずれるかと思うほどに口を開いて、しばらく閉じることができなかった。

「なっ！　勇者エミリア！」
真奥の帰りを待っていた芦屋は真奥の後ろで沈んでいる恵美を見て身構えるが、真奥は馬鹿馬鹿しそうに手を振る。
「ああだいじょぶだいじょぶ、コイツ今戦うような元気ねぇから」
「何を悠長な！　魔王様ともあろうお方が勇者と二人で朝帰りとはどういうことですか！」
「人聞きの悪い言い方すんな！　まだ二時じゃねぇか！」
「立派な午前様です！」
恵美はドアの前に神妙に立っている。
「さっきそこで二人して襲われたんだよ。魔力弾を操る姿の見えない敵にな」
真奥の端的すぎる説明。しかし恵美には突っ込む元気は無い。
「て、逃げてる途中に財布落としちまったんだと」
その一言に恵美はそのまま消え入ってしまうのではないかと思うほど小さくなる。
「タクシーも捕まえられないしネカフェにも行けない、この辺に知り合いもいないんだと。こいつんち永福町だってんだけど、歩いて帰るには遠いしな」
「し、しかしっ……この時間ならすぐ落としたと思われる場所に戻れば……」
「この前二人で警察に調書取られちまったからな。相手はどこの誰かも分からないが、コイツがうっかり殺されでもしたら、俺達にも厄介の種が飛び火すんだよ。ま、始発で帰るの条件に

隅っこにでも居させてやろうぜ」
　芦屋は頭を抱えた。
「ほら、入れよ。そこら辺に座ってろ。言っとくが客用の布団なんて贅沢品は期待すんなよ」
「……分かってるわよ」
　恵美は小さく呟く。
「エミリア！　魔王様がお慈悲をくだされているというのにその態度……」
「芦屋うるせ、大家が攻めてくるぞ。おい、恵美」
「何よブッ」
　真奥は恵美の顔に向かってバスタオルを投げつけた。
「それでもかぶってろ。枕がほしけりゃその辺のタオル適当に使え。今日のところは千円貸してやるから始発の時間には失せろよ」
　恵美は、真奥が百円ショップで買ったビニール製の小銭入れの中から取り出したしわくちゃの千円札を、絶望と屈辱に歯噛みしつつ受け取った。
「エミリア！　魔王様が残り少ない財産から御下賜くださった千円だ！　大切に扱え！」
「うるさい！　ええ分かってますよ！　頼まれたっていてやるもんですか！　千円どうも！」
「こ、この女……」
　芦屋は耳から蒸気を吹かんばかりに怒り狂っているが、真奥は気にせず自分のタオルケット

を押入れから取り出しかぶる。

それを見て、恵美も何も言わずにバスタオルにくるまって床に腰を下ろす。日本人化しているとはいえ、悪魔の棲家でいきなり横になれるほど無防備ではない恵美だが、身を守るようにたぐりよせたバスタオルは、思いもかけず洗濯したてのいい香りがした。

「……うちと同じ洗剤……」

「ゴワついてんのは勘弁しろよ。芦屋が柔軟剤買ってくれなくてな」

恵美の無意識の呟きを耳ざとく聞きつけたか、寝転がったまま真奥が言う。

「い、言ってみただけよ。返事はいらないわ」

返事があると思わなかった恵美は、慌ててそっぽを向き、殊更に体を縮める。

「へいへい。芦屋ももう寝ろ。おい恵美、出てく時は鍵かけなくていいから。んじゃおやすみお前ら」

言うが早いが、真奥は寝息を立てはじめた。その速さに恵美も思わず唖然とする。

芦屋は二人を交互に見比べていたが、

「私は気を許したわけではないからな。おかしなマネをするなよ！　おやすみなさい！」

トンチンカンなことを言って横になり、主従相似たるとは言え、こちらも即座に寝息を立てはじめた。あれだけこちらを警戒していたくせに、寝姿が笑えるほどに無防備だった。

しばらく二人の寝姿を見ていたが、その間抜けな寝顔に警戒しすぎるのが馬鹿らしくなり、

恵美もまたゆっくりと横になった。
「銀行のカードと、角井のクレジットカードは止めないと……定期はチャージどれだけ残ってたっけ」
落としてしまった財布の中身を思い出して、更に気分が落ち込む。
「……なんで私、こんなことしてるんだろ……」
自分だけに聞こえる声で呟き、それを最後に疲労と気落ちで恵美もまた、睡魔に囚われ夢に落ちていった。
恵美の控えめな寝息が聞こえはじめる頃、真奥は目を閉じたまま呼吸のテンポも変えず言う。
「俺らは二人だけど、どうやらあいつ一人っぽいじゃんか」
「はあ」
「最初は俺らも随分惨めな思いしただろ？　あいつはその道一人で通ったかと思うと、まあ味方してやろうとは思わないが気の毒じゃねぇか」
「まったく、魔王様も甘くなられた」
「今だけだ。その代わりしばらく俺につきまとうなって条件つけたからさ」
「ならば仕方ありませんね」
「素直で結構……ん？」
真奥は視界の隅で何かが光るのを見た。

「いかがしましたか？」
「いや、携帯にメールが」
床に放り出してあった携帯電話を手繰り寄せて画面を見てみると、メールが二通来ていた。
「ありゃ？　片方ちーちゃんだ……なんだよ見るなよ」
一緒に画面を覗き込もうとする芦屋から逃げるように真奥は身をよじらせて、
「もう一つは知らないアドレスだ。誰だコレ」
電話帳に登録されていない、アルファベットと数字がてんでバラバラに組み合わされたアドレスからのメール。間違いか業者かと疑った真奥だが、
「魔王様？」
一瞬にして目つきが真剣になった真奥の横顔に、芦屋が小さく声をかける。
「なぁ芦屋……自分の知っている奴と、知らない奴から同時に同じ内容のメールが送られてくるって、あると思うか」
千穂と謎の人物のメールは、まるで申し合わせたような内容だった。
「件名：なし　本文：地震はまだまだ続く、気をつけろ」
「件名：真奥さんどうしよう　本文：地震がまた起こります。どうしよう　千穂」

魔王、新宿で後輩とデートする

翌朝真奥と芦屋が目を覚ますと、恵美の姿は既に無かった。
恵美が使っていたバスタオルはきちんと畳まれて洗濯機の上にあり、玄関のドアの鍵が、窓の下の床に落ちている。そして台所のシンクの脇には、
「なんだこれ？」
「酢の物、ですか」
こんにゃくとキュウリを切って酢と味噌で和えたものが小鉢一つ分だけ置いてあった。芦屋は作った覚えがない。
「一宿の礼のつもりでしょうかね？　どれ、私が毒見を」
芦屋はかけられたラップを剝がすと一口キュウリを口に運ぶ。
「……ふん、敵ながらなかなかやるではないか」
「美味いの？」
「悪くありません」
「へぇ。俺あんま酢の物って食ったことないけど」
言いながら真奥も一口摘んで味見をしている。
「床に鍵が落ちてるのはどういうことでしょうか」
「多分、出る前に窓を開けといて、玄関の鍵を閉めてから投げ入れたんだろ？　廊下に面してる窓には格子が嵌ってるから鍵開いてても安全だし」

「流石は勇者、品行方正なことで」
芦屋は鍵を拾い上げるとつまらなそうに鼻を鳴らす。
「お前が逆の立場だったらどうするんだ？」
「決まっています。鍵をかけてそのまま鍵を持ち帰ります」
「お前悪魔だ」
「悪魔ですが、何か」

※

京王井の頭線、永福町駅から徒歩七分のマンション、〝アーバン・ハイツ永福町〟の自室、五〇五号室に帰った恵美は、始発の出る時間まで眠りこけてしまった自分に驚愕した。
〝ヴィラ・ローザ〟とは名ばかりの笹塚のボロアパートでも、魔王城は魔王城だ。無用心にも程がある。しかも魔王の金で電車に乗ってしまった。恵美は悔しさに歯噛みする。
「身が汚された思いだわ」
だが残りの小銭で新宿までは出なければならない。何せ恵美は今日も仕事なのだから。
通帳と印鑑はあるのでお金は下ろせるのだが、永福町近辺に恵美が口座を持つ銀行の有人窓口が無いのである。

魔王城の古びた畳の匂いを洗い流すべく恵美は猛烈な勢いでシャワーを浴びた。

出勤までは時間があるが、そうでもしなければ魔に染まってしまう気がしたからだ。

熱い湯を浴びながら、恵美はふと自分の頭を触る。魔力弾の強襲から真奥に助けられた時に触られた場所だ。恵美の頭をボールのように摑んでねじ伏せた真奥を思い出し、身震いする。

新しいシャンプーを買っておいてよかった。普段の倍の時間をかけてシャンプーをし、コンディショナーをぬりたくり、更にヘアパックでトリートメントを徹底する。

真奥に触れられた箇所全てに雑菌でも付着していると言わんばかりに体をこする。買ったばかりの弱酸性薬用保湿美容石鹸がみるみるうちに半分近く削られた。

浴室を出て、バスタオルで髪の雫を吸いながらリビングに入ると、恵美は花柄のクロスを敷いたカジュアルコタツの上からリモコンを手に取りテレビをつける。

どんな田舎で起ころうと、銃撃事件には敏感な日本である。実際には魔力弾なのだが、それでもアスファルトが抉られ、信号が割られ、ビルのシャッターが破壊されているのだ。都内で銃撃事件にしか見えない事態が起きれば間違いなく早朝からニュースで報道されるはずだ。

MHKは鉄道と道路の情報を流していた。首都圏のJRと私鉄各線は平常通りの運行だというから、恵美は出勤において京王井の頭線に大過なく乗るだろう。

しばらくすると報道ニュースの枠になり、やはりトップニュースの扱いで、昨日真奥と話した交差点に多くのマスコミが詰めかけている映像が映し出された。

交差点を警官が取り囲み、進入禁止の黄色いテープが張られている。とばっちりを食ったビルのシャッターの無残な有様も時折映像に挟まれる。報道自体は銃撃が起こったことだけ、原因その他の情報についてはまったく判明していないと述べるにとどまった。

チャンネルを回すと他局のニュースも概ね状況は同じだった。だが、

「なっ！　あいつらっ！」

一つの局のテレビカメラに、野次馬近隣住民に混じって真奥と芦屋の姿が映ったのである。条件反射的にテレビを消したくなるのをじっとこらえる。二人が映ったのは一瞬だったが、何かを深刻な顔で話し合っているように見えた。真奥が芦屋に昨日の状況説明でもしているのかと思いきや、

『……そして交差点の真ん中に両輪がパンクしている自転車が放置されており、事件に関係があるものと見て警察は持ち主の割り出しを急いでいます』

と、現場リポーターの声が流れ、恵美は目を剝いた。

「あの……バカっ……」

さっきの深刻な顔はこれか！　恐らく彼らはこんな大事になるとは思っていなかったのだろう。だから早朝にでも取りに来ればいいくらいに思っていたのがこの有様だ。

警察は自転車を回収し、すぐさま持ち主を割り出すだろう。そしてヴィラ・ローザ笹塚に住む真奥貞夫を見つけ出す。

「ま、関係ないか」

恵美はそう結論づけて、髪を乾かすためにテレビをつけたまま洗面所に戻った。

真奥は一応被害者だし、事件と関係があると思われても別に恵美にはなんの実害も無い。むしろ真奥が警察に捕まってくれれば好都合というものだ。

その間にニュースは変わり、都内で奇怪な格好をした変質者による、女性やお年寄りばかりを狙った路上強盗や、深夜のコンビニ強盗などが頻発していることを伝えていた。耳だけでそれを聞いていた恵美も、その殺伐としたニュース内容に気持ちを暗くしてしまう。

まったく憂鬱な日には、とことん憂鬱なことしか起こらないらしい。

恵美のアルバイトは受信専門テレアポ契約社員だった。

新宿駅東口から歩いて十分ほどのビジネス街にある携帯電話会社大手ドコデモの関連会社のビルにあるオフィスで、主に苦情処理やお客様相談を請け負う部署に所属していた。

苦情処理の受信専門はテレアポでもなり手の少ない分野らしく、恵美はこの世界で得た最初の職にこうして今でもついている。

人手不足の職場なので時給は高く、度胸が据わっており声も美しい恵美は職場では重宝される存在であった。

更に恵美には、この世界の全ての言語を把握する力があった。
聴いたことのない言語が飛び出してきても、概念を脳が理解する一種の精神感応能力だ。こちらの概念をそのまま返せば、相手も分かってくれる。これが傍から見ると英語もフランス語も韓国語も中国語も全てペラペラであるように見えるらしい。
恵美は出勤してロッカールームでグレーのベストにタイトスカート、ブラウスにリボンというデザインの制服に着替え、勤怠コードを『出勤』にすると割り当てられた自分の席に着く。正社員ではないので自分のデスクというものは存在しないのだが、人手が無い職場なので大抵オフィスの同じ島に着席することになる。
「おはよー、恵美」
「あ、おはよ、梨香」
隣の席の同僚、鈴木梨香が声をかけてきた。社員番号が一番違いなので、同じ日に出勤すると隣り合わせの席になるのだ。グレーの制服に明るいブラウンのショートカットがよく映える。
「ねえ、あの銃撃事件って、恵美んちの近くじゃない？」
一瞬心臓が跳ね上がるが、それを顔に出す恵美ではない。
「駅三つ離れてるよ」
「でも都心で銃乱射とかマジないよね。日本もそろそろやばくなったってことかな」
朝のニュースでは『銃撃事件』と呼ぶにとどまっていたが、梨香の中では既に『乱射事件』

になっているようだ。

「最近地震も多くなってきているし、変態が路上強盗とかいう話もあったし、自然も人心も乱れること甚だしいわね。あ、今日、新しいカレー屋オープンするんだけど、知ってる？」

恵美はこの世界の女性の話題の飛躍ぶりにはもう慣れていた。

「んん、知らない」

「下北沢の有名店が進出してきたんだってさ。お昼に行ってみない？」

「えー、でも有名店なら行列するんじゃないの？」

「でも美味しいってよ？」

恵美は日本に来たての頃、食べ物の豊富さと美味しさに毎日驚いていた。その中でもカレーという料理は恵美の常識を超えた正に革命的な美味であり、日本の生活に慣れ親しんだ今でもその印象は変わらない。故に今日の梨香の誘いは非常に魅力的なのだが、今回ばかりは後ろ髪を引かれる思いで首を横に振った。

「ごめん、今日行列に並ぶ時間無いの。財布落としちゃって」

「ええ？　マジで！」

梨香はキャスターつきの椅子が倒れるのではないかと思うほど大仰に驚く。

「定期もキャッシュカードもクレジットカードも全部入ってるってね。そういった手続きとか、あとお金下ろすにも人のいる窓口行かなきゃだし……」

「うわ、それじゃあちょっと行列は無理っぽいね」
「ごめんねー」
「ん、いーよいーよ。んじゃどうする？　マグドとかで済ます？」
「ごめん、マグドだけは嫌」
梨香は恵美にとっては職場の同僚である以上に、この世界でできた最初の友人である。恵美がマグロナルドを「マグド」と言ってしまうのは、梨香の影響によるところである。
真奥から仲間がいないと揶揄された恵美であるが、同じ世界から来た仲間がいないだけで、この職場でできた友人は数多い。その中の一人でもいいから、笹塚・幡ヶ谷周辺に住んでいてくれたら、昨夜あれほどの苦渋を舐めずに済んだのだが。
「でもさ、カード類は早めに止めておかないとヤバくない？」
「もう止めたよ。仮止めだけどね。電話でそれだけはできるんだって」
「そうなんだ。じゃあどこに行くにしろ今日は傷心の恵美に私がお昼を奢ってやろう！」
「いいわよそんな」
そうこうしているうちに始業のベルが響く。
恵美は自分に割り当てられたＰＣの社内メールを確認する。そこにその日の注意事項が記されているからだ。
早くもどこかのブースで着信の合図がある。

ドコデモ傘下なので受けるのは当然携帯電話絡みの問い合わせだ。その日の朝礼メールには、昨夜の都心一部エリアでの電波障害による通話不可能時間帯があったことが記されていた。クレームがつくとすればここである。同じことを考えていたのか隣のブースで梨香が溜息をついているのが聞こえた。

端末を待ち受け状態にすると恵美のブースにも着信が入った。お年寄りが説明書の用語が分からなくて困っている、という類のもの。丁寧に解説を終え、終話した五分後にはまた着信。他のブースからの転送着信で、外国語コードがついている。

この部署の人間は情けないかな、外国語対応は完全に恵美に頼りきりだ。

出てみると、どうやら中国人らしいが、日本語の説明書が読めず、とりあえず書いてある番号に電話した、と言い出した。

そんなこんなで立て続けの問い合わせに淀みなく応じ、気がつくと昼休みの時間が近づいている。問い合わせの数も昼が近いこともあって一段落してきた頃、

「あーもう今日クレーム多すぎ！」

隣で梨香が唸る。

「ちったぁ自分で理解する努力しろっつーのクソジジイ！」

説明書の仕様が親切ではない、とのたまう中年男性と一時間以上もバトルを繰り広げた梨香は、強張った笑顔で何度も自分のブースのデスクを殴っていた。

「で、恵美は今日銀行以外にもどこかへお出かけ？」
「んー」
　このところ昼休みは同僚の誘いを蹴って真奥監視のために時間を費やしている。そのことが急に腹立たしくなり、憤然と宣言する。
「いいえ、銀行だけでいいわ！」
「角井もでしょ？　カード止めなきゃ。で、そしたら角井の近くにオープンしたお好み焼き屋に行こう！　そろそろ並ばずに入れるようになってるはずだから」
「了解、ちょっと待ってね。ここらへんで一番近い銀行……あら？」
　恵美のブースに、また外国語コードの転送着信だ。
「げぇー。昼休み前に最悪！」
「仕方ないわよ。仕事仕事」
　その日の出勤人数によって昼休みを取るタイミングと人数は決まっていて、運悪く長話のカスタマーに当たってしまうと、昼休みの時間を後ろにずらされてしまうのだ。
　あからさまに不満そうな梨香を宥めて、恵美はヘッドセットをかけなおし通話に切り替える。
「Thank you for your calling. This is Emi Yusa Docodemo custmer support room officer. How about your……」
『……遊佐？』

「はい？　あ、はい」

思わず日本語で返事をしてしまう。

くぐもった男の声だ。恵美の名乗った苗字を復唱した男の声は、たった二文字だが間違いなく日本語の概念を送ってきている。

「私、遊佐でございますが……」

『遊佐……か。最早完全に日本人に溶け込んだね。勇者エミリア』

「……っ！」

恵美は息を呑んだ。すぐそばにいる梨香に動揺を悟られまいとするも、喉が思わず震える。

「どちらさまでしょうか」

『勇者と魔王を知る者だよ。そしてお前達をともに滅する企みを持つ者さ』

恵美の記憶にある声ではない。

「そうしますと、昨夜遅くの再三にわたるアクセスは……」

『勇者と魔王が手を取り合って共同戦線を張るとは予想外だった』

「当方と致しましても大変に不本意な結果です」

『くっくっく、まあそうだろうな。いずれにせよ、こちらのことはエンテ・イスラからの刺客と思ってもらって間違いない。昨夜のはちょっとした挨拶さ』

「……」

相手が何者か量りかねて迂闊に答えられないでいると、向こう側の男はとんでもないことを言い出した。

『異世界に渡った魔王サタン、勇者エミリアの抹殺。これは、僕の果たすべき任務であるとともにエンテ・イスラの意志だ』

「なんですって！」

恵美は、エミリアは、驚愕を隠すことはできなかった。

人間の手に世界が戻り平和を取り戻したはずのエンテ・イスラが何故自分を消そうとする？

「……こ、こちらでも……現状を検討しなければお答えはしかねますが……」

『くっく……現状を検討か。勇者と魔王が揃ってあの程度の襲撃で尻尾を巻いて逃げ出す現状をどう検討するつもりか、非常に興味深いね』

暗い、闇の底から轟くような卑しい響き。恵美は悟った。これは、魔の者だ。急に頭が冷却され、勇者としての己を取り戻す。

エミリア・ユスティーナは毅然として答えた。

「アルシエル以外に生き残りの四天王はいなかったはずね。あなたは魔界のどちら様？」

『……』

「エンテ・イスラの意志などと言って私を動揺させるつもりでしょうがそうはいかないわ。私は魔界の声などには耳を傾けない」

『そうか。信じてもらえなくて残念だよ。いずれ、近いうちにね』

思いの他あっさりと通話が切れた。

恵美は大きく息を吐いてヘッドセットを外す。

すぐそばにいた梨香は、恵美が何を言っているのか、一体どういう類の電話を受けたのか分からずに目を白黒させている。恵美はそんな梨香に一言。

「本当に世の中色々な人がいるわね」

「ふ、ふーん」

梨香は目を白黒させつつも、追及しない方が良いと判断したらしい。

そうこうしている間に昼休みの時間になった。まだ少し戸惑い顔の梨香に恵美は殊更に笑顔で言う。

「ごめんね。どうする？　先にお昼済ませちゃお？　どうせこの時間銀行混んでるから」

「そうね……恵美がそれでいいなら」

ロッカールームに向かいスモールトートに携帯電話と通帳、印鑑を入れ、出かけようとした途端に恵美の携帯電話が震えだした。

思わず心臓が跳ね上がる。強気を装うもののやはり今の謎の人物からの着信は確実にエミリアの日本での生活に影を落としたらしい。

「電話？」

「うん……」
着信画面を見ると知らない固定電話の番号だ。都内からの発信である。
「出ないの？」
「何か……すごくイヤな予感がするの」
電話は鳴り続ける。取るしかない。
「……もしもし」
『もしもしー、こちらは遊佐恵美さんの携帯電話でしょうか』
恵美の緊張の度合いがわずかに緩む。さっきの声とは違う、人の良さそうな中年男の声だ。
「はい、そうですが、どちら様でしょう」
相手は予想外の返事をよこした。
『お忙しいところ恐れ入ります、私は代々木警察署の者ですが』
「は？」

恵美はイライラと案内された待合室で待つ。眉根は若い恵美の額に彫刻刀で彫ったかのごとく深い皺を描き出している。
不機嫌というオーラがまるで目に見えるかのような恵美の態度は、代々木警察署正面玄関受

付の婦警を一歩引かせたほどだった。

「お待たせしました」

やがて一人の制服警官が待合室に現れ恵美に会釈をした。残念ながら今の恵美にそれに答える心理的余裕はない。

「ご足労おかけして申し訳ありません。これも一応手続きでして」

「はぁ」

「ええと、身分証明書の確認を、失礼します……。はい。てはこちらの書類に住所と氏名をお書きいただいて、こちらに押印を……」

何故今日の私は保険証と印鑑を持参しているのだろう。銀行のキャッシュカードの再発行手続き以外に使うはずではなかったのに。

書類が引き裂かれそうな程の筆圧で署名し、差し出された朱肉を押し破らんばかりに印鑑で捺り、机まで貫く勢いで捺印する。

そんな恵美の心中を知ってか知らずか、恵美の様子に若干の動揺をにじませつつも、警官は善良なる市民に最後まで笑顔を向けた。

「はい、これで身元引き受けの手続きは完了しました。真奥さんと芦屋さんは別室で待機していますので、ご一緒にお帰りいただいて結構です。また何か分かりましたらお話を伺うこともあるかもしれませんが」

「一緒になんか帰りません！」
恵美は警官に噛みついた。

「いやー、悪いな。他に思い当たらなくてさ」
「本当はこんなことで、貴様を頼りたくはなかったのだがな」
警察署の入り口で真奥と芦屋はいけしゃあしゃあと言ってのけた。
「アパートに刑事が来た時はマジで焦った焦った。まさか自転車からうちを割り出すとは、やるな日本の警察」
「しかし予想通りでしたね。勇者が年齢でサバ読んでいたのは」
「言った通りだろ？　未成年じゃ保護者の許諾と二人以上の保証人がいないとマンション借りられないからな。何かの術で誤魔化すにしろ、絶対二十歳以上って戸籍登録してると思ってた。でも確かサバって下に読むんじゃねぇの？」
「そもそもなんで〝鯖〟なんでしょうね？」
「どうでもいいわよそんなことっ！」
恵美の絶叫に真奥と芦屋は思わず耳を塞ぎ身を竦める。
「なんで……っ、なんで、私が……私が」

恵美は怒りに打ち震える。
「なんで勇者たる私が魔王一派の身元保証人にならなきゃいけないのよっ！」
「ば、バカっ！　声がでけぇよ！」
周囲の人々の注視に曖昧な笑いを浮かべながら、真奥は恵美を警察署の外に押し出した。
「仕方ないだろ！　他に思い当たらなかったんだから！」
「マグロナルドの木崎店長という案もあったが、被害者扱いとはいえ警察沙汰を咎められて魔王様がクビになっては大変だからな」
「まあ木崎さんそんな人じゃねぇけど、迷惑かけたくねぇしな」
だがそんな言い訳に耳を貸すような恵美ではない。そもそも魔王の言うことにいちいち耳を貸していては勇者など務まらない。
「何よそれ！　私になら迷惑かけてもいいって言うの！」
「そりゃお前、魔王ってのは勇者に迷惑かけてナンボだろう」
何をしたり顔で言うのか、恵美は頭をかきむしる。
「どこで私の番号知ったのよ！　まさか昨夜私の携帯を盗み見たんじゃないでしょうね？」
「そんなことするか！　この前二人して交番に連れていかれた時電話番号書かされたろうが」
「だからって普通私を指名する!?」
「他にいなかったんだって。俺達もダチいないから仕方ねぇだろ。いいじゃん昨日泊めてやっ

たじゃんか」
「っ～～～！」
「そう言やお前、それ職場の制服か？　勇者がＯＬやってるってなんか面白いな」
「どうでもいいっ！」
恵美は制服のリボンを毟り取ると頭を抱える。
「落ち着けエミリア。勇者ともあろう者が情けない」
「あなたに言われたくないアルシエル！　まだ月の頭なのに何よ、あのすっからかんの冷蔵庫！　魔王軍一の知将が聞いて呆れるわ！　もうちょっと計画的に買い物しなさいよ！」
「うぐうっ！」
アルシエルは何かよく分からない形で致命傷を受けてその場に崩れ落ちた。口の中で私のせいじゃないのにとかなんとかブツブツ呟いている。
「気をつけなさいよあなた達！　今日私の仕事場に脅迫電話が来たわ！　狙われているのは魔王、あなたも同様よ！　せいぜい用心することね！」
「なんだって？」
問い返す真奥には構わず、恵美は腰に手を当て胸を張って、人差し指を突き出した。
「警告はしたわ！　でも忘れないことね！　魔王を倒してエンテ・イスラを平和に導くのは勇者であるこの私よ！」

「その志は買うが、頼むから公衆の面前だという現実を忘れるな」
うろたえる真奥、崩れ落ちて泣いている芦屋、真奥に向かって指をさし、朗々と大人げないセリフを吐く恵美。
警官や訪問者の冷たい視線を受け、恵美は瞬時に首から耳の先まで真っ赤になる。
「と、と、と、とにとにかく気をつけなさい！　私が言いたいのはそれだけよ！」
「ご忠告どうも……」
真奥の気のない返事も聞かず、恵美はスモールトートバッグを振り回しながら大股の早足で逃げるように去っていった。
「俺と、あいつ。両方を狙ってる？　しかも、電話をかけてきた、か」
真奥は恵美にしてやられて立ち直れない芦屋を立たせると、
「おい、しっかりしろ芦屋」
「私の……私のせいじゃないのに……私の家計簿は完璧なのに……」
「しっかりしろ！　とにかく帰るぞ。この後ちーちゃんと約束があるんだから」

※

「くっそ、警察のせいで貴重な休日の時間を無駄遣いしてしまった」

「いいじゃありませんか。タダでパンクを直してもらえたのですから」

警察署からの帰り道、真奥は返してもらった自転車を押しながら文句を垂れている。

真奥は確かに警察署で事情聴取こそ受けたが、決して犯人と目されているわけではなく純粋に被害者として取り扱われた。

自転車を交差点に放置した理由は、魔王としては屈辱の極みの言い訳ではあったが、

「怖くてワケもわからず逃げ出した」

と弁解したところ担当の警官は、さもありなんと同情してくれた。まさに屈辱だ。

アパートの部屋に戻った二人は、これからの懸案について話し合う。

恵美が泊まった夜に来た、千穂と誰のものか分からないメールの内容は、両方とも地震に関することだった。

真奥は両方に返信を送ったが、正体不明の差出人からの折り返しは無く、一方の千穂からは、

『遊びや空想じゃないんです、本当に地震が起こりそうなんです　千穂』

と微妙に要領を得ない慌てた様子のレスポンスが返ってきた。何故全てのメールの末尾に、〝千穂〟と絵文字で飾られた署名が入っているのかは分からない。

その後、何度かのやりとりで近日中に大きく地震が起きるかもしれないことと、自分がそう思う理由を述べるメールが送信されてきたが、真奥は直接話を聞かなければ要点が分からないと判断し、今日の夕方、会うことになったのだ。

「結局その佐々木さんはなんと言っているんですか」
「声が聞こえたんだとさ」
「は？」
「男の声で、変な警告じみたことを言われたんだとさ」
「どういう意味ですか。まさか映画やアニメじゃあるまいし、普通の女子高生が都合よくどこかのテレパシーを受信できるようになったわけではありませんよね」
「俺もちーちゃんに、青少年にありがちな電波入ったかと思ったがな」
真奥は苦笑する。
「もっと大仰なこと言ってくるかと思ったけど、ちーちゃんに変なことが起こるようになったのは、マグロナルドでバイトしはじめてからって言うんだ」
「つまりは、魔王様と接触するようになってから、妙なことが起きはじめた、と？」
「接触ってなんか嫌な言い方だが、そうとも取れるってことだ。耳鳴りが頻発したり、ちーちゃんちだけ地震が極端に大きかったりな。ほら、俺はこう見えても魔界の王だろ？」
「そうですね。そう見えても」
「……俺は本来ならいるだけで周囲の生命体になんらかの影響を与えてもおかしくないはずだからな、魔王なんだし」
事情を知らない人間が聞けば、真奥の方が、電波が入っているようにしか聞こえない。

「なら何故マグロナルドの他のスタッフには何も起こらないのですか？」
「さぁ？　本人達が気づいていないだけかもしれないし、ちーちゃんの言うことが勘違いだってことも十分あり得る。だが魔力弾で襲われたばっかりだし、恵美のところにも脅迫電話が来たんだろ？　敵が誰だか分からないが、こっちの身辺調査をした上でプレッシャーをかけてきている可能性もある。それに最悪……」
「佐々木さんが敵の尖兵かもしれない、と？」
「考えたくはないがな。どちらにしろ、どんな小さな可能性も見逃しちゃならんてこった」
「理解しました。しかし……それなら私も同行させていただきます。万が一、昨夜魔王様を襲った者が関わっているとしたら、警戒の目は多い方がいいでしょう」
「お前そんなこと言って、ちーちゃん見てみたいだけだろ」
真奥は意地悪い顔をして芦屋を突くが、芦屋は軽蔑したように鼻を鳴らす。
「ええ、私が出歯亀しなければ、きっと魔王様は銀行にお金が無いことを忘れて見栄を張り、佐々木さんに色々奢ってしまうでしょうからね。それに万が一何者かが現れたとして、発見し次第速やかに処置しなければ『魔王サタンは女子高生とデートしていた』などと敵に後ろ指を差されかねません」
偉大なる魔王サタンも、正論の前には沈黙せざるを得ない。
「それで、どこで何時に待ち合わせて、何時にお帰りですか」

「お前は俺のお袋か！　今日は部活があるとか言ってたから、五時に新宿の東口だよ」
「まだ時間がありますね。では魔王様、出かけましょうか」
「は？」
帰ってきたばかりなのにまたいそいそと身支度を始める芦屋に真奥は首を傾げる。
「買い物と床屋ですよ。仮にも魔王サタン様ともあろう御方が、全身ユニシロのまま髪も整えずにデートに行くおつもりですか」
「いいじゃねぇか髪とか服とか。お茶して話聞いてさよならだぞ！　別にそんな……」
「年頃の女の子は深刻な悩みを気心の知れた友達以外には絶対に話しません。両親にもです。それなのに魔王様にそれを話した、その意味が分からない魔王様ではありませんよね」
そう詰め寄られて分からないとも言えない。
「わ、分かります、はい」
「それは良かった。私としても人間の小娘如きに自分の主がオフで服装に気を使わないなどと思われたくはありませんからね。如何なるときも威厳を大切にしてください。衣はボロでも心は錦。馬子にも衣装です」
言いながら颯爽と玄関を出る芦屋の背に向けて真奥は怒鳴った。
「アパレル業界成長率ナンバーワンのユニシロと、俺に謝れ！」

恵美の勤めるコールセンターの受付時間は、土日祝日は十七時まで、その三十分後が恵美の退勤時間だった。

真奥と芦屋のおかげで昼休みを全力フルスイングで棒に振った恵美のその後の仕事ぶりは著しく精彩を欠き、隣の梨香が体調を心配するほどに顔色も優れなかった。

「ね、今日は早めに帰って休みなね？」

「……うん、そーする」

「何があったか知らないけど、元気出しなよ？」

「ありがと……」

恵美の返事は弱々しい。

梨香に見送られて夕方の雑踏ひしめく新宿を、人の波に流されるまま歩いてゆく。

何が悲しくて仇敵の身元保証などせねばならないのか。社会の荒波にまさしく流されるまま、気がつけば魔王といくつもの公的な書類上で近しい存在であると記録されてしまった。

屈辱の極みである。

恵美の利用する京王線の改札は新宿西口にある。東口方面からは地下通路を通ると信号や人ごみに遮られずに進むことができるので、恵美は必ずこの地下通路を使っているのだが、今日ばかりは地下への急な階段が奈落への入り口に見えて仕方がなかった。

「……もう嫌」

だから地下連絡通路に降りた時、商店や飲食店が並ぶ一角で一瞬視界の端を通り過ぎた人物を、恵美は疲れのせいにして見逃してしまおうかと思った。しかしそれは勇者の誇りをより傷つけるだけだと思いなおし、弱くなった心を叱咤しながらその人物に後ろから近づきその肩を思いっきり引っ張った。

「こんなところで何してるの芦屋」

「うおわぁっ！」

アルシエルの人間型は、こうして街中で見ると頭一つ背が高い。

「え、え、え、エミリ……」

「遊佐恵美、よ。人前で迂闊に本名呼ぶとか、注意力足りてないんじゃない？、芦屋さん？」

「ぐ、ぬ」

芦屋は複雑な表情で呻く。

「今のあなた、あからさまに怪しいわよ。誰か尾行でもしてるのかと思ったわ」

「うぐっ！」

芦屋の顔が一層強張る。

「あら図星？　だとしたらよく警官に職質されなかったわね」

恵美が芦屋に気づいたのも、一重に自分の体を柱の陰に隠しながら顔だけ通路に出してあた

りをうかがうようなベタなマネをしていたからだ。子供の鬼ごっこだってもう少しスマートに周囲を索敵するだろう。

「き、貴様には関係あるまい！　失せろっ！」

そしてその慌てっぷりを見るに、芦屋にとって相当マズい場面を見つけてしまったらしい。

恵美の勘は放置してはならないと告げていた。

「あら、それが身元保証人になってあげた人に対する言葉かしら？」

「おのれ！　賢しらに小さな恩を振りかざしおって！」

「悪魔ってのは本当に恩知らずなのね。第一そんなことがなくたって、勇者たる私があなた達を見つけて放置しておくと思う？」

「思わんがここは一つ私の顔に免じて」

「あなたの悪魔時代の顔知ってる私に何を免じろって言うのよ」

恵美はもう芦屋を無視することに決め、芦屋が覗き込んでいた通路を見る。

「あっ、こ、こらっ！」

慌てふためく芦屋を抑えながら恵美が見ると、丁度芦屋がいた位置からは、小さなカフェが真正面に見えた。どこにでもあるチェーンのカフェだが、その、外に面した窓際の席に……。

「ちょっ……」

恵美は息を呑んだ。

「あああああ、魔王様、申し訳ございません……」
後ろで芦屋の嘆き声がする。
「あ、あ、アルシ……芦屋っ！　あれどういうことっ？」
「知るかっ！　自分で考えろっ！」
「何をどう考えろっていうのよっ！」
そこでは衝撃的な映像が展開されていた。真奥と、真奥が『ちーちゃん』と呼んでいた、マグロナルドの女子高生が、カフェで仲良くおしゃべりしているのである！　どこからどう見てもデート中のカップルにしか見えない。真奥はまるで雑誌の大人の男特集から抜け出てきたようなお洒落さんに大変身していた。そのビフォー・アフターたるや、テレビのバラエティー番組でも滅多にお目にかかれないほどの変貌ぶりである。
「あ、あなた達っ！」
「な、なんだっ」
振り返った恵美の表情の険悪さに、芦屋は思わず一歩身を引く。
「あの女の子に一体何をするつもりなの、このゲスっ！」
「げ……！」
女で、しかも勇者であるとは思えぬ恵美の突然の暴言に芦屋は立ち尽くした。
「悪魔や魔王のあなた達があんな可愛い女子高生連れまわして、かたや見張って、この変態！」

「へんた……え、エミリ……いや、遊佐！　頼むから話を聞……」
「ちょっとでもあなた達が日本で真面目に生活してると思った私がバカだったわ！」
「ご、誤解だっ！　お前が何を考えてるか知らんが、魔王様は決してヨコシマな考えであしているわけでは……」
「ヨコシマじゃない魔王がいてたまるもんですかっ！」
恵美の言うことはまったくもって正論である。
「頼むから話を聞いてくれっ！」
芦屋は半分泣きそうになりながら、いきり立つ恵美にことのあらましを説明しはじめる。
件の女子高生は佐々木千穂という名の真奥のアルバイト先の後輩であり、向こうから真奥に対して相談を持ちかけたということ。真奥は魔力回復のヒントを得るため、彼女の悩み相談に乗っていて、決して危害を加えるつもりはないことなどを悪魔なりに誠心誠意説明した。
恵美は芦屋の言葉を鵜呑みにするつもりはなかったが、すぐさま魔王討伐に突撃するのだけは思いとどまった。
「わ、分かってくれたか」
それを見て恐る恐る尋ねる芦屋。
「私の宿敵が非常に情けない状態に陥っていることだけは分かったわ」
「ぐぬっ……め、面目ない」

「謝っちゃったし。てもなんてデートする必要があるの。話を聞くだけなら電話なりメールなりで済んだんじゃないの？」

「私もそう思った。だが向こうが直接話したいと言ってきたんだから仕方ない。様子を見るに、あの佐々木という少女は魔王様に少なからず好意を抱いているらしい」

「でしょうね」

「む、そこはなんとも思わないのか」

悪魔である自分には十分重大な事実をさらりと流した恵美に意外そうに言うと、何故か恵美は目を三角に吊り上げた。

「私が特別な感想を抱かないのが何かご不満？」

「い、いや、そういうわけでは……私が、人間の少女如きが魔王様に恋慕するなど、不遜も甚だしいと思っているだけで……」

「私は逆に、なんであんな可愛い子が真奥ごとき甲斐性なしに、って思うけどね」

「ま、魔王様を侮辱するか！」

「勇者ですから。それはともかく、あれ見てそれが分からない女はいないわよ。遠目だから分かりにくいけど、あれ、この夏流行の形のワンピだし、髪も美容院行ったばっかりって感じに整ってるし、靴も新品よね」

「な、何？　そ、そうなのか」

三十分以上尾行している芦屋はそんなことはまるで気づいていなかった。
「男の人には分からないでしょうね。素材で初夏の爽やかさを出して、フィット感でボディラインを強調する……」
そこで恵美は、突然言葉を切った。窓越しの千穂の姿を凝視し、思わず呟く。
「どうした、遊佐」
「……大きいわね」
恵美は無意識に自分の胸に手を当ててしまい、
「何がだ？」
首を傾げて尋ねる芦屋の声で我に返った。
「えっ？　な、なんでもないわよ！　大きくたって戦いで役に立つことなんか何もないわ！」
「は？」
「ち、小さい方が鎧の胸板とかも安く作れるし、動くのに邪魔じゃないし」
「……なんの話だ」
「なんでもないわよ！　そ、それより、こ、こうして見ると人間型の魔王もそこそこ見られるじゃない。いつものユニシロと違って良さそうなの着てるし！」
自分の意識の方向性を変えるためにも、恵美は強引に話題を振った。恵美の態度をいぶかしんでいた芦屋も、主を褒められて悪い気はしなかったらしく、意気揚々と胸を張る。



「私が雑誌を読んでコーディネートした。人間の少女如きに主の普段着がダサいなどと思われたくないからな。こんなときのために、私もちょいちょい単発のアルバイトをしていたのだ」

恵美は持っていた鞄を取り落としそうになるくらい脱力する。

「……で、どうなの、あの子の話から何か得られそうなの？」

「知るか。私は後を追って不審な奴がいないかチェックしているだけだ」

「目下あなたが一番の不審者よ。悪魔ならここから店内の会話とか聞こえたりしないの？」

仮にも魔王腹心の四天王にして悪魔大元帥であるアルシエルだ。芦屋の正体を知る恵美には当然すぎる質問だった。しかし、

「無茶を言うな。悪魔の超能力は魔力あってこそだ。魔力を失っている私にそんな化け物じみた聴力があるわけないだろう」

大威張りで情けないことを言う悪魔大元帥を途中から無視し、恵美は考える。

魔力回復の手がかりを魔王一派に見つけられるのは大変よろしくない。自分の聖法気補充のメドが立たない中で大きな力を取り戻されたら、今の恵美では太刀打ちできるかどうか分からない。

かと言って、今のうちに真奥を仕留めたとしても、エンテ・イスラに帰るか、この国の官憲を騙しおおすだけの力を残せるかどうかも分からない。

何せ芦屋と違い、真奥からはまだ、彼を魔王と判断できるだけの魔力を感知できるのだ。真

奥が残存魔力の総量を擬装している可能性も十分考えられる。
ならば、取りうる手は一つだ。
目の前の危険、即ち魔王一派が魔力回復の手段を見つけたら、それを先回りして潰す。対処療法でしかないが、手を拱いてただ見ているよりはずっとましだ。
「芦屋」
「な、なんだ」
「こんなとこで見張ってたって、なんの意味もないでしょ、ついてきなさいよ」
「ついてって、どこに」
「二人のいるカフェよ、決まってるでしょ。あの子も疑わなきゃいけないなら、すぐ近くに陣取って話を盗み聞きながら周囲を警戒するくらいじゃないと尾行とは呼べないわよ」
「な、なんだと！　そんな大胆なこと後で魔王様になんと申し開きオイちょっと待って！」
恵美は多少強引な論法を展開し、嫌がる芦屋の襟首を掴まえると、そのままずるずる引きずってカフェへと入っていったのだった。

芦屋が恵美に見つかる三十分前のこと。偉大なる魔王サタンは後輩バイトの女子高生、佐々木千穂と新宿アリタ前で落ち合っていた。

「あれ？　ちーちゃん髪切った？」
「はい！　思い切って短くしてみました！　どうですか？」
つききりで仕事を教えていた真奥だからこそ分かる程度の微妙な変化を起こすのに、どれほど思い切った決意が必要だったかは分からない。だが普段は学校の制服か、マグロナルドの制服姿しか見たことがなかったので、下ろした髪とスッキリしたラインのワンピースはなかなか新鮮に映る。
「うん、似合ってるじゃん」
「やったっ！」
素直にそう返すとガッツポーズを作る千穂。
「でも、学校の制服とかで来るかと思ってた。今日部活なんじゃなかったっけ」
特に深く考えずにそう言った真奥だが、ガッツポーズの千穂は頬を膨らませる。
「そんなわけないじゃないですか！　理由はどうあれ折角真奥さんとお茶できるのに、あんなダサい制服なんて絶対ナシです！　それに、新宿で制服姿のまんま男の人と歩いてたら、下手したら補導されちゃいますよ？」
突然怒ったような口調で諭してくる千穂。真奥は出勤してきた千穂の高校の制服姿を見たことがあるが、そんなに酷いデザインだった記憶は無いので目を白黒させる。
「真奥さんも、ユニシロばっかり着てるのかと思ってましたけど、今日はいつもより格好いい

じゃないですか」

悪気は無いのだろうが、何か引っかかる物言いに真奥は苦笑した。

「同居の奴が、デートにユニシロはナシだとか言い出して」

「ユニシロも悪いわけじゃないんですけど、上から下まで全部ってのはよほど上手に組み合わせないとダメです。と言うか、デートだと思ってくれてるんですね！　やったっ！」

何がやった、なのか、ユニシロの何がいけないのか、これは本当にデートなのか、何も分からないまま真奥は曖昧に頷いた。

「とは言っても、晩飯までには帰るんだろ？」

「まあ、そうなんですけどお……」

千穂は不満そうに頷く。そこだけは千穂が高校生である以上仕方ないことだからと納得させた。真奥でも渋谷や原宿で遅くまで遊び呆けている女子高生など、全体から見れば僅かな割合に過ぎないことを知っている。

「どうする？　まさか外で立ち話ってわけにもいかないけど、普段外食とかしねぇからゆっくり落ち着けるところってマッグしか知らないんだ」

千穂もそのことは予想していたのか、特に何も言わずに少し考えて言った。

「じゃあ、カフェ〝怒濤流〟行きましょう。安いし、そこそこ落ち着けるんですよ」

怒濤留ならば真奥も存在だけは知っている。

「大丈夫です！　今日は相談に乗ってもらうんですから、私が全部奢りますよ！」
普段から貧乏オーラを目に見える勢いで放出する真奥を気遣っての言葉なのだろうが、流石に真奥も大人としての、何より魔王としてのプライドがある。
「大人ナメんな。それくらい奢るのはなんでもねぇって」
やはり芦屋の予想は当たってしまった。
「それじゃ行こうか」
最寄の怒濤流は少し靖国通りを歩き、地下連絡通路の飲食店街に入った場所にある。
「あ……ま、真奥さん」
「ん？」
歩き出そうとした真奥を千穂が呼び止める。
「あの……えっと」
「何？　どうしたの」
「……て」
「て？」
千穂は少しだけ俯いて、何故か顔を少し赤らめて歯を食いしばっている。真奥は一瞬千穂が大声でも上げるのかと思ったが、出てきたのは意外な一言だった。
「手……繋いで……いいですか」

さっきまで元気一杯だったくせに、突然蚊の鳴くような声。真奥は首を傾げた。
「そんなことか、いいよ別に」
なんでもないようにひょいと千穂の右手を取ると、千穂が一瞬驚いて体を強張らせた。
「どうした？」
「え、あ、いえ、やった！　あ、な、なんでもないです！　ありがとうござ……」
「人ごみ凄いもんなー。こうしてねぇとはぐれちまうよな」
「っ……」
コロコロ変わる千穂の表情に真奥は千穂の真意がいまいち読み取れない。コマ落としのように、驚き、喜び、無表情、何がしかの諦め、と目まぐるしく変わっていった。
「……ですよねー。なんか、分かってました」
真奥はそんな千穂の顔を覗き込んだ。すると千穂は目を見開き真奥から距離を取ろうとする。しかし、手を繋いだままなのでままならず、うねうねと体をよじるだけになってしまった。
「今日のちーちゃん、なんか変だぜ？」
「そ、それはきっと、悩みがあるからです！」
不自然に目を逸らしながら、真奥を引っ張って歩きはじめる千穂。
「そっか、そりゃそうだよな」
だが真奥はそれをそのまま鵜呑みにし、



「はあ……」

千穂がつく複雑な色の溜息を聞きながら、真奥は千穂を観察する。

一見して千穂自身にはなんら魔力的事象は顕現していない。生命体としての変質も認められないし、こうして直に接触していても、千穂自身になんらかの変異があれば手から感じられるであろう真奥の魔王としての残存魔力になんの反応も無い。

変化らしいものは、掌から伝わる体温が真奥より高いことと、妙に脈拍が速いことくらいだ。

そうなると、あとは何者かが外部から千穂に干渉している可能性を考える必要がある。真奥や恵美を襲った敵、もしくはまったく無関係の魔力事象が千穂に働きかけているのかもしれない。

全ては千穂の言うことが本当なら、という前提つきではあるが、

どちらにせよ現時点では不審な様子もうかがえないので、まずは話を聞いてみるほかない。

新宿東口には、JR新宿駅を中心に地下商店街が広がっている。手近な階段から降りていくと、丁度昼時と夕方の間の時間であり、飲食店街の人通りは多くはない。

幸いカフェ怒濤留も空いていた。芦屋が外から見やすいように、と窓際の席を選んだが、地下通路の中の店となると真正面で張り込むのは難しいかもしれない。

すこし離れた場所にある柱の陰に芦屋が身を隠すのがちらりと見えた。

「で、早速だけど、詳しい話をもう一度ちーちゃんの口から聞きたいんだけど」

「あ、はい」

千穂は季節のフローズン・ラテを、真奥はブレンドコーヒーを注文し、真奥は話を切り出す。

「マグロナルドのバイトを始めたくらいから耳鳴りが酷くなったって話はしましたよね。最初は慣れないことやってるからストレスかなって思ったんですけど、真奥さんも木崎さんも他の人たちも優しいし、お客さんにも変な人いなかったし、学校にも悩みとかないし、ちょっと具合が悪いのかなくらいに思ってたんです」

真奥は相槌を打ちながらも周囲に気を配ること、千穂自身の観察は怠らない。

「それでこの前話したうちだけ酷かった地震、あったじゃないですか。変だなあと思ってたら昨夜、誰もいないのにいきなり耳元で声が聞こえたんです」

「その声だけどさ、どんな感じなの？　普通にこうやって会話するとき耳に聞こえるような感じじゃなくて？」

千穂は顎に指をあてて少し考え込むような仕草をした。

「んーっと、真奥さん、普段映画やアニメとか見ます？」

「……時々なら」

実際には家にテレビが無いのでほとんど見たことはないのだが、話を進めるために見栄を張った真奥。

「テレパシー、みたいな表現あるじゃないですか。エコーがかかって聞こえるみたいな。あー

ゆーんじゃないんです」

「へぇ？」

千穂は何を思い出したか、そこで小さく吹き出した。

「何か凄く慌てた、威勢のいいおじさんみたいな声なんです。聞こえ方もラジオのチューニングがうまく合わないみたいな感じで普通に耳に聞こえるんです」

「マジか！」

「え、ええ……」

真奥が思わず乗り出して尋ねるので、千穂は驚いて頷く。

「しかも、言うことが凄いシンプルだったんです。『あー、聞こえてるか』とか言うんですよ」

普通なら知らない男の声が耳元で聞こえたらそれだけでパニックになりそうな気もするが、千穂はそれに静かに耳を傾けてしまったらしい。

「思わず声に出して返事しちゃったんですけど、その後も『聞こえてるか』ばっかりで、どうも私の声は届いてなかったみたいなんですね。仕方ないからとにかく向こうが何か話し出すのを待ってたら、『まあいいや、受信できる奴は限られてるから言うだけ言う。そっちの世界で自然現象が頻発しているはずだ。近いうちにでかいのが起こるかもしれないから気をつけろ。俺達も頃合を見計らってそっちに行くからな』って」

そこで千穂は言葉を切り、フローズン・ラテを一口すする。

「……それだけ？」

「それだけです。意味が分からないし、絶対電話みたいにかけ間違えてるなと思って。私宛じゃないことだけは分かるんで、違いますよー、違いますよー、って言ったり思ったりしたんですけど、そのうちまたチューニングがずれて声が遠くなって、耳鳴りもそれ以来やんだんです」

「それで、ここんとこ頻発してる自然現象て言ったら地震しかないと思ったわけだ」

「そう思うまで結構時間かかったんですけどね。そんな声が聞こえたことに驚いて、しばらく何も考えられませんでしたから」

千穂は苦笑して、話に夢中になっている間に氷が溶けはじめたラテをまた一口すすった。

一方の真奥はコーヒーがぬるくなるのも構わず思考を走らせていた。

千穂が受信した音声は、〝概念送受（イデアリンク）〟と呼ばれる精神感応の一種だろう。異なる言語を持つ異世界の人間同士の特定の意識を同調させ、概念を共有しそれぞれが自分の言語でそれを理解する交信技術だ。

真奥や芦屋（あしや）も日本に来た当初は、本当の意味で日本語を理解していたわけではなく、魔力を使った概念送受で、相手の日本語を自分たちが分かる概念に変換していたにすぎない。

ゲートを用い異世界に渡る術（すべ）を持っている世界には、〝ソナー〟と呼ばれる探査技術が必ず存在する。ソナーは発射すると不可視の魔力爆発を起こし、跳（は）ね返ってきた魔力の波長を分析し、行く先の様子を探（さぐ）る技術だが、その魔力爆発は行った先で様々な形態を取る。

それが地球、ひいてはこの日本にソナーが放たれ、それが地震という形に変わったことは十分に考えられる。

発射元はエンテ・イスラが自分を討伐するために編成した刺客の一派だろう。日本に到達したソナーが爆発したのが、偶然に千穂の家だった、というのは恐ろしく低い確率だが無いことではない。そのせいで千穂の家だけが大地震に見舞われたかのような事態になったのだろう。

ソナーを打つ先は、魔王とアルシエル、そして勇者の航跡を追えばある程度は限定できる。思えば恵美と一緒に襲撃された夜も、直前に地面が揺れた。あれは襲撃者が近くに潜んでいて、真奥の魔力反応を見るために近距離からソナーを打ったからではないだろうか。

これは、思ったよりも早くことが起こりそうだ。

真奥も芦屋も、外見や生命エネルギーは完全に日本人に紛れてしまっているが、本質的には悪魔であることに変わりはない。まして昨夜は姿の見えぬ敵の接近を許してしまっているのだ。

千穂が聞いた『近いうちにでかいのが起こる』というのは、それ相応のエネルギーを持った者が実力行使に出る、ということだろう。

敵は、すぐそばにいて、何かの機会を待っている。

「でも……やっぱり真奥さんに相談して良かった」

「え？」

思考に没入していた真奥は千穂の声で我に返る。

「ありがとうございます。信じてくれて」
「いや、そんな大したことじゃ」
「大したことですよ。普通の大人の人は、こんな話真面目に聞いてくれません。正直、真奥さんにメール出した時も、呆れられたらどうしようって、ちょっと怖かったんです」
「そういうものかなぁ。ご両親とか友達には？」
「話すわけないじゃないですか。今時、高校生にもなってこんなこと言い出したら笑われるのを通り越して心配されちゃいますよ。この子は現実と空想の区別がついているのかって」
「ふーん、そんなもんかねぇ」
少し落ち込んだ様子の千穂に優しい言葉の一つもかけようとした真奥だが、
「ま、俺は話を聞くだけならいつでもうぐげぼふっぶゅ!!」
「だ、大丈夫ですか？　どうしたんですか!?」
突然激しくむせ返った真奥に、千穂が慌ててお冷を差し出す。それを飲みながら目は必死で状況を整理しようとするが、視界の隅に捉えた映像のせいで思考がうまく巡らない。
何故だ、何故恵美が芦屋と一緒にこの店に入ってくる!?
「真奥さん？」
「うえっほ、いや、大丈夫。なんかつっかえた。俺は何も悪いことはしていない」
「は？」

「いやなんでもない。後輩の相談に乗るなんてのはごく一般的な出来事でそれ自体にはなんの悪意も無いわけで、ヨコシマな考えでここにいるわけでは決してない」
「ま、真奥さん大丈夫ですか？」
「ん？　ああ、ちーちゃん、気にするな。ちょっとした発作だ」
「ほ、ほっさ？」
「フォッサマグナ」
「真奥さん!?」
「いや、いや、ごめんなんでもない、なんでもないから」
混乱した思考が一秒の間に光の速さで地球を七周半して、それでは地球の裏側で止まってしまうことに気づき、もう半周して戻ってきた。
「ま、まぁとにかくだ、ちーちゃんの話を総合すると、まず耳鳴りや変な声自体は直接的な問題じゃない。肝心なのは本当に悪いことが起こるか、今回の件で言えば『でかいのが』が起こるか否か、という点に尽きる」
真奥の不審な挙動に呆気に取られながらも、真面目な言葉には真剣に頷く千穂。
「幸いその耳鳴りの主も悪意で接触してきてるわけではないみたいだし、いざというとき自分の周りの人に注意を促せるだけで大分違うと思うよ」
「はい……そうですね」

「あんまり解決になってないかもしれないけど、今の俺に言えるのはこれくらいだなあ」
場を仕切りなおすように真奥はお冷を一口飲む。
千穂は氷が溶け切ってしまったラテのグラスを両手で包んだまま少しだけ考え込むような仕草をしたが、やがて顔を上げた。
「真奥さん、本当にありがとうございます。少し、胸のつかえが取れました」
「ん、ならよかった」
どうだ恵美！　魔王の職分からすると大分外れたことのようだが、俺は何もおかしなことはしちゃいない！　どこからどうみても立派な先輩アルバイターだ。
真奥は心の中で堂々と胸を張るが、
「そう言えばさ、なんで俺に話そうと思ったの？」
ふとした疑問を千穂にぶつけてみた。自分は確かにアルバイト先の先輩として千穂の指導はしたが、知り合ってからまだ二ヶ月たらず。フリーターという立場が日本の社会でどれだけ弱く信用の低い地位にあるか分かっているつもりである。
「え、その……」
千穂は少し気恥ずかしそうに視線を彷徨わせた。
「んーと、なんでだろ。真奥さんなら信じてくれるかもって思っちゃったんです。真奥さん優しいし、それにどこか普通の人と違うっていうか」

優しい、は悪魔にとって褒め言葉たりうるのか、真奥はそんなことを考える。そして、魔王である真奥は確かに普通の人間ではない。

「ま、変人であることは認めるけどね」

「あ、あ、違うんです悪い意味で言ったんじゃなくて」

何故か慌てふためく千穂。真奥はその単純さに苦笑する。

「分かってるよ。ほら、飲み物こぼすからそんな慌てんなって」

「もう！　真奥さん意外と意地悪だ！」

千穂は困ったような怒ったような表情で咳払いをする。

「でも、こうやって真奥さんと二人でお茶できたから、変なことあっても良かったかも」

「ん？」

千穂の少し微笑んだ唇から漏れた小さな声は、独り言なのかこっちに話しかけているのか。なんにせよ、今の発言はただ事ではない。それくらい真奥にも分かる。

「……ま、真奥さん、その」

千穂が搾り出す声は少し震えていた。何故か困ったような表情で顔を真っ赤にしながら真奥を見ている。

「私、真奥さんが……っ！」

「やめなさい！」

千穂が放った嚆矢は、突然横から割って入った力強い声に阻まれてしまう。
その声に真奥は身を竦ませ、千穂は何事が起こったか分からず突然自分たちのテーブルの脇に立って傲然と二人を見下ろす女の形相を唖然として見上げていた。
「この男に関わるとロクなことにならないわ」
「え、恵美っ！　お前」
「悪いことは言わない。この男はもうすぐ日本からいなくなる身よ。今のうちにとどまっておかなくちゃ、あなたが辛い思いをするだけだわ」
真奥は恵美が突然介入してきたことに驚き、またも頭の回転が止まってしまった。恵美と一緒に座っていたはずの芦屋も、恵美を止めようとして間に合わなかったのか、中腰のまま固まってしまっている。
一方、千穂の対応は素早かった。
「失礼ですけど、お姉さんは真奥さんの、どういったお知り合いですか」
さっきまでの何かに迷ったような表情が一瞬にして力を帯び、恵美を睨みながら立ち上がる。
その口調は真奥が驚くほどに恵美への敵意に満ちていた。
恵美も千穂の敵意は理解しているのか、厳しい表情のまましかし諭すように言葉を返す。
「いい、これはあなたのために言っているの。この男は見た目通りの男じゃない。本性はもっと狡猾で残忍よ」

「いきなり出てきて酷いこと言わないでください。お姉さんは真奥さんのなんなんですか」
真奥は恵美の言うことに真っ向から反発する千穂に驚いた。明るい少女であることは分かっていたが、ここまで意思が強いとは思っていなかったからだ。
ちなみに芦屋は恵美の後ろでただオロオロしているだけである。
「私はこの男の敵。それ以上でも以下でもないわ。いい、佐々木千穂さん。忠告はしたわよ、真奥と関わると、不幸になるわ」
「お、おい遊佐やめろ」
ようやく恵美の後ろから芦屋が止めに入り、
「ちーちゃんも、ちょっと落ち着いて」
真奥も千穂を宥めようとするが、
「私に指示しないで」
「真奥さん、黙っててください」
二人の女はお互いの視線で火花を散らしたまま静かな戦いをやめようとしない。
「いや、でもこのままだと店に迷惑だから、な、とにかく出よう、な？」
千穂と恵美の不穏な空気を察した他の客や店員の視線を気にしているのが、悪魔である真奥や芦屋だけというのが何かおかしい。真奥は必死に訴えるが、
「そうだ、思い出した、お姉さんこの前、うちのお店に来ましたよね」

「……それがどうしたのかしら」
しかし二人は聞いていなかった！
「あのときも真奥さんと話してたみたいですけど、もしかして真奥さんの元カノか何かですか」
その言葉が予想以上の威力を持っていたことは、恵美の口の端が一瞬引きつったのを見て取るまでもない。
「……っ！　何を言い出すの？」
恵美にしてみれば交番に連行された時以来の言いがかりに、思わず覚えた怒りと屈辱をこらえるための一瞬の呻きだったが、千穂の方はそれを図星と取ったようだ。
「やっぱりそうなんですね。なら私が真奥さんにどうアプローチしようと今さらお姉さんには関係ないんじゃないですか？」
「バカなこと言わないでもらえる？　私とこいつはそんな関係じゃ……」
「じゃあなんでいつも真奥さんの近くをウロウロしているんですか」
「こいつと私の関係は、簡単に語れるような間柄じゃないの」
「自分の方が真奥さんと親密だとでも言いたいんですか？」
「どうしたらそう取られちゃうのかしら」
「そうとしか取りようがありません」
お互いの言葉を聞いているのかいないのか、売り言葉に買い言葉が重なって緊張はまさに頂

点に達しようとしている。真奥は他の客の冷ややかな視線を背中に受け止めつつひきつった顔に冷や汗を流しながら言う。

「だから二人ともおちつ」

け、と真奥は仲裁の言葉を最後まで発することができなかった。

轟音と表現するしかない異常な鳴動が店内に響いた。

真奥や千穂、恵美と芦屋だけでなく、四人の修羅場を傍から固唾を呑んで眺めていた他の客すら何が起こったか把握できなかった。

次の瞬間、

「じ、地震だっ！」

誰かの叫び声がした。

「大きいぞ！」

次に叫んだのは誰だったろうか。

その次に叫ぶ者の声は最早言葉にならず、突如大きく揺れはじめた地下通路の中のすべての音が轟音にかき消される。

地下にいるはずなのに立っていられないほどの縦揺れ。店内の食器や調度が床に落下し照明や通路に面したガラスが砕ける。

「危ないっ！」

その叫び声を聞いた者も、発した者も、天井に一瞬にして走った亀裂を見た。
轟音も揺れもやまず、亀裂は天井からその禍々しい触手を柱や床にまで伸ばしてゆく。
「く、崩れ……」
真奥と千穂が座っていたテーブルを粉砕するかのように天井が落下したのが最初だった。
「真奥さんっ！」
千穂は叫ぶが、その声は真奥には届かない。天井が崩れはじめる様を見ても、恐怖に硬直した足ではこの揺れの中逃げることすらできない。
通路の本格的な崩落が始まった。雨あられと降り注ぐ瓦礫の中、千穂の恐怖は臨界点を越え、意識が闇に溶けた。

目を開く感覚は確かにあった。だが、開いてもそこには闇があるだけで、千穂は思わず慌てふためく。
気絶するなど初めての経験だったが、その直前の記憶は鮮明に千穂に恐怖を沸き上がらせた。強張った手足を恐る恐る動かすと、無数の岩や小石のような感触に触れる。
「ど、どうなったの」
千穂が思わず呟くと、

「良かった、気がついたのね」
すぐそばで女の声がした。
「だ、誰ですか？」
「私よ」
完全な闇の中から聞こえてきた女の声。周囲に反響して鮮明には聞き取れない。だが、
「あなたは……」
突然闇に薄ぼんやりと光が浮き上がり見えた顔は、真奥とのティータイムに無粋に割り込んできた女のものだった。
女の顔を認識して一瞬こんな事態に陥る直前のやりとりを思い出すが、光に浮かんだ女の顔が、額あたりから流れる黒い何かで濡れていることに気づき声をかけた。
「だ、だ、大丈夫ですか！」
「ああ、これ？」
女が無造作に拭った額からまたそれが流れはじめて思わず喉の奥で悲鳴を上げる。
「大したことないわ」
「で、でも、そんないっぱい、血が」
「見た目ほど大したことはないわよ。ほっときゃ固まるわ」
なんでもないことのように言う女の手には、携帯電話が握られている。灯りの元はそこらし

い。だがそれでも尚、千穂の視線は女の額から流れる血の筋を追ってしまう。
「でも参ったわね。完全に閉じ込められたわ」
女は携帯電話の灯りを周囲に巡らせる。地下通路の瓦礫が完全に周囲を塞いでおり、千穂と女がようやく立ち上がれる程度の空間があるだけだ。
「あ、あの、地震て？」
「ええ、地下通路崩落、多くの人が地下で生き埋め、とかそんな感じでしょうね」
「わ、私どれくらい」
「崩れてから三十分も経ってないわよ。人間二人で息苦しくもならないってことは空気の通り道があるってことね」
恐る恐る体を動かすが特に痛みもなく、女の落ち着き払った様子に感化されてか、闇への恐怖が少しづつ薄れて千穂は大きく息を吐く。
「随分、落ち着いてるんですね」
「まあね。こんなことはちょっと前まで日常茶飯事だったから。あなたこそ荒事には慣れてなさそうなのに、落ち着いてるじゃない」
「お姉さんがいるからです、一人ならきっと泣いてます」
女はこんな場合だというのに微笑み、
「遊佐恵美よ。言っておくけど、真奥とは本当になんでもないんだからね」

「佐々木千穂です。今はそういうことにしておきます」

非常事態の最中の握手。千穂はこんな状況にも関わらず落ち着いている自分に驚いていた。一人ではないということは大きいが、それだけではこんなに気丈でいられるはずがない。

「真奥さんは……」

「少なくとも私達のそばにはいないわ。そんなに離れた場所にいるはずはないんだけど」

「いいえ、そうじゃなくて……」

こんなことになるまでは一つのテーブルを挟んだ場所にいたのに、今はそばにいない。ということは……。

「ああ、瓦礫に潰されちゃったんじゃないかってこと？」

言いにくいことをあっさりと口に出す恵美に、千穂は唖然とする。

「そうね、私としてはここであいつが死んでてくれると嬉しいんだけど」

続け様の過激かつ非情な発言。しかしその軽さが、恵美自身そう考えていない証である。

「あいつは絶対に生きてる。こんなところで死なれてたまるもんですか、あいつを倒すのはこの私なのよ。災害に巻き込まれて事故死なんて情けない死に方、私が許さないわ」

だが恵美は自信たっぷりにそう言い切った。その確信に満ちた言い方に、何故か千穂までが勇気づけられる。

「そうですよね、きっと、無事ですよね」

「ええ、無事よ」
恵美はそう言うと千穂の隣に腰を下ろす。お互いの位置は確認したので、節電のために恵美は携帯電話を閉じた。再び闇が空間を支配する。
「それに、変だと思わない？」
「何がですか？」
「ここに、こんな都合よく私達二人がいられる空間があるなんて」
「……あ」
千穂も災害救助現場の報道を見たことくらいはある。まったく身動きも取れないまま何日も救助を待った生存者などがニュースになったりすることを考えると、生きていられるどころか動き回れるだけの空間があることなど奇跡を通り越し怪奇現象だ。
「こんな場所がこの瓦礫の中にいくつもあるはずよ。小さな魔力結界が沢山あるみたいだし、きっと真奥が何かやったんでしょうね」
「マリョクケッカイ？」
千穂は聞きなれない言葉を聞き返すが、恵美は意に介さず話し続ける。
「多分誰も死んでないわ。それにここから一番遠い結界も、五十メートルは離れていないし。思ったより被害は大きくないのかも」
千穂に話しかける、というより半分独り言のような恵美の言葉。

「本当なら感謝するべきなんだけど、魔王がこんなに沢山の人間の命を咄嗟に助けてるなんて、どういうことかしら」
「真奥さんが？」
恵美の発音がおかしいことに千穂は気づかなかった。
「これだけの数の結界を一瞬で作るだけの魔力が残ってるなんて、やっぱり油断ならないわね。多分この空間も魔王が作ったものよ」
「ここが、ですか？　真奥さんが、作った？」
「そう。私達を助けるためにね。腹立つわ。なんで魔王のくせに勇者を助けてるのよ。瞬時に聖法気の防護障壁を作れなかった私のほうが自己中の悪者みたいじゃない」
暗闇の中で恵美が自嘲気味に吐き捨てる。
「あの……遊佐さんが何を言ってるかよく分からないんですけど……」
「気にしないで、独り言よ」
恵美の微苦笑する気配が伝わってきた。
「真奥のどこが気に入ったの？」
「えっ！」
突然そんなことを振られて千穂は暗闇の中で飛び跳ねる。
「なななななな何を言ってるんですか!?」

見えるはずもないのに顔の前でバタバタと手を振る千穂。
「真奥のことが好きだから、私の言ったことが気に食わなくて突っかかってきたんでしょう？」
「す、す、好きって、私、別にそんな」
千穂は本気で慌てている。しばし手足をバタつかせて見えもしない周囲を見回し、呻き声を上げながら更に一分ほど暴れた挙句、
「そ、そんな簡単に分かっちゃいますか」
涙声で尋ね返した。苦笑する気配が返ってくる。
「知らぬは本人ばかりなり、ってね。傍から見てれば誰でも分かるわよ。真奥本人が気づいているかどうかは分からないけどね」
「うー……」
千穂は自分の顔が熱くなっているのが分かる。
「ゆ、ゆ、遊佐さんは、真奥さんのことどう思ってるんですか？」
「私？」
「真奥さんを敵だとか言う割には、近くにいたり、変に親しげだったりしますよね」
「……あいつと親しいなんて絶対嫌なんだけどな。まあ、知り合ってからは随分経つことは確かだけどね」
「どれくらい、なんですか？」

「私が先に向こうを知ってたんだけどね、向こうが私を認識したのは二年くらい前かな」
「卒業したのが同じ中学とかですか？」
「それならもっとお互い穏やかな関係が築けたんでしょうね」
恵美は苦笑した。
「でも、あいつを好きになったら、辛い思いをすることは確かよ。一応、止めたからね」
「なんだか良く分かりませんけど……」
「じきに分かる……いえ、分からない方がいいのかもね。とにかく今は」
言うなり恵美は暗闇の中で正確に千穂の額に指を当てた。
「少しだけ眠ってて。最近の魔王は変に人の目を意識しちゃうみたいだから」
一瞬のこと。千穂の額に触れる恵美の指先が淡く光って、それが消えたときには千穂は深い眠りに落ちていた。
静かな寝息を立てる千穂の体をゆっくりと横たえる。
「つまんないグチ聞かせてごめんなさい。目が覚めたら、全部忘れてるから」
言いながら再び千穂の額に手を当てると、また指先が淡く光り、すぐ消えた。
「近くにいるんでしょ。千穂ちゃんは眠らせたわ！」
恵美の声に答えるように、瓦礫の向こうのすぐ近くで、大きく魔力が膨れ上がる。その予想以上の魔力量に恵美は一瞬目を見開く。

「大きなお世話だ」
瓦礫が落ちる音とともに、真奥の声がする。続けていくつも細かい岩が崩れる音がして、新たな気配が暗闇の中に生まれる。
「そう考えると複雑だな、俺達の関係は」
「そうね。お互い望んで出会ったわけじゃないから、余計に面倒くさいわ」
「違いない」
真奥の声は少し高い位置から聞こえる。恵美は眉を顰めた。真奥の声に、得体の知れない力が籠っている。
「ちーちゃんを頼む。ここから出るぞ。意外に被害は小さいみたいだが、悠長に救助を待ってらんないからな」
暗闇に光が灯る。その禍々しい血の色の赤光が、恵美に恐ろしい記憶を喚起させた。
「ま、魔王っ！」
「なんだよ」
なんでもないような返事、だが、
「そ、その姿……どうしたの！」
「知らん。なんか、こうなってた」
顔だけは間違いなく真奥貞夫だ。しかし黒髪の隙間から覗くのは悪魔の証である角。恵美が

かつて砕いた一方は欠けたまま。

視認できるほどの禍々しい魔力が、暗闇の中に異形の姿を浮かび上がらせている。

やや高い位置から声が聞こえていたのは、真奥の足がこの世界のどんな獣よりも禍々しい魔物の足に変化していたから。

変化はそれだけだったが、明らかに真奥は、魔王の姿を取り戻しつつあるように見える。

「だから結界も張れたし、今ならこの瓦礫をどけるくらいは楽勝だ。安心しろ。まだゲートを制御するような力は戻ってきてないから」

安心しろと言われて素直に安心できるはずがない。何が原因かは分からないが、真奥は魔王であるために必要な魔力を、地下道崩落から今までのほんの短い間に回復できたのだ。

「結界維持しながら瓦礫をどかすのはホネだな。この格好もどう誤魔化せばいいものやら」

真奥は少しずつ、真紅の魔力を周辺の瓦礫に染み込ませてゆく。

恵美を、千穂を、芦屋を、そして名も知らぬ日本人を助けるために魔力を振るう魔王サタン。

〝勇者エミリア〟なら、こんな無防備な背中をさらしている魔王が目の前にいれば、間違いなく聖剣を振りかざし斬りかかっていただろう。しかし遊佐恵美は、宿敵の無防備な背中をただ眺めることしかできなかった。

この禍々しい魔力の流れに押し出されて、いつこの背から悪魔の翼が再生するかもしれないという恐怖は心の中にある。そして後のことを考えず最後の聖法気を振り絞れば、今現在の魔

王を倒せるだけの力を持った聖剣を生み出すことができる。

「う……ん」

千穂の寝息と、寝言とも呼べない小さな声が、恵美の中に生まれたほんのわずかばかりの殺気を打ち消した。

今、魔王を殺せば目的は達成できるかもしれないが、魔王の力で生存している多くの人たちが一瞬にして瓦礫に押し潰されて死んでしまう。それは恵美と千穂も例外ではない。

「どうしてよ」

恵美は喉の奥で、誰にも聞こえない声で、怨嗟の声を吐く。

「どうして、魔王が人を助けるのよ」

※

エミリア・ユスティーナが物心ついた時、エンテ・イスラの勢力図は、魔王軍と大法神教会軍を初めとする人間の勢力が危ういところで拮抗していた。

西大陸の片田舎、さして広くない土地で小麦を細々と作る農夫、ノルド・ユスティーナの一人娘がエミリアだった。父以外の親戚は一人もおらず、母の記憶は無かった。

エミリアが十歳の時、中央大陸からまるで津波の如く押し寄せた魔界の軍に、北大陸と東の

王国が陥落する。

西大陸は、天界と力を通じさせる大法神教会軍を中心とした軍が王国諸侯とよく守っていたが、それでも悪魔大元帥ルシフェルが率いる西方攻略軍の進撃は苛烈を極めていた。

父ノルドは敬虔な大法神教会の信者であり、娘を連れて毎日必ず教会を訪れた。幼いエミリアは大人達が唱える祈りの意味は分からなかったが、何か大変なことが起こっているのは分かっていたので、父に倣って小さな手を合わせて必死に祈った。

しかしエミリアの祈りも虚しく、西の軍も徐々に魔王軍に侵略を許してゆく。

毎日村を駆け巡る不吉な伝令を聞きながら、エミリアはいつ恐ろしい魔物達が父と自分が耕した畑を焼き尽くしに来るのかと恐怖に怯える夜を過ごした。

父はただの農夫だった。戦う術など知らず、小麦を作ることだけに生涯を捧げてきた男だ。

エミリアが夜寝床の中で恐怖に涙を流していると、それを察したように現れてエミリアが眠りにつくまで無骨な手で髪を撫でていてくれた。

そんな父が、エミリアは大好きだった。尊敬し、敬愛し、この世の誰よりも頼りになる、最高の英雄だった。

そして、エミリアが十二歳になった年の、運命のあの日。

エミリアの住む州に隣接する貴族の領土が陥落したと伝令が走った。

そしてそれを待っていたかのように、家に大法神教会の司祭がやってきたのである。

エミリアは最初、教会騎士団が自分達の村を助けに来たのだと思った。
だが父は自分だけを教会の馬車に乗せ、自分はここに残ると言い出したのだ。
エミリアは、最初父が何を言っているのか分からなかった。エミリアを見送りに来た村の長老や、迎えの司祭達に父もともに逃げるよう説得を頼んだ。私一人では生きられない。父が、村人がいてこその自分だ。
「お父さん行こう！　一緒に行こうよ！」
エミリアは叫んだ。
だが、父の口から飛び出した言葉は信じられない一言だった。
「エミリア、行きなさい」
エミリアは自分の耳を疑った。
「お父さん！　お父さん何を……！」
「全ては来てほしくなかったこの日のため。私はお前を守ってきた。十二年間、私は授かるはずのなかった天使の子の父でいられた」
「分からないよ！　お父さん何を言ってるの！」
「お前は天使の子。エンテ・イスラの闇を払う天の血を受け継いでいる。お前はこのエンテ・イスラでただ一人、魔王を倒す力を持っているんだ」
「私が？　違うよ！　私はお父さんの娘よ！　農家の娘よ！」

「その通りだ。だが、お前は同時にお母さんの、天使の娘だ」
「私の……お母さん？　天使って？」
父はずっと、母は死んだ、と言っていたはずだ。
「いずれ分かる。エミリア。司祭様とともに行きなさい。お前の母さんは、まだどこかで生きている。お前のことを、見守っているはずだ」
「でも、でもお父さんは……」
「母さんと、約束したからな。いつか、この村の、この家で、家族三人で暮らそうと。私は、約束を守るために戦わなければならない」
ノルドは幼子のようにすがりつくエミリアを一際強く抱きしめると、視線を合わせてかがみ込む。大きなごつごつした手で、エミリアの頭を撫でた。
「大丈夫だ。教会軍の皆様も、村やこの州を守るために一緒に戦ってくださる。必ずまた一緒に暮らせる日が来る」
「……ほんとに？」
「ああ、私は嘘を言ったことはない。約束を破ったこともないだろう」
「……うん」
エミリアはぐしぐしと涙を握りこぶしで拭って頷いた。
「いい子だ」

父は干した麦束のような暖かい顔で笑った。

「魔が打ち払われた世界で、お前が光に溢れた人生を歩めるよう祈っている。エミリア。私の娘。心から愛している」

あとはもう記憶の混濁。涙でぼやける父の姿と、父と己を隔てようとする司祭の腕。馬車の分厚い窓から見える、どんどん小さくなる父と村。

泣き疲れて眠ってしまったのか、気がつくと見たこともない豪華な部屋の中で眠っていた。

世話役の司祭にこの場所が西大陸大法神教会総本山、サンクト・イグノレッド神殿であることを教えられたのは、父と引き離された翌日、生まれ故郷の村が教会軍の奮戦も及ばず焼き尽くされたという報せを受けた日のことだった。

世話役と名乗る若い司祭は、色々なことを彼女に話した。

エミリアの母が実は大天使の一人だとか、天よりくだされたという〝進化聖剣・片翼〟を扱えるのは天使と人間のハーフである存在だけだとか、そのときのエミリアにとっては、毒にも薬にもならない話を滔々と語る。

だが、これこそが真実だ、と唐突にそんな突拍子もない事を教えられても、すぐには納得できるはずもない。

エミリアが欲したのは聖剣でも、眉唾ものの母親の情報でもない。自分の平和で小さな世界を破壊した、魔王軍に復讐できる力のみであった。

サンクト・イグノレッドに来た翌日から、すぐに剣の教えを請い願った。大人達が軽々と振り回しているように見えた、鉄製の剣の重さに驚いたことは今でも忘れない。型通りの稽古ができるようになるまでに、体は傷つき手は肉刺だらけになった。

一年の月日の後、初陣の機会がやってきた。辺境防衛軍への参加。魔王軍側はゴブリン・デーモンを主体とした最下級悪魔のみで構成されていたにも関わらず、初めて目にする戦場の、血臭に恐怖し足が竦み、教会騎士達に守られるだけで一匹の悪魔も斃せなかった。

自分の弱さと、自分が挑もうとしていた相手が如何に遠く恐ろしい存在であったかをまざまざと知った。父を喪ってから決して流すまいと決めていた涙は、あっさり堰を切った。

それから月日が過ぎ、幾つもの戦場を経験したエミリアは、気がつけば前線で教会騎士達を率いて魔王軍の砦や司令部を攻略していた。

教会騎士エミリア・ユスティーナの名は、教会軍だけでなく諸王国軍の騎士や傭兵達の間に広まっていった。白銀のプレートに金と緋の教会紋章を刻んだ鎧を纏い楯を持ち、大法神教会の象徴であるイグノラ十字をあしらった騎士剣を振るい、多くの悪魔を屠るその姿は〝戦乙女〟や〝聖女騎士〟などの異名で呼ばれ、いつしかエミリアは、魔王軍と戦う騎士の筆頭として多くの人間に知られる存在となる。

そんなエミリアの下には多くの頼りになる仲間が集まった。

大法神教会最高位聖職者〝六人の大神官〟の一人オルバ・メイヤー。ルシフェル軍に捕らえ

られていた西大陸神聖セント・アイレ帝国宮廷法術士エメラダ・エトゥーヴァ。北大陸の深山で木こりを営んでいた仙術道士アルバート・エンデ。

あるときは四人で、あるときはそれぞれが軍を率いて魔王軍と戦った。

そして十六歳になったあの日。聖剣を扱いうる戦士に成長したエミリアは、その身に〝進化聖剣・片翼〟を宿し、名実ともに、魔王を斃す力を得た。

天より下された聖剣を振るう〝勇者エミリア〟の誕生の報せは全土に広まり、大勢の人々がエミリアの名を聞き奮い立った。勇者誕生の日は、エンテ・イスラの人間達の、本格的な魔王軍への反抗が始まった日でもあったのだ。

エミリアは、その様をただ冷静に眺めていた。誇らしさは無い。大儀も無い。自分にとってそれは、自分が魔王に対抗し得る力を得た日、という以上の意味は無かったのだ。

エミリアの心の中にあったのは、常に父の面影と、魔王軍への暗い復讐心のみだった。仲間達はそれを察しながら何も言わず、ただエミリアの剣となり楯となり、命を分かち合う友となってくれた。

三人の悪魔大元帥達を破竹の勢いで撃破し、死闘の末乗り込んだ魔王城での決戦。魔王の片角を打ち砕いた瞬間の震えるような黒い歓喜。異世界へのゲートに阻まれ魔王を逃がした時の震えるような赤錆色の憤怒。

エミリアは戦いを覚えた時から、ただ魔王を殺すその瞬間だけを夢見て生きてきたのだ。

※

地上は正に蜂の巣をつついたような大騒ぎだった。
靖国通りは全面封鎖され、何十台もの緊急車両が崩落現場を遠巻きにしている。無数のパトランプが都市の夜景を緊張の色に染め、その輪の外には多くのマスコミ車両が詰めかけていた。
救助隊が地下通路に入った時には、真奥は既に全ての被害者を瓦礫の中から救出していた。誰にも目立った外傷が無く、緊張の面持ちで現場に入った救急隊員は皆驚きを通り越して逆に慌てふためいてしまった。
魔王の外見は救助を終える頃には真奥貞夫に戻っていた。流石に疲れきった様子の真奥は他の被害者とともに床に突っ伏していたが、状況が状況なだけに真奥の様子を怪しむ者などいるはずがなかった。
勿論真奥は、自分が全員救助した、などと救急隊員に申告するはずもない。被害者のほとんどが意識を取り戻すとともに自分の足で歩き始め、額を少しだけ切った恵美が一番重傷であったほどだ。
恵美が眠らせた千穂は、頬を叩くとすぐに目を覚ました。そしてもう自分が地上に出てきていることに気づくと、そばにいた真奥の顔を見、何か言おうとしてすぐに口を閉じてしまう。

「ま、なんにせよ無事で良かった」
「は、はい……」
真奥に頭を撫でられ、釈然としない表情をしつつも少しだけ微笑む千穂。周囲では救急隊員や警官が慌ただしく行き来して、〝救助〟された人々を安全地帯まで誘導している。
千穂は一台の救急車の中で額の応急処置をしてもらっている遊佐恵美を見て、意識を失う前に恵美とした会話を思い出そうとしたが、何故か記憶に霧がかかっている。
「ちょっと失礼します。救出された方ですね」
すると二人のそばに、制服姿の警官が一人、帳簿のようなものを持って現れた。
「大きな怪我をされなくて、何よりです。申し訳ありませんが、被害に遭われた方の身元を確認させていただいてまして、こちらに連絡先をご記入いただけますか。後々の補償や見つかった逸失物の返還の際に必要になってきますので」
そう言って警官が差し出した帳簿には、既に何人もの名前と住所が記入されていた。
真奥は素直に名前と住所を記入し、千穂に渡す。千穂もそれに倣って書き込んだ。
「あれ？　もしかして、佐々木巡警部補のお嬢さんですか？」
千穂の記入した住所を見た警官が何かに気づいて言う。
「ええと、原宿署の佐々木千一のことなら、私の父ですけど……」
千穂が驚いて答える。その名に警官が頷いた。

「やはりそうでしたか。佐々木警部補も現場整理のどこかに出てきています。未成年の方は保護者の方に迎えに来ていただくようお願いしていますので呼んできますね。佐々木巡査部長も、後からお嬢さんが被害に遭われたと知るよりは、今のうちに無事を知らせてあげた方がいいでしょうから」

「あ、はい」

頷く千穂を尻目に、警官は無線で何事か話している。きっと千穂の父を呼んでいるのだろう。その警官の姿を見た千穂が急にそわそわしはじめた。

「あ、あの、真奥さん……」

真奥はすぐに千穂の言わんとすることを察して、安心させる意味も含めて笑顔を作る。

「ん、ああ、親父さんね。分かってる分かってる。男とデートしてて事件に巻き込まれたとか、やましいことなくてもイヤだもんな」

「……ごめんなさい」

千穂は心底申し訳なさそうに言う。

「いいっていいって。本当にお互い無事で良かった。またバイトでな。今度ソフトクリームマシンのメンテナンス教えてやるよ。そんじゃ」

手をひらひらさせながら真奥は、お辞儀をする千穂から離れる。少し歩いたところで振り向くと、丁度先ほどとは別の制服警官が一人、人ごみを掻き分けて千穂のそばまで飛んできたと

ころだった。
「ありゃ」
真奥はその警官を見て思わず声を上げた。知っている顔だったのだ。
エンテ・イスラから逃亡し日本に落ちたその夜、代々木の裏道で傷ついた魔王とアルシエルを発見し原宿警察署までパトカーで任意同行したのが、千穂の父親だったとは。
「警ら係りササキ……か。偶然じゃなかったのか。あのおっさんに来たばかりの俺達の魔力が少しでも反応してたら……」
「ちょっと魔王！」
「うわっ！」
追憶と思考の中にいた真奥は、いつの間にか背後にいた恵美の大声で現実に引き戻される。
「どうやら、今は真奥貞夫みたいね」
額に包帯を捲いた痛々しい姿でも、鋭い眼光は変わらず真奥をじろじろ眺め回す。角は消え、魔物の足が引き裂いたデニムの裾からは脛毛だらけの生っちろい脚が見えているだけだ。
「ツキノワグマにでも見えるか？」
「冗談に取り合ってる場合じゃないの」
「ちょっと姿が元に戻ったのは偶然だ。原因は分からんし、あの程度のことやっただけですぐ戻っちまったしな」

タダでさえ冗談が通じない相手が鬼気迫る目で睨みつけてくるので、仕方なく真奥は素直に答えるが、

「隠し事してもためにならないわよ」

まるで誠意は伝わらない。

「だから勇者のセリフかそれは。多分俺を見張ってても当分は元に戻ることはないと思うぞ。勿論今回のことを検討したうえで、何かアクションは起こすかもしれないが」

「……何をするつもり？」

「いろんな街の地下で飯を食いながら崩落を待つ」

「バカ」

「うっせぇ。今日はもう疲れたから家帰って寝るわ」

「ちょっと！」

「うるせぇな、今日のところはもう何も起こらねぇよ。偶然にせよ俺が魔力を取り戻して、向こうさんの襲撃は失敗してるからな」

恵美を追い払うような仕草で面倒くさそうに言う真奥。だが恵美にしてみれば聞き捨てならないセリフだ。

「襲撃は失敗？　どういうことよ」

「お前途中からちーちゃんの話聞いてたんじゃねぇのかよ」

真奥は少し呆れたように肩を竦めた。
「自然現象なわけねぇだろ。お前と俺がいる場所でこんな事故が起こるってことは、誰かが仕掛けてきてるんだ。ソナーを打ったのか魔力干渉を起こしたのか知らんが、一つだけ言えることは、もう俺達のメンは割れてるってことだ」
恵美は目を見開く。
「じゃあ、敵は……」
「すぐ近くにいた。俺達が気づかなかっただけでな。だが追い討ちをかけてこなかったのは、俺が〝魔王〟に戻りかけたからじゃないか」
「で、でも、だとしたら一体誰なの？　魔力も聖法気も補充できない日本でこれだけの力を放出できるなんて」
恵美のその言葉に、真奥は少しだけ複雑な笑みで答える。
「心当たりなら、ある」
「ちょっと！」
恵美は色めき立つが、真奥は表情を固めたまま、
「だが、お前に特に教えてやる義理も無い。教えたって何ができるわけでもない」
と冷たく言い放った。恵美は一瞬反論しようと思ったが、真奥の言うことはある意味正しいのでぐっとこらえた。

「だが、いざというとき慌てられてもイヤだからな。ヒントだけ教えてやるよ」
「……ヒント？」
「ああ、まず相手はインターバルはあるにせよ力を好きに使える。今のエンテ・イスラでそれができるのは誰かを考えな。少なくとも俺とお前を同時に殺せる、と自負する奴だ」
恵美とてそれくらいは自分で推理をしてみた。しかし、そんな存在には全く心当たりが無い。
恵美が考え込んだのを見て真奥は少し皮肉な形に口の端を吊り上げる。
「分かったか？　分かったら俺は帰るぞ。対策を練らなきゃならんし、それに眠い」
「ちょ、ちょっと待ちなさい、まだ話は……」
「終わってないと言いたいんだろうが、今日はセコンド乱入でノーゲームだ」
言いながら真奥は恵美の肩越しに後ろを指差す。救急車の更に向こうの進入禁止テープから身を乗り出し、多くの野次馬に混じってこちらに手を振り声を上げている人物を発見する。
「梨香……」
「あれ、お前の同僚か何かか？　しきりにお前の名前呼んでるぞ」
鈴木梨香は制服姿のまま、恵美が自分を認めたと気づくや殊更に大きく手を振る。
「ちゃんと友達、いたんだな」
「大きなお世話よ。あなたには関係ないわ」
真奥のわざとらしい言葉にそっぽを向いて吐き捨てた恵美だったが、

「羨ましいこって、ほら、行ってやれよ」
「でも、落ち着いたらまた襲ってくるんじゃないの？」
これは正直な不安の吐露だ。今回の崩落は前の魔力弾の襲撃の時とは違い、大勢の関係ない人々が巻き込まれた。また襲撃を受ければ、今度は梨香を巻き添えにしかねない。だが真奥は鼻で笑い、自信満々言い切った。
「ないな。俺とお前、両方をターゲットにしてるって向こうから宣言してるんだ。片方だけ襲えば、片方が警戒するだろ。信用しろよ。悪事に関して俺の右に出る者はいない」
誇るようなことではないが堂々と胸を張る真奥に、
「ほら、あんま待たせるなよ」
そう言って背を押されたことに、恵美は不思議と嫌な気はしなかった。
一歩踏み出して、すぐに顔だけ振り向く。
「今日だけだからね」
「へいへい。大人しくしてろってんだろ。分かってますよ」
気のない返事を信じたわけでもないだろうが、恵美は少しだけ顔を歪めると早足で去ってゆく。やがてテープ越しに同僚らしき女が、恵美のことを泣きながら抱きしめる。ＯＬ風の制服姿になんの変哲もないサンダル。騒ぎを聞いて取るものとりあえず飛び出してきたのだろう。
真奥は小さく苦笑した。

「そんなとこ見せつけられちゃ、やる気も失せるっての」
そう言って踵を返そうとして、
「ま～お～う～さ～ま～……」
「うわ芦屋！」
背後霊のように後ろに立っていた芦屋に気づかず激突しそうになった。
「もーしわけありませんん！」
「な、なんだよいきなり、てか、今の今までお前どこにいたんだよ」
芦屋は慟哭しながらみっともなく洟をすすり、彼方にある救急車の一台を指差した。
「エミリアの接近を許したばかりか敵の接近にも気づかず、あまつさえ魔王様に命をお救いいただき、なんとお詫びしてよいものやらあああ！」
埃っぽい姿で暑苦しく泣き喚きはじめる芦屋を真奥はげんなりしながら横にどかす。
「うっせぇよ、公衆の面前で泣き喚くなみっともない……帰るぞ、怪我、してねぇよな」
「ううっ、はい……はいい！　お心遣いをいただいてええええ、私はああ！」
その後都合三度身元確認の警官に呼び止められ、うち二回補償と病院の案内を受け、事件を取材に来たマスコミに捕まりそうになり、諸々逃げて電車賃をけちって新宿から笹塚まで歩いた結果、帰宅したのはそれから二時間後のことだった。

「もう、ほんとビックリして、恵美いつも地下道使ってるじゃない!?　巻き込まれてるかもって思ったら、いてもたってもいられなくて」

恵美の無事を確認した梨香は、まるで己が身にかかった災難の如く泣き崩れた。

「電話も繋がんないしメールも返ってこないんで、もしやって思って駆けつけたらもうとても踏み込める状態じゃなくてパニックでさ！」

「ごめんね、心配かけて」

「んん、恵美は悪くない！　強いて言うなら運が悪かったの！　いや、助かったんだから運良かったのか。怪我酷いの？」

梨香は恵美の額に捲かれた包帯に気づく。

「ちょっとおでこ切って血が出たけど別に縫うような大怪我ってわけじゃないわ」

恵美にしてみれば本当に些細な怪我なのだが、日本では十分大怪我の部類である。

「恵美、もう帰れるの？」

「警官に連絡先は知らせたし、補償や病院の案内も救急隊の人から聞いた。現場が落ち着いたら一応病院に搬送するとか言われてるんだけど、怪我これだけなのよね」

「じゃあ帰っちゃダメだよ、きちんと病院行って診断書もらわなきゃ、恵美、携帯とお金は？」

「携帯はあるけど、他はバッグと一緒に瓦礫の下」

梨香の気迫に押されて恵美は素直に答え、

「あ！　保険証と通帳とはんこも……」

今日は普段以上に重要なものを持ち歩いていたことを思い出し、血圧が一気に下がる。

「じゃあこれ。病院終わったら連絡して、迎えに行くから」

梨香はそんな恵美を見て、素早く財布から取り出した一万円札を三枚、恵美の手に押しつけ、

「り、梨香？」

「世の中の仕組みは意外と融通利かないわ！　あとマスコミに捕まると面倒だから、ね、必ず連絡してよ？」

と言って恵美をテープの中に押し返してしまう。しきりと恵美を追い立てる仕草をするのでしばらく戻ってから振り向くと、早速マスコミらしき男が被害者と話していた梨香にマイクを突きつけている姿が目に入った。

何を言ってるのかは分からないが、梨香はうるさそうに男を追い払う仕草をして、人ごみの中に消えてしまう。

それを見届けてから恵美は、最初に治療を受けた救急車まで戻り、何人かの被害者とともに素直に最寄の病院に搬送された。

そこで精密な検査を受けた結果、改めて軽傷だと診断を受け、それでも医師がほんの少しだけ大げさな診断書を作成して恵美に微笑み、

「若い女性の額についた傷なら、十分に補償をもらわなきゃね」
そうのたまい恵美を苦笑させた。
全ての検査を終えて診察室を後にした時にはもう夜九時を回っていた。
「もしもし、梨香？」
病院内なので、街中ではほとんど見かけない緑色の公衆電話で梨香に電話をすると、最初のコールですぐに相手が出る。
『もしもし？　恵美？　どうだった？』
「うん、色々診てもらったけど、やっぱり大したことないって。傷口もきちんと消毒しなおして、頓服ももらったけど、よほど痛まなければ使う必要ないって」
『そっか、大したことなくてよかった！　病院どこ？』
「新宿よ。医大付属の……」
『おっけー分かった。今から迎えに行くからちょっと待ってて』
「え、いいよそんな、悪いし……」
『あれ？　もしかしてご家族が迎えに来たりする？』
それはこのような非常事態においてはごく普通の問いであろうが、恵美にとっては一つ嘘をつかなければ答えられない問いだ。
「ううん、その、両親日本にいなくて……」

『え？　海外とか!?』

驚く梨香の声。何やら身支度をしている音がする。

「そ……んなところ、かな、うん」

『じゃあ益々私は恵美から目を離せないな！　とにかく今タクシーで迎えに行くから、十分くらいで着くわ、大人しく待っててね、それじゃっ！』

「あ、梨香、ちょっと待……！」

問答無用で通話を切られた恵美は、しばし呆然として緑色の受話器を見つめていた。

仕方なく病院の待合室で待っていると、やがて受付から恵美の名が呼ばれる。

今回の診察料金と診断書作成料は、恵美名義で支払った上で補償先に必要書類とともに請求書を送付すれば補償されると説明を受けた。

そして請求された料金を支払おうとして、恵美の新しい財布は通勤バッグもろとも瓦礫の下であることと、恵美の手に金を押しつけて、

『世の中の仕組みは意外と融通が利かない』

と言った梨香の言葉を思い出した。

保険証が無いことに関しては当月内に持参することで了承してもらえたが、それでも初診料と診断書作成料はなかなかに高額だった。

領収書と頓服の処方箋を受け取ると、丁度ロビーの外にタクシーが止まり、梨香が入ってく

るのが見えた。梨香はすぐに恵美を見つけて駆け寄ってくる。
「恵美、大丈夫!?」
「あ、うん、ありがと。色々助かったわ」
そう言って恵美は領収書と処方箋を掲げてみせる。
「でしょ？」
梨香は微笑んで、
「とにかく大怪我じゃなくて良かったわ。今夜はうちに来なさい。車待たせてあるから」
「う、うん、でも、本当にいいの？」
「もういいから、余計なこと考えんでいいから、はよ来る！」
「は、はいっ！」
有無を言わさぬ迫力に恵美は素直に梨香に引っ立てられ、タクシーに放り込まれ、気がつくと高田馬場にある梨香のマンションの前に立っていたのだった。
「お邪魔しまーす……」
梨香のマンションは、広さは恵美の部屋と変わらないが、新築特有の建材や壁紙、塗料の匂いがまだ部屋に残っていた。

「とりあえずオデコ以外に怪我が無いなら、まずはシャワー浴びて着替えなきゃね、楽なカッコがいいだろうから、今日は私のスウェット着て」

綺麗に畳まれたスウェットの上下を差し出す梨香。さらにはビジネススーツ用のスーツカバーを取り出し、

「脱いだのはこっちね。もし穴が開いてたり破れてたりしても捨てちゃだめよ」

「え、どうして？」

恵美は言われるがままに着替えながら問う。着ていた通勤用のグレーのスーツは特に大きく損傷した様子は無かったが、ブラウスが額の怪我で流した血に濡れてしまっていた。

「地下道の管理会社が補償してくれるかもしれんからに決まってるでしょ。全部終わるまで証拠を保全しとくにこしたことはないわ」

「そういうものなんだ」

公共機関や大資本による民間人への補償などエンテ・イスラでは想像もしなかった制度だから、恵美は未だそのあたりの感覚を摑めていないままだ。

封建支配の色濃いエンテ・イスラでは、公共事業などで徴収された民がなんらかの事故や災害で罹災しても、わずかばかりの見舞金を握らされて、捨て置かれるのが常識だった。

「でも梨香、詳しいのね、色々助かってるわ」

「これでも色々経験してきてるからね。あ、お風呂場そっち。下着はとりあえず私の新品を進

呈するわ。確か胸とか、私とサイズ変わんなかったよね」
「多分千穂ちゃんより小さい」
「は？」
「……ううん、ごめんなんでもない」
思わず口を突いて出た言葉に嘆息し、受け取った下着のサイズを確認すると恵美のものと同じだった。
「何から何までありがとう。お風呂いただきます」
シャワーを浴びると、ぬるめのお湯が肌で弾け、すぐに色々あった一日の疲れを押し流して、心地よい感覚に満たされてゆく。
「バスタオルは脱衣所の洗濯機の上に置いとくから。あとこれ、体洗うのに使うタオルと、ボディーソープは一番左のやつね」
浴室のドアの隙間からフェイスタオルが差し出され、その手が並べられた容器を指差してゆく。
「そういえばご飯食べた？」
「お腹空いて、正直そっちのせいで死にそうかも」
素直にそう言うと、梨香は安心を顔ににじませて破顔する。
「簡単なもの作っておくからゆっくり浴びてて。好き嫌いとか無いよね」

梨香が脱衣所から出ていき、恵美はしばらく黙ってシャワーを浴びていたが、

「……なんだろ」

心がふわふわと浮き立ち落ち着かず、それでいてその状態がとても心地いい。

魔王を倒す旅の道中、傷つき倒れるたびに色々な人の助けを借りた。宿や食事を提供してくれた人々も大勢いた。

でも、かつて一度もこんな気持ちを味わったことがなかった。

肌を流れるお湯の温かさのようにただ無性に心地良く、ずっとこのままでいたくなるような気持ちは。

まるで自分の中に、淡い光が宿るような。心が、天使の羽で柔かく包まれるような。

「とりあえず恵美の無事を祝って乾杯」

恵美と梨香は冷やしたミネラルウォーターを入れたグラスを軽く鳴らす。

梨香が作ったのは前日の残り物であるという肉じゃがを温めなおしただけのものだったが、空腹の恵美には最高のご馳走だった。恵美は普段と変わらない様子で箸を進めてゆく。

「それだけ食欲があるなら、もうなんの心配もいらなそうね」

梨香が心底安心したように微笑んだ。

「でも油断しちゃいかんからね？　後から異常がぶり返す怪我ってのもあるんだから」
「肝に銘じます。本当にありがとう梨香。お金は必ず返すからね」
「こんな短い間に財布と通帳両方失くすとか、恵美も災難だね」
益体もない会話を進めながら、やがて梨香がなんの気なしにテレビをつける。
どこもかしこも恵美の巻き込まれた地下道崩落のニュースばかりだが、梨香はその映像を流している局をすべて飛ばし、やがて歌番組で手を止めた。
恵美を気遣ってのことなのだろう。そのおかげでふと、恵美はテレビ台に置かれている写真に目を止めた。恵美の視線に気づいた梨香が言う。
「ああ、それ。うちの家族」
工場のような建物を背景に梨香と梨香の両親と思しき夫婦、それにもう一人梨香が少し幼くなったような女性。
「これ梨香の妹さん？　似てるわね」
「言われるわー。私にしてみたら何が似てるのかわかんないけどね」
梨香は微笑む。と。
「あ、ごめん、ちょっといい？」
梨香のバッグの中で電話の着信音が鳴っている。梨香は恵美に了承を得てから電話を取った。
「もしもしー。うんウチー。てか携帯にかけてきといてウチ以外に誰も出んよ」

恵美は驚いて梨香を見た。梨香が普段とまったく違う口調で話しはじめたからだ。

「あー、届いた？　別にそんな高いもんやないしー。ウチもよく飲むもんで悪いけど、爺ちゃん焼酎ならなんでも好きやんか」

梨香は関西出身と聞いていた。しかし恵美の知っている関西弁とはまた微妙にイントネーションが違う。

「お盆にはまた帰るから。今日の事故？　心配せんでいいよ、職場近くだったけどウチはなんともないから。みんなにもそう言っといて、はい、はーい」

短い会話が終わった。梨香は携帯電話を放り投げようとして、思いなおしたようにコンセントに差しっ放しにされていた充電コードを手繰り寄せて電話に差し込む。

「おかんからやった。今日のことで心配してたみたいだけど、ウチのおかんに恵美のこと話しても始まらんしね」

「梨香の方言初めて聞いた」

「あれ？　そうだっけ。家族や地元の友達と話す時はいつもこうだよ。ウチの実家、神戸なんだ」

そういえば梨香の言葉は、崩落現場で会ったあたりから微妙にいつもと違っていたような気もする。地が出ていた、ということなのだろうか。恵美は微笑んだ。

「へー、何か新鮮。私東京からほとんど出たことないから、西の方とか行ってみたいんだよね」

高い時給の仕事とはいえ裕福な経済事情であるわけでもなく、旅行など当然したこともない。魔王さえいなければ、または討伐してしまえば、少しくらい日本を巡ってみたいと思っているのだ。当分先のことになるだろうが。

そのまましばらくは食事に集中し、歌番組が終わる頃には恵美はすっかり出された料理を平らげてしまった。

「食べるねー。これは本当、心配いらないかな」

「おかげさまで。食器、これシンクで水につけたほうがいいかな」

恵美は手早く食器を重ねる。油ものとそうでないものを分けて水に浸す。

「さんきゅ、そのまま置いておいてー。後で洗っておくから」

「はーい。あ、ごめん、ニュース見ていい？」

「ん？　いいけど、大丈夫？」

どの時間帯のニュースだろうと、どうせあの事故を報道しているに決まってる。梨香は一瞬表情を曇らせるが、恵美は大丈夫だと首を振った。

「天気予報とか見たいし、それ以外のこともやるでしょ」

「ん、そっか。この時間だと報道ターミナルかな？」

梨香はリモコンを取ってチャンネルを回す。恵美が戻ってきて元の場所に座り、ニュース画面に目をやる。トップニュースはやはり新宿地下道崩落事故だったが、思ったより大きく時

間を割かれておらず、すぐに都内で頻発している路上強盗のニュースに移った。
「やだなー。なんか最近ツイてないから、こんなのにもひっかかっちゃいそう」
そんな感想を漏らす恵美の横顔を、梨香はじっと見ていた。そして、
「あー、もう！　恵美大好き！」
「え？　は？　ちょ、ちょっと梨香？」
突然恵美の背後から抱きついた。
「なに、ちょっと、いきなりどうしたのよ」
「んー、やっぱ恵美いいわー。和むわー」
「はあ？」
少しの間、梨香はまるでゆりかごを揺するように、恵美に抱きついて体を揺らしていた。恵美は良く分からないまま梨香に身を任せていたが、やがてそのままの形で梨香が言う。
「実はね、私面倒くさくて、東京に出ることになってから標準語に直したんだよね」
「面倒くさい？」
恵美は首を傾げた。地方出身者など東京にはいくらでもいる。恵美達の会社にも方言のイントネーションを残したまま仕事をしている人間は何人かいた。
「だって、標準語にしておけば出身地を気にされる心配ないじゃん？」
そう言えば梨香から関西出身であるということ以外、地元の話を聞いたことはない気がした。

恵美も地元のことは話そうにも話せないので特に追求することはしなかったのだが……。
「東京の人間は、兵庫の人間に平気で地震のこと聞いてくるからね」
「あ……」
恵美はハッとして、抱きつかれたまま梨香を振り向く。
「それしか話題無いんかって思うほど、皆地震の話しかしないから、それ以来面倒になって地元の話しなくなったの」
梨香は家族の写真に目をやる。
「ウチは阪神大震災の時は小さかったけど今でもあの日からのことは忘れられない。本当に怖かったんだ。ウチは中小企業の工場が集まってる、被害の大きかった地域に住んでたから」
日本で十数年前に起きた歴史的大地震のことは恵美も知識としては知っていた。
「家族全員無事だったのが奇跡みたいなもんでさ、友達の中には家族を亡くした子も大勢いて。ウチは小学生だったけど、学校が始まった時にはクラスメイトが二人いなくなってた。引っ越しちゃったんだろうって思いたかったわ」
「……そうなんだ」
「だから平気で『地震どうだったの？』なんて聞いてくる奴らの無神経さに腹が立ったよ。爺ちゃんの工場は潰れるし、避難してる間も余震が続いて、毎日怯えてたからさ」
梨香は淡々と語る。それは心の中で決着がついている人間の話し方だった。

「でも、地元を一歩出れば皆どこか遠くの出来事って感じでさ。どこに行っても、地震から何年経っても、実家が神戸だって言うと皆最初に出すのは地震の話題。想像力が無いんだろうなって思って。ウチはそういう人間とはあまり友達になりたくなかった」

だが、そのスタンスを取ることをいつしか諦めたという。

「会う奴会う奴ほぼ全員だったから、そんなこと気にしてたら誰とも付き合えないな、と思ってさ。で、出身隠すために言葉を直したの。誤魔化してごめんねー」

「そんな、誤魔化すだなんて……」

「恵美が初めてだよ。神戸だって言って、地震のこと聞いてこなかったの」

梨香はようやく恵美から離れると、グラスを持ってキッチンに立つ。冷蔵庫からミネラルウォーターのお替わりを注いだ。

「今までの価値観がまっさらになったとき、人間ってどう転ぶか分からないんだよね」

その言葉に一瞬恵美は心臓が強く胸を打つのを感じた。

「いるのよ、混乱に乗じて悪いことをしてやろうって奴らが。逆に自分の明日も分からないクセに人のことを必死で助けようとするお人よしもいるしね。思ったなー、よくあるじゃない？葛藤する時に自分の顔した天使と悪魔が言い合うみたいな表現」

梨香は冗談めかして自分の両手を言い合いさせるような仕草で動かす。

「人間本当にその気になれば誰でも天使にも悪魔にもなれるんだって思ったよ」

「天使にも……悪魔にも？」

梨香の何気ない言葉が、ひっかかった。一瞬思考に没入する恵美。

「で、その写真は、ゼロから必死で頑張って十年かけて工場を立て直した爺ちゃんと親父の努力の結晶。この不況でも、昔の縁でなんとかやっていけてるわ」

グラスをまた恵美の前に置いて梨香は言う。

「ほんと怖かったわー。まさか東京に来てまであんな事故が起こって、しかもまた友達が巻き込まれるなんて、考えたくなかったもん」

友達。その言葉に恵美ははっとする。いなくなっていた梨香のクラスメートと、彼女は親しかったのだろうか。

場合によっては巻き込まれていたのは梨香だったかもしれない。災害の恐怖を身に染みて知っているからこそ、今大人になった梨香は、純粋に恵美の力になろうとしてあれこれ世話を焼いてくれている。

「恵美？」

「……え？」

「大丈夫？　ごめんね、変に考えさせちゃったね」

そう言って苦笑した梨香はグラスのミネラルウォーターを一気に飲み干す。まるで記憶の中の暗い感情を呑み込むように。

「でも、結果的には無事だったし。梨香のおかげでほんと助かったもの。感謝してるわ」
「やめてよ。友達助けるのは当たり前っしょ。変に改まられるとむずがゆいわ」
その瞬間、また、あの感覚が戻ってきた。淡い心の光。暖かい、気持ち。全身が守られているようなあの心地良さが。
「だから私は、あんたには特に何か聞こうとは思わないんだ」
「え？」
「恵美がどこに住んでたとか、どこから来たとか、そんなことはどうでもいい。私にとって恵美は、バカなこと言って一緒にご飯食べて、時々遊ぶ友達でいてくれれば十分」
「梨香……」
「そういえばさ」
と、突然梨香は、にやりと笑って恵美に顔を近づけてきた。
「あの男、誰？」
「へ？」
「あんたが事故現場でお話してた男よ」
「え？　え？　あ、あいつ？」
当然それは真奥のことだろう。
「あいつ、とか言っちゃう仲の男なの？　結構いい男っぽかったけど、とっても気になるなー」

「ちょっと梨香、今何も聞かないとか言ったじゃない。大体あいつはそんなんじゃ……」
「色恋は別じゃ！　私の天使に近づく男はみな狼じゃ！」
「梨香、キャラおかしいわよ！　本当にあの人は単なる知り合いで、むしろそれ以下の存在よ。狼どころか悪魔よ悪魔」
嘘は言っていない。知り合い以上の存在では決してないし、実際に悪魔である。
「悪魔……」
「恵美？」
「天使と……悪魔」
真奥はあの場で悪魔の姿を取り戻した。あの凄惨な事故が起こった現場で。
「どしたの？」
尋ねてくる梨香の顔を見る。友達、と言ってくれた梨香の顔を。
お風呂で、食卓で、友達に抱きしめられて、心が天使の羽にくるまれたような暖かさ。
その原因は、
「人の……心？」

魔王と勇者、笹塚に立つ

「朝っぱらからなんだよ。今日もバイトなんだからもうちょい寝かせてくれ」
梨香が出勤する時間に合わせて出てきたのだから言うほど早朝ではない。
梨香は心配してもう一日ゆっくりしていけと引き止めたが、あまり迷惑はかけたくなかったし、何より昨夜の推測が、恵美をヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室へ行けと急き立てたのだ。
自分のものは血で濡れてしまっていたため、梨香のブラウスを借りて、スーツと靴は仕方がないので事故の時のまま、恵美は〝ヴィラ・ローザ笹塚〟の階段を駆け上がり呼び鈴をけたたましく鳴らす。
ただ訪ねたところで真奥はドアを開けないかもしれないと踏んだ。だから、恵美の手には理由付けのため途中のコンビニで購入した茶封筒が握られており、その手は真奥が警戒してチェーンを外そうとしないドアの隙間から差し出されていた。
「安心して、毒物やカッターの刃は入ってないわ」
「お前から物騒なもの以外もらう覚えがないんだが」
「あら、じゃあこの前の千円はいただいていいの？」
真奥はその瞬間茶封筒をひったくる。
「これで、貸し借りなしね」
「おい！　しばらく俺達の邪魔しねぇって約束は……」
「この前身元保証人になってあげたのでチャラよ」

「てめっ……」
文句を言いそうな真奥を、恵美はドアチェーン越しに声を上げて制する。
「昨日！」
「あ？」
「芦屋……アルシエルはなんともなかったの？」
恵美の問いに、真奥はハッキリと不審を顔に浮かべ尋ね返した。
「お前、その頭相当深刻に打ったのか？」
「どうでもいいでしょ、あいつはどうだったの。その、怪我とか無かったの？」
自分でも下手な探りの入れ方だということは分かっていた。だが、他に尋ねようもなかった。
「別に怪我は無かったな。精神的にはダメージを受けてたみたいだが」
真奥は不審がりながらもそう言い、
「ついでに言えば、あいつは特に悪魔の姿に戻ったってことはなさそうだったぜ？」
「っ……！」
「なんだよ、それが聞きたかったんじゃなかったのか」
真奥は鼻を鳴らして言う。恵美は動揺を隠すことができず、言い返す言葉もいつものように強気には出られなかった。
「その言葉が本当だという証拠は」

「じゃ、元に戻ったって言ったら、お前はどうすんだよ。乗り込んで俺もろとも殺すか？」

「それは……」

真奥は特に返事を期待していた様子もなく淡々と話す。

「あいつも俺がちょっとだけ戻ったってことは分かってた。魔王様のピンチに自分は何もできなかったって大泣きした挙句に今朝は寝坊だ。朝飯どうすんだよ、ったく」

芦屋は人間のままだった。恵美は心の中だけで首を傾げる。

恵美は梨香の言葉から、真奥が悪魔の姿をわずかに取り戻した原因は、あの場にいた人々の純粋な恐怖や絶望という負の感情を喰って魔力として発現したからではないか、と推測した。

恵美のその推測が当たっていれば真奥は、それこそ残る魔力で『地震で地下道が崩落』するくらいの災害を起こし、巻き込まれた人々の負の感情を喰い続け元の力を取り戻し、魔王サタンとして復活できるはずだ。魔王がそれをするのに躊躇う理由はどこにもない。

エンテ・イスラを手中に収めんとした魔王サタンは、人間の命など虫ケラ以下ほどにも思っていない残虐無比の存在のはずだ。すぐさま実行に移してもおかしくはないだろう。

なのに泡を食って来てみれば、いつも通りの間の抜けた顔がドア越しに現れ、その日のバイトのシフトに出なければならないようなことを言う。一体この魔王が何を考えて日々を過ごしているのか、恵美は全く分からない。

そしてその次に発せられた言葉は、更に恵美の理解を超えるものだった。

「そう言えば、お前こそ大丈夫だったのかよ。怪我もそうだし、ちーちゃん眠らした時、ちょっと力使ったんだろ」
「……は？」
恵美は硬直する。
「何……言ってるの？」
「何って、お前は力戻ったわけでもないだろうに、あんなことして大丈夫なのか？」
日本語が分からなくなったわけではない。
「本気で……言ってるの？」
「なんだよ、俺が人の心配しちゃいけねぇってのかよ」
真奥はさも心外だ、という口調で口を尖らせる。
恵美は体の血が下がるのを感じた。吐き気がする。一体この男は何を言っているのだ。
日本で真奥と芦屋を初めて発見した時とは比べ物にならない憎悪の感情。まるで、父の死を知った、あの日と同じくらいに。
「敵に……心配されるほどなまっちゃいないわ」
ようやくそれだけ言った。
「そっか、まあそうだよな」
それをあっさりと返す真奥。

「まぁいい、用が済んだらとっとと帰ってくれ」
「言われなくても」
恵美は素早く踵を返す。真奥が元に戻った謎をもう少し探りたかったが、これ以上ここにいたら胸の内に生まれた憎悪で本当に何をするか自分でも分からない。
真奥は恵美のそんな心中を分かっているのかいないのか、様子のおかしい恵美を首を傾げながら見送るが、突然あることを思い出して、慌てて声をかけた。
「あ、おい恵美！」
しかし恵美は一刻も早くこの場を離れるべく足を止める気配すら見せず、
「ここの階段パンプスだと」
真奥は伝えるべき情報を最後まで伝え切れなかった。
共用階段の素材である亜鉛メッキ鋼板、つまりトタンが激しく打ち鳴らされる音がする。
「あっ！」
真奥が聞いた恵美の声はそれだけだった。
すっかりペンキがはげ錆が浮いたトタン製構造物は、長年の風雨と時の重さをその身で支え続けた結果、傾いていた。階段として法律上ギリギリのところまで傾き凹んでいた。
声無き叫びが聞こえる。質量を持った塊が位置エネルギーを消費しながら落ちていった。
「……滑るから気をつけろ」

騒ぎが収まったころにようやく真奥はその一言を口にした。

置き抜けのジャージ姿の芦屋が仏頂面で救急箱のしまってある戸棚を開く。

部屋の隅には感情の発露をどこに放出してよいか分からず放心状態の恵美がビニール紐で束ねられた就職情報誌の上に座っていた。

最初の一段目から足を踏み外したにしては奇跡的な軽傷だろう。しかし折角無傷だったスーツは埃だらけの傷だらけ。パンプスの片方が飛んで行った先がコンクリートブロックの敷石だったため革の表面に無数の傷。

そして恵美自身はと言えば、思わず出した腕が手すりに当たりつき指。尻で滑り降りたためにでん部強打。ランディングエリアでうつ伏せに倒れ鼻の頭を擦りむいた。

アパートの階段から転落した被害の方が、地下道崩落に巻き込まれた被害より遙かに大きい。

「まったく……仮の姿とはいえ、魔王様をあと一歩まで追い詰めた勇者エミリアがアパートの階段から落ちて傷だらけなどと……逆に魔王様の名に傷がつく」

その上、昨夜治療を受けた額の傷が開き、ガーゼを抜けて包帯に血の染みを生み出しはじめていた。包帯自体も土埃で茶色くなってしまっていて、新しいものに変える必要がありそうだ。

しかし芦屋は困ったような顔で魔王に救急箱の中身を見せる。

「救急絆創膏しかないですね。ガーゼとか買ってませんでしたっけ」
「そんな大怪我する予定無かったから、包帯もガーゼも買いに行かないと無いな。おい芦屋、面倒だが駅前の薬局行ってガーゼと包帯買ってきてやれ。もうやってる時間だろ。またコイツに難癖つけられたくないからな」
「かしこまりました。デュラハン号をお借りしてよろしいですか。他にも買い物があるので」
「許可する。てかお前そんな金持ってるなら、もっといい飯作ってくれよ」
「魔王様が無計画にお金を使いますから、私は私でへそくりを貯めて節約しなければいけないのです。では」
寝起きのジャージ姿のまま芦屋が自転車で走り去る音がして、真奥はふんと鼻息を鳴らすと、
「じゃ、ブツが届く前に消毒だけしとけ。水で洗って消毒液……」
真奥が濡れタオルを絞って前に座ると恵美は我に帰り真奥の手からタオルをひったくる。
「わ、私に、触るなっ！　子どもじゃないんだから自分でやるわよっ！」
「へいへい、失礼しました。んじゃ適当にやれ。ティッシュそこな」
そこにはこの前、恵美が真奥に投げつけたのと同じ箱のティッシュがあった。額と鼻の土埃を拭い、消毒液を浸したティッシュで拭いた時、恵美は今度こそ無性に悲しくなった。
「しみるのか」
「違うわよっ！」

真奥の何気ない一言に恵美は本気で蓋を開けたままの消毒液のボトルを投げつけた。
「あぶねっ！　何すんだてめぇ！」
「うるさい！　あんたこそ何するのよ！　魔王でしょ！　魔王なら魔王らしくこの世界で悪逆の限りを尽くしてなさいよ！」
「はあ？　いきなり何言い出すんだよ？」
恵美が何を言いたいのか分からず真奥は本気で驚いている。恵美の叫び声は止まらない。
「何よ！　貧乏して、自炊して、職場で重宝されて、女子高生に好かれてる魔王なんて聞いたことないわよ！」
「うぐっ」
真奥は図星を突かれうろたえるが、すぐに立ち直って反撃する。
「俺だって階段踏み外して泣いて悪魔に治療されてる勇者なんか見たことねぇよ！」
「私だって見たことないわよ！　勇者のために部下を薬局に行かせる魔王なんか！　それで素直に買いに行く悪魔大元帥とか！」
「うぐっ……」
恵美は荒れ狂う感情をどう処理してよいか分からず、幼子のように喚き散らす。
「なんで私に優しくするのよ！」
恵美の叫びが真奥に刺さった。

「なんで私に、人に、世界に優しくするのよ！　なんて、なんて優しくできるのよ！」
突然の問いかけに真奥は返答に窮する。恵美の問いは思わぬ鋭さで真奥の心に突き刺さった。
「優しくできるなら……なんて、なんでっ……！」
恵美は涙に構わず喚き散らす。
「なんて私のお父さんを殺したの！」
叫び声が古いアパートの木材を揺らし、束の間の沈黙が耳に痛いほどだ。
恵美は息を切らして、しゃくりあげている。真奥は言葉も無く立ち尽くす。
「私が……追っている魔王は、残酷で、人の命なんか虫ケラ程度にしか思ってなくて、世界に満ちる悲しみと血を何よりも好む存在のはずよ！」
「俺は……」
「炎で田畑を焼き、雷で城を砕き、大水で街を洗い流し、魔物にあらゆる残虐な行動を許した魔王サタン！　私はあなたを死んでも許さない！　私とお父さんの家と、お父さんの畑と、お父さんの命と、私の穏やかな生活の全てを奪ったあなたを決して許さない！」
「恵美、俺は……」
「それなのに……なんで……なんで魔王が……魔王が勇者に優しくするのよ……」
この世界とエンテ・イスラでの真奥の精神構造は明らかに異なってきてしまっている。
あの頃の残虐な自分。世界を我が物にし、人間を駆逐しようと心に決めていたことは今でも

覚えているし、その意志も明確に残っている。ならば何故今、人間の世界に馴染んで生活していることになんら抵抗が無いのだろう。

「……俺自身あんまり深く考えたことはないが」

真奥は、明確な答を自分の中で導き出せぬまま、言葉を搾り出した。

「とりあえず、なんか、スマン」

「……」

恵美は答えない。答えないだけで、泣きはらした顔のままぽかんと口を開けて、目の前の男の顔を凝視する。

言葉は軽いが、真奥は本心から謝っている。

「いやその、当時は勇者なんかいるとは思ってなかったし、中央大陸の制覇や悪魔連中の統制で忙しくて東西南北まで目が行き届かなかったっていうか……いや、ルシフェルに責任転嫁するわけじゃねぇけど、仕方ないじゃん。悪魔と人間て基本的に相容れないし」

しかも本気で焦っているようだ。視線が宙をさまよい身ぶり手ぶりでなんとか自分の中から言い訳を搾り出そうと必死になっている。

「それにあの頃は俺、人間ってもんをよく理解してなかったから……」

恵美は恵美で、何かを引き出すつもりはなかったにしろ、こんな反応が出るとは予想もしていなかった。途端に真奥の前で取り乱してしまった事実が顔を紅潮させ、羞恥心で顔を背け

てしまう。

「お邪魔しま……」

玄関のドアが聞き覚えのある声とともに開けられたのはそんな瞬間だった。

二人が驚いたように玄関に目を向けると、そこには開いたドアから芦屋に導かれるような格好で入ってきて、そのまま土間で恵美と真奥の様子を見て固まっている千穂の姿があったのだ。

芦屋もまさか二人がこんな状態にあるとは思わずドアを開いたままの姿で呆然としている。

紺のセーラー服姿の千穂は手に紙袋を持っており、そこには新宿のデパートに入っている和菓子屋のロゴが印刷されていた。

「あ、あの、そこで、魔王様とお会いしたいという佐々木さんと会って……」

芦屋が薬局の袋を抱えたままそんなことを言い、千穂はしばし呆然とした後、手に持った紙袋を取り落とした。硬い音から中身は缶入りのせんべいではないだろうかとどうでもいい推測を働かせる。

真奥には千穂の心中がなんとなく分かってしまった。

きっと千穂は昨日のことを気に病んでいるのだろう。自分が言い出したことで真奥が厄介ごとに遭遇してしまっただけでなく、完全に自分の都合で真奥を振り回してしまったのだから。

そのお礼とお詫びのために、フォーマルを意識して制服を着て、ちょっとした菓子折りでも持って挨拶に来たのだろう。今時本当によくできた高校生である。

そして同居人である芦屋とアパートの近くで出会ったのだ。昨日千穂は芦屋と会話らしい会話はしなかったが、あの場にいたことは覚えているだろうし、芦屋は千穂のことを分かっている。そして芦屋は紳士的に千穂をエスコートしたに違いない。

芦屋は気配りのできる奴だから、きっと恵美が朝から訪ねてきた経緯はきちんと説明しただろう。納得した上で千穂は芦屋についてきたはずだ。

とすれば、怪我をした恵美がいることは予想していたとして、その恵美が真っ赤な顔で泣きはらし、真奥が焦るように言い訳をしている姿を見て何を考えたのかは想像に難くない。しかも恵美のスーツは階段転落の結果、少々着衣に乱れがあると言えなくもなかった。真奥はそれだけの考えを一秒で巡らせた。

そしてその想像が間違っていないことは、千穂がよろめくように一歩後じさったことで確信に変わる。

「あ、あはは、ちょ、ちょっと、本当に、お邪魔だったかなって」

「ち、千穂ちゃん……」

恵美は恵美でやはり真奥と同じ結論に至ったのか、千穂の誤解があらぬ方向に飛びそうなことを察して慌てふためく。

「やっぱり、その、真奥さんと、遊佐さん、そ、そうなんですね」

千穂の膝が震えている。目が無表情なのに、口が引きつったような笑みの形になっていた。

これはかなり重度の誤解が生じているようだ。
「そうって、違うのよ千穂ちゃん、これは……」
「ちーちゃん頼むからちょっとおちつ……」
「ご、ごめんなさいっ……」
恵美と真奥の地に足の着かない言い訳などに耳を貸さず、身を翻すと駆け足で出ていってしまう。千穂はローファーを履きながら共用階段から足を滑らせることもなかった。足音が遠ざかるのを三人は固まったまま聞いていたが、
「これ……マズいわよね」
恵美は魂が抜けてしまったような声で呟く。真奥は目を覆って天を仰いだ。
「お、追いかけて誤解を解いたほうがよいでしょうか……」
芦屋は表の共用廊下から周囲を見回すが、既に千穂の姿は影も形も無かった。
真奥はおろおろとまごつく芦屋の手から薬局の袋をひったくると恵美に投げつける。
恵美はそれを思わず受け取ったが、
「お前もう帰れよ。本当お前と一緒にいるとロクなことがねぇ」
そんな暴挙にも暴言にも全く反論できない。
千穂という全く予想外の要因が緊張した場の空気をしらけさせてしまう。
「あらあら真奥さん、大人げない」

だから玄関で立ち尽くしていた芦屋でさえ、
「女性に暴言を吐いても男が許されるのは思春期までですのよ？」
「うおわあっ!!」
背後に黄金の柱が立っていることにその瞬間まで気がつかなかった。
「お、大家さんっ！」
午前の陽光に煌めくマリーゴールドのロングドレス、中世風なデザインのそのドレスと同じ色の鍔広帽子には黄金色に染め抜かれた孔雀の羽が突き立ち、零れるフランス貴族のような黄金色の髪が朝日を照り返している。真珠を編み上げたような煌びやかな持ち手の黄色いハンドバッグを持ち、ライムグリーンのラメ入りショールを羽織りホワイトエナメルのヒールを履いた、少女マンガ家も裸足で逃げ出す群生ヒジキの如き付け睫毛の婦人、このアパートの大家、志波美輝が突然出現した。
芦屋の叫び声で真奥と恵美も大家の姿をした巨大とうもろこしの存在に気がついた。視認した瞬間に纏った黄金の光が後光のように放射されはじめる。
「真奥さんのガールフレンドでいらっしゃいますのね」
しゃがれた声は相応の年を経てきた者の声だと思われるが、この胴回りが酒樽サイズの婦人は、相変わらず外見からは全く年齢を推し量ることができない。
「初めまして、このヴィラ・ローザ笹塚の大家をしております、志波美輝と申します」

太陽の光に当てられたように恵美は眩しそうに目を細めるが、頷く以上のことができない。
「気軽に〝ミキティ〟と呼んでいただいて結構ですのよ」
「は、はぁ……」
他に返事のしようもなかった。
「真奥さんに芦屋さん、今日は入居者の方にお知らせを持って参りましたの……お取り込み中のところ御免あそばせ」
余計な一言とともに一枚の紙が、優雅な香水の香りとともに芦屋に手渡された。
「ここのところ地震が多くなってございますでしょ？　ですから耐震補強工事などしなければならないと思いまして、入居者の方にご確認いただいてますのよ」
初めて顔を合わせた時もそうだったが、真奥は何故かこの大家が苦手であった。決してそのけばけばしさを嫌っているのではないが、何故かこの大家には逆らってはいけないと、魔性の勘が告げるのである。
渡された紙には耐震補強工事の入る期日と、その日一日だけ入居者には部屋を空けてもらうこと、それに伴う家賃の変更などは無いことが明記され、最後に大家の押印に代わり、グロスの入ったゴールドのキスマークが添えられており、真奥はそれに対する感想を顔に浮かべないように必死の自制心を働かせる。
「ねぇ、最近とみに地震が多いですわよねぇ」



そんな真奥をよそに大家はなんでもないように言う。

「はあ」

「多分、今日当たりも起きるんじゃございません？」

「さあ、それは……」

「そういえば、先ほど可愛らしいお嬢さんが泣きながら走っていくのに出くわしましてね」

大家は流し目を同時に三人に送る、という器用な真似をしながら微笑む。

「笹塚駅の方に向かわれたみたいですけれど」

その瞬間だった。

「揺れ……た？」

恵美の声に頷かなかったのは、一人優雅にたたずむ大家の志波美輝だけである。

「真奥さん」

「え……」

「巻き込んだなら、最後まで責任をお取り遊ばせ」

「な、なんの……」

大家が何を言っているか分からず、真奥はうろたえるが、そうしている間にも揺れはますま

す激しくなってくる。
「ま、魔王様！　この震動は！」
芦屋が叫ぶ。
「千穂ちゃん！」
「あの可愛らしいお嬢さんがソナーの直撃を受け、概念送受（イデアリンク）を受信したのが本当にただの偶然と思ってらっしゃるの？」
大家の一言はその場の三人を石に変えた。
「思念や意思が大いなる力を持つのはあなた方が一番よくご存知なのではなくて？　急がないと、手遅れになるかもしれませんことよ」
厚化粧の下に隠れて見えない素顔は、一体何者なのだ。
「ほうら、聞こえる」
それは、轟音だった。

※

「気持ちわりいい！　ゲート酔いしそうだあああ」
「お願いですから吐かないでくださいよ～」

「保証できん……うっぷ」
「しっかりしてください～！　向こうに着いてもゆっくりしてられそうにないんですから～」
「あ？　何かキャッチしたのか？　うぇぇ」
「ソナー計測から割り出した〝ニホン〟の魔力埋蔵量では考えられない規模の～、人為的な魔力反応です～」
「エミリアが、やばいってか」
「その可能性もあります～。戦いは覚悟したほうがいいかもしれません～」
「よし！　急げ！　俺も耐えるから！」
「分かりました～！　いっきますよ～！」
「うおげぇぇぇぇぇ！　あ、あんま揺らすなあああ！」

※

千穂は泣きながらがむしゃらに走っていた。真奥や恵美は何かを言おうとしていたが、とてもじゃないが冷静にその場を切り抜ける余裕など無かった。
やはり、自分は真奥が好きなのだ。
しかし所詮自分は知り合って間もない後輩アルバイトである。真奥と遊佐恵美との間にある

歴史にはかなわない。

間違いなく、初恋だったと思う。真奥には、目的に向かって進む者特有の覇気と活力があった。同世代の親の脛を齧って遊び呆けている男子高校生など、真奥と比べるべくもない。

取り立てて長身でもイケメンでもないがそれでも、千穂は真奥に恋をしていた。

それが破れて、心が千々に乱れて、どうしたらいいかが分からない。がむしゃらに走り、笹塚駅前の人ごみに突入し、電柱にぶつかり放置自転車に躓き、歩行者に正面から激突する。

「ご、ごめんなさい」

顔も上げずに謝罪の言葉を口にするが、

「これはこれは、喰らい甲斐のある」

千穂より頭一つ高い場所から降ってきた声は、千穂が今まで聞いたこともないような冷たさを帯びていた。

「最前の失敗の時に、もしかしてと思いずっと見張っていたけど、こうも簡単に奴らへの絶望に囚われてくれるとはね」

小柄な若い男だった。ばさばさの長髪に、Tシャツとジーンズというごくありきたりの姿。年も千穂とそう変わるまい。だが、その目はどうだろう。

紫色の、千穂が見たこともないような禍々しい虹彩のその瞳の色は。

「佐々木千穂、お前の魔王と勇者への恨みと絶望、この僕が糧とし現実にしてやるよ」

朝方の笹塚駅前の往来でのことだ。人が二人で立ち止まっていれば、それだけで通行の障害になる。

「おい、突っ立ってんなよ」

気だるげな遊び人の雰囲気を纏った若者が、男に後ろから声をかけその肩を摑むが、

「！」

手をかけられたTシャツの肩が突然裂け、中から飛び出してきたものに弾き飛ばされ若者は放置自転車の群れの中に突っ込んだ。

「ひっ！」

千穂が喉の奥で悲鳴を上げる。周囲の人間も、何が起こったかわからず男を凝視する。

それは翼だった。巨大な漆黒の翼が、人間の背から生えている。

「さあ、狩りの時間だ。今日僕は、魔王を超える」

その瞬間、京王線笹塚駅の高架線路が、謎の爆発を起こし崩落した。

真奥と恵美は走った。少し遅れて、芦屋も続く。

地震の後すぐに聞こえてきた轟音。明らかに魔力干渉によるものだった。

大家の口ぶりから、彼女も色々な意味で、ただの人間ではないことは明白だ。しかし今それ

を問い詰めている暇はなかった。
「待ってろ、ちーちゃん！」
真奥は走った。
「あれ見て！」
恵美が前方を指し示すと、
「……なんということを！」
芦屋が呻く。
線路が落ちていた。高架橋が崩落し、笹塚駅に隣接するショッピングモールを押し潰してしまっている。魔力の残滓は確認できるが、それは真奥が咄嗟に作ったような人助けのための結界などではない。
道を塞がれているその先の甲州街道。真奥は首都高に遮られた天に二つの人影を見る。
もはや敵は身を隠すつもりは毛頭ないようだ。難を逃れた人々が遠巻きに瓦礫や虚空に浮かぶ人影を凝視している。
「あいつら……！」
「誰……なの。まさかあいつらがこれを……」
「決まってんだろ！」
真奥は瓦礫をよじ登りはじめる。破断した電線を避けながら、いつまた二次崩落を起こすか

もしれない瓦礫の山を越える。恵美と芦屋も一歩遅れてそれに続いた。

人影は二つ。巨大な翼を広げ脇に何かを抱えている男と、幽霊の如くローブをはためかせ目深にフードをかぶる、こちらも男。

瓦礫を超えるさなか、真奥は感じていた。今また、己の中に戻りつつあるものを。何故だろう。喜ばしいはずなのに、忌々しい。こんなことで、取り戻すはずのものではなかったのに。

その思いは悪魔であった頃なら絶対に感じもしなかった思いだ。しかし、今の自分は。

「よお、ルシフェル。お隣にいらっしゃるのは新しいお友達か？」

翼を広げ虚空に浮かぶ影は、その暗い笑いだけを真奥に届けた。

「これはこれは、魔王サタン様。いや、今は、真奥貞夫、と呼ぶべきなのかな。アルシエルも元気そうで何より」

「ルシフェル……？　嘘でしょ……？」

「ば、バカな……何故貴様がここに」

恵美は唖然として言葉を失っている。芦屋も目の前の光景が信じられないといった様子で首を振っていた。

真奥だけが、厳しい表情を動かすことなく宙に浮く二人を睨みつけていた。

ルシフェルは勇者エミリアが一番最初に倒した悪魔大元帥だ。悪魔にして堕ちた天使。エンテ・イスラ西大陸攻略を指揮していた魔王軍司令官。

「久しぶりだね、勇者エミリア……いや、遊佐恵美」
「嘘……嘘よ……」
「そうだねぇ、お前の剣は確かに僕を貫いた。だが僕はここにいる」
悪魔大元帥ルシフェルは堕天使の名に相応しく禍々しい黒い翼を広げてにやりと笑う。その脇にまるで猫の子のように抱えられているのは、気を失った千穂だ。
危害を加えられているわけではなさそうだが、何故彼女が捕らわれているのだろうか。
「新しいお友達のおかげ、だろ？」
フードの男に顎をしゃくる真奥。
「泡食って西大陸の調査に行かせた時、お前が死んだって確証が持てなくてな。あの頃は悪魔大元帥が、まさか人間にやられるなんて万が一にもあり得ないと思ってたから、調査が不徹底だったのかもしれんが……」
「おかげで命拾いをしたよ」
「アルシエル、マラコーダ、アドラメレクと違ってお前は生粋の悪魔じゃねぇからな。だが天の血が混じってりゃ教会勢力が強い西大陸攻略は容易だと思ったんだが、失敗だったな」
「そうだね。僕も初めは主命を忠実に実行すべく人間勢力の駆逐に全力を尽くした。しかし」
ルシフェルは恵美を睨みすえる。
「力及ばず勇者の一味に敗れた。そこまでは知っての通りだよ」

「その後のことは、そちらのお友達が説明してくれんのか？」
「どうする？」
ルシフェルが横に並んで浮かぶローブの人物に問いかける。男の声で笑ったそいつは頷いたように見えた。
「いいだろう。私は……」
「大法神教会〝六人の大神官〟の一人、オルバ・メイヤー？」
真奥がなんでもないように言ったその名前に反応し、男の動きがぴくりと止まる。
「！」
恵美はもう混乱の極地だ。何故ならその名は……。
「オルバ！　嘘でしょう！　オルバは私の……」
「お前をこの世界に送り込み、俺もろとも抹殺しようとしたお前の仲間さ。そうだろう？」
「……知っていたのか？」
出端を挫かれたように少し残念そうな声を出しながら男がフードを持ち上げる。そこには五十前後の穏やかな中年男の顔があった。大法神教会に所属する高位聖職者の特徴である剃髪された頭が、朝の陽光を受けて煌いた。
純白に青と銀の糸で刺繍を施した大神官の法衣が、ビル風にはためく。
「悪事は魔物の専売特許だ。悪い奴の考えることなんか端からお見通しだ。ゲートに入った

恵美の後ろにいたのはお前なんだろ？　それを聞いた時に大方予想はついてた。お前以外に、俺や恵美に対して仕込みができる奴はいない」

「嘘……嘘よ。オルバ、何故、あなたがルシフェルと一緒に……私を、まさか……」

「全てはルシフェルがエミリア、君に負けてから始まったのだよ」

大神官オルバは薄笑いを浮かべてさぁこれからだ、と言わんばかりに声高く語ろうとしたが、

「魔王軍を駆逐した後、勇者に威張られちゃイヤだから、異世界に放り出して力の落ちてるうちにルシフェルを取り込んで、こっそり勇者一味を抹殺してお偉方の既得権力を守ろうとしました、はい終わり。何か訂正はあるか」

真奥はまたもオルバの話の腰を折る。

しかもそれが図星であったのか、オルバは二の句が告げずに口をぱくぱくさせながら黙ってしまう。真奥はこれ以上ない程の嘲笑を浮かべてオルバに言う。

「筋書きがありきたりなんだよハゲ！　こいつが功を誇って威張りだすようなタマか。B級映画だってもうちょいマシな脚本書くぞ」

と真奥は隣の恵美の頭を小突く。

「ちょ、ちょっと何するのよ」

あまりのことにショックを隠せなかった恵美だが、真奥の突然の行動に我に帰る。

「……ハゲ……B級」

違う意味でショックを受けているオルバ。

「あの、魔王様、あれは決してハゲているワケでは」

何故か敵の弁護をする芦屋だが、真奥はそれを無視して二人の敵を傲然と見上げる。

「だから天界って嫌いなんだ。本音と建前が正反対のお前らより俺達悪魔が治めたほうがまだ人道的だぜ。ルシフェルを取り込んだ方法も想像つく。天界復帰をエサに釣ったんだろ？」

「な、何故それをっ！」

「『何故それを』じゃねぇよ。もっとヒネれよ。どいつもこいつもB級で、こんな奴らに謀られたかと思うと涙が出てくる」

「ま……魔王風情が!!」

オルバが怒りに声を荒げるが、

「ハゲが偉そうに、俺に指摘されて涙目になるくらいなら、もっとマシな筋書き立てろや」

真奥の悪口雑言としか言いようのない罵倒に、オルバやルシフェルどころか恵美すら呆気に取られている。

「て、今度は『本気になったルシフェル相手に前のようにうまく逃げられると思うな！　勇者ともども滅ぶがいい！』ってか、あーだせぇだせぇ！　特撮ヒーローの悪役だって、もっとひねったセリフ吐くぜ！」

「特撮って何よ！　こんなときに何言ってんのよバカッ！　っていうか、千穂ちゃん人質に取

られてるのよ自覚ある!?」

恵美が耐え切れずに真奥の後頭部をひっぱたく。

「空気読みなさいよ少しは！　向こうが丁寧に自分の悪事をバラしてくれるところだったのに、変な茶々入れないでよ！」

「魔王様！　一体いつ映画など見る機会があったのですか！　そんな無駄遣いを……」

恵美と芦屋が微妙にピントのずれた理由で口々に真奥を非難する。真奥は若干涙目になって、

「痛ぇなバカ、向こうが言いたいようにさせてたら、お前ショックで立ち直れないだろが。だから俺がうまく和らげようとオブラートに包んで言ってやったのに！　それにいいだろたまには映画くらい！　金稼いでるの俺なんだぞ！」

と抗議した。しかし恵美も芦屋も引き下がらない。

「あなたにそんな気使われる覚えないわよっ！」

「私もたまには主夫業を休んで娯楽に興じたいのをずっと我慢していたのですよ！」

「貴様らいい加減にしろっ！」

オルバが怒声を上げて三人の言い合いを止める。

「黙って聞いておれば愚弄しおって！　許さんぞ魔王サタン!!」

「あー三流。ありきたり。言い回しの語彙がB級以下」

「ぐぬぬぬぬ……！」

生卵を落とせば目玉焼きが出来そうなほどに顔を真っ赤にしたオルバに、
「なあ、そこの大根聖職者。一つ聞くがよ」
真奥は耳の穴をほじりながらついた耳垢を飛ばしつつ鋭く尋ねた。
「お前、ルシフェルの魔力を維持するために、どんだけ人間を襲った」
「！」
「なっ!!」
「ええっ!?」
「……流石は魔王様、そこまで気づいていたか」
オルバ、芦屋、恵美、ルシフェルがそれぞれの反応を見せる中、
「なあ恵美、この国の神と悪魔は、どこに宿っていると思う？」
真奥は重々しく口を開いた。
「いきなり何よ……」
「答えは、人間の心の中だ。お前も薄々分かってんじゃないのか」
「人の……心」
「そうだ。神に支配されていないこの国の人間は、容易く聖にも魔にも転がる。極限状態に追い込まれた人間の見せる神性と魔性。それこそが俺達がこの国で力を得るための力の源」
「……そんな……じゃあ」

頷いて真奥は、ルシフェルに向かって顎をしゃくってみせる。
「あんな悪魔の本性見せられたら普通チビるだろ。恐ろしくて何もできねぇだろ普通の人間は。最近の連続強盗の犯人は、恐らくあいつらだ」
恵美はむしろ否定の言葉を聞きたくてオルバを見た。しかし、オルバは何も言わない。彼らはいつからこの国に来ていたのだ。その間、飲まず食わずでいたはずがない。一体どうやって、日々の糧を手に入れていた？
「俺が昨日の事件で少しだけ元に戻ったのも、そのあたりが原因だ。死への絶望が、勝手に体に入り込んできた」
オルバには最後まで否定してほしいと願う自分が、恵美の心のどこかにいた。しかし、そうだとしてもルシフェルとオルバが行動をともにしている理由はどうしても分からない。
「その恐怖と悲しみって負の心から魔力を吸うのさ。一度目の魔力弾の襲撃や、昨日の地震で使った力を、どうやって回復させたんだろうな」
その瞬間、恵美は魔力弾で襲撃された日の翌朝、そして昨夜梨香の部屋で見たニュースを思い出し、顔をしかめた。
「じゃあ、エンテ・イスラに帰るほどに強力な魔力を得るなら……」
「そりゃあなぁ、大災害起こさなきゃどうしようもねぇな。一人二人から得られる力なんざ高が知れてるし」

「そんな……」

「俺この世界結構好きなんだ。人間になるのも色々と新鮮で面白かったし、世話になった世界に迷惑かけたくねぇから、俺はそういう方法は取りたくないんだ……で」

真奥は薄ら笑いを浮かべたまま頭上の二人を仰ぎ見た。

「どうする？　ここで、やるのか？」

それだけで二人が動揺したのが分かった。

「し、しかし魔王！　この少女がどうなってもいいのか。貴様とこの少女が懇意であることは調べがついているんだぞ！」

最早人の道から脱落しているオルバの言葉に、真奥は苦笑するしかない。

「なあ勇者エミリア。俺は聖職者が嫌いだ。だがそれ以上に、裏切り者はもっと嫌いだ」

恵美は束の間、真奥とオルバを交互に見ていたが、やがて目線をオルバに定める。

「……そうね。私も悪魔と裏切り者は大嫌いよ」

「いいのか？　折角温存していた力なのに、戦っちまったら帰れなくなるかもしれねぇぞ？」

「真面目に働いてれば、きっといいことあるわ」

「いい心がけだ」

恵美は苦笑する。

真奥もつられて笑うと、軽く指で天を招く。

「やるなら来い。ぶっ潰してやるよ。そんで、ちーちゃんも返してもらう」
その堂々たる威容は在りし日の魔王を思い起こさせるに十分ではあったが、
「し、しかし魔王様」
後ろから緊迫した空気を壊したのは芦屋であった。
「ここは相手の状況を見極めるべきです。何故今になって突然仕掛けてきたのか分からないうちは、うかつに事を構えるのは危険……」
「いい忠告だね、アルシエル。つまりこういうことだよ」
そう言ったルシフェルの翼が一瞬光ったように見えた。
何かの風切り音と、一瞬の呻き声。真奥と恵美は振り返る。
そこには、何かに撃ち抜かれた左胸の傷から、血を噴出し倒れる芦屋の姿があった。
「あ、芦屋っ！」
真奥は叫ぶ。
「へぇ、同居人のアルシエルに対してもこの威力か。この娘、よほどお前らに絶望を抱いていると見えるね」
ルシフェルのあざ笑うような、哀れむような言葉。
芦屋が血を流し倒れたことで、一瞬で周囲にパニックが蔓延する。高架線路の崩落が起こって尚、日本人特有の危機意識の低さか、依然物見高い野次馬が大勢ルシフェルたちを見上げて

いたのだ。散り散りに逃げる人間達には目もくれずルシフェルは呟く。
「若さとは罪だね。些細なことで、これほど人に絶望し、悲しみを増大させるとは」
「お前っ……ちーちゃんの心を……」
真奥は目を見開く。
「特定の誰かに対する負の感情とは御し易いものだよ。以前とは比べ物にならないほどの威力で、お前達だけに効果のある魔力弾を撃てるようになったよ……ほら」
その瞬間、ルシフェルの翼が暗く輝き、無数の光弾が地上に降り注いだ。
「くっそ……」
とても人間の貧弱な足で避けきれるような数と速度ではなかった。真奥は舌打ちすると、両手を掲げ空を払うような動作をする。すると無数の光弾はその手の動きに合わせて軌道を変え、近くのビルに着弾した。
爆音が響き、とばっちりを食った雑居ビルの窓ガラスは全壊し、中にいた人間が巣をいぶされた蜂のように飛び出してくる。
「魔王！　アルシエルが！」
恵美は倒れたままピクリとも動かない芦屋の頭を起こすが、胸から流れる血は止まる気配は無く、肌が一気に紙の色になる。首と手首に指を当てると、脈動が弱く、速かった。
「……だらしねぇ！」

「人のことを言える状況かな？」
「ぐっ！」
続けて第二射が放たれる。真奥はやはり空に手を掲げ払うような動作をするが、
「やべっ、足りねっ！」
「ちょっとおお！」
高架の瓦礫を越えた時、ほんのわずかに流れ込んできた恐怖の心から生まれた魔力。しかし真奥自身がそれを積極的に取り込もうとしなかったため、ルシフェルの心理的指向性のある魔力弾の雨をたった一回払っただけでガス欠を起こしてしまったのだ。
恵美は思わず顔を伏せる。芦屋をかばいながらでは聖法気の対魔力障壁を張り出すことができなかった。
真奥が払いきれなかった魔力弾がコンクリートを打ちつけ、
「うおおおっ！」
真奥の絶叫は、爆発とともに舞い上がったアスファルトの粉塵に飲み込まれる。魔力弾の余波は電線や電柱、ビルにまで及び、笹塚駅前はあっという間に戦場の如き有様に変貌した。
「はっはっは！　勇者エミリアに敗北して以来の破壊の味が、まさかこれほど美味とは！」
ルシフェルの哄笑が響く。粉塵舞い散る笹塚駅前は既に修羅の巷であった。
逃げ惑う人々と逃げ遅れた人々、日常生活ではあり得ない爆発と奇怪な出来事に完全に街が

本来の機能を停止してしまった。

「調子に乗るなルシフェル！　目的は魔王とエミリアの抹殺なのだぞ！」

その様子を見た横からオルバが叫ぶと、ルシフェルはうるさそうに横目だけでオルバを睨む。

「お前が僕に意見する気かい」

ルシフェルの迫力に一瞬怯むオルバだったが、それでも脂汗を浮かべつつ語気鋭く言い放つ。

「わ、私がゲートを操作し、天界への橋渡しをするのを忘れたわけではあるまい」

「……忌々しい」

ルシフェルは殊更大きく舌打ちすると、小脇に抱えた千穂に目を落とす。

「案ずる必要は無い。今の魔王と勇者エミリアはこの小娘がいる限りは逃げやしないさ」

舞い上がった粉塵が収まると、その場には芦屋の血痕だけが残り、真奥と恵美と芦屋の姿は無かった。

「ルシフェルっ！」

「慌てるなよ。どんなに力を温存しようと、大した抵抗はできはしない。追うよ」

二人の男は笹塚の空を滑空した。

「ちょっと！　さっきのは虚勢だったの？」

裏路地の物陰を使って上空の二人から逃げ回る真奥と恵美。しかし二人で肩を担いでいる芦屋の流す血の痕を点々と道に残してきてしまっている。それを追跡されているのだろうか、
「無茶言うな！　俺だって実際はほとんど魔力使い切っているんだぞ」
すぐそばの庭先にある植木鉢が物凄い音を立てて砕け散った。
「撃たれたの!?」
「見りゃ分かるだろ！」
背後の空を振り返ることすらできず、恵美は電柱の陰に飛び込み、真奥は民家の軒先に身を潜めた。しかし大柄な芦屋も抱えたままでは頭隠して尻を出しているようなものだ。
「さっきまでの威勢はどこにいった！」
ルシフェルの落雷のような大音声とともに、巨大な魔力球が、真奥の隠れる民家を直撃した。
「おあああっ！」
爆風で真奥と芦屋は軽々と吹き飛ばされ、着地姿勢すらとることができない。
「な、なんてことを……」
恵美はなんの躊躇も無くこの世界を巻き込むルシフェルを見て愕然とした。魔力球で圧壊した民家に人はいたのだろうか、確認する術はない。
「逃げるぞっ！」
真奥はそれでも戦うそぶりすら見せずに芦屋を担ぎ上げ、懸命に逃げようとする。

「逃がさないよ！」
ルシフェルが逃げる真奥の背目がけて指で銃の形を作る。
「危ないっ！」
恵美がそれを見て叫ぶが間に合わず、真奥は肩口を撃ち抜かれ、芦屋ともども倒れ伏した。
「いってえええええ！」
真奥は痛みに絶叫する。
「人間の体脆い！　分かってたけど脆い！　くっそー！　死にたくねー！」
「何を泣き喚いてるのよ！　それでも魔王サタンなの!?」
恵美が物陰から飛び出して、真奥と芦屋を背にルシフェルを睨みつける。
「……あれぇ？　エミリア、お前が魔王様をかばうのかい？」
嘲るように笑うルシフェルだが、その挑発に恵美は乗らない。
「ルシフェル、あなたやはり本領ではないわね？」
時間を稼いで戦況を見極めなくては。芦屋は瀕死であり、真奥も決して戦力にはなりえないだろう。
何より未だにルシフェルに抱えられたままの千穂の身の安全を考慮すると、下手は打てない。
「……それがどうした」
ルシフェルは恵美の言葉を敢えて否定はしない。

「魔力球にしろ指弾にしろ、私がかつて戦ったあなたは、今とはレベルが違ったわ」
「……今のお前達を葬り去るなら、これで十分ということだよ」
わずかに空いた間を、恵美は聞き逃さない。
「余裕を見せた悪役は必ず負けるものよ」
「そうだ！　お前今死亡フラグ立てたぞゲハっ！」
倒れたまま喚き散らす真奥を、恵美は振り向きもせずに蹴りつける。鈍い呻き声が上がった。
「要するに、ここで本気を出すことができないのはあなたも同じってことね。そして」
ルシフェルの後ろから何故かゆっくりついてくるオルバ。
「あなたは、もっと無駄遣いできない。そうよね、腐っても聖職者だし、ルシフェルと違って邪悪な手段で回復できるようなら苦労ないだろうし」
オルバは聞こえているはずだが何も言わない。
「でもね、私にも我慢の限界があるの。やられっぱなしでいられるほど、勇者エミリアは甘くないわ」
「今はこらえろフゲッ!!」
真奥の声はまたもかかと後ろ蹴りに遮られる。
「今足触ったでしょこの変態!!」
「血まみれで倒れてる俺が気づいてもらいたくて足を摑むのは、鳩尾を蹴られるほどの罪か」

真奥はよろよろと立ち上がるが、明らかに顔色が悪くなっている。今にも担いだ芦屋に押し潰されかねない。

「……死んだら見捨てるわよ」

「安心しろ、部下に殺されたなんてったら末代までの恥だ」

すると真奥は、突然恵美の手を掴むと引っ張って、千鳥足で逃げはじめるではないか。

「ちょ、ちょっと何するのよ！」

思いのほか強い力で恵美を引っ張る真奥。しかしよろよろと覚束ない足取りで振りきれる相手ではない。

「なんのつもりだい？　逃がさないよ？」

ルシフェルは余裕の笑みを浮かべて更に真奥を撃ち抜いた。足を切り裂かれ真奥は倒れる。

血まみれの男女三人が白昼の交差点に躍り出て、周囲に叫び声が広がった。

「……ってぇ……」

「あんた何やってるのよ！　死ぬつもり!?」

「へへ……死にそうか？　俺……」

恵美は崩れ落ちる真奥を支えるが、ルシフェルとオルバはまるで弱った獲物をいたぶるように後ろからついてくる。

「へへ……」

「何笑ってるのよ気持ち悪い！　冗談じゃないわよ！　魔王を殺すのは私よ！　なんで私と一緒に魔王が殺されなきゃいけないのよ！」

真奥は交差点の車道に芦屋ともども倒れ込んだまま動かない。

奇しくもそこは。真奥と恵美が日本で再会したレストランがある交差点であった。

恵美の顔を掠めて更にルシフェルの指弾が真奥の肩を引き裂く。その衝撃で二人とも倒れてしまう。

「弱いね。これがかつて僕の上に君臨し、エンテ・イスラを手中に収めんとした魔王か」

ルシフェルが哀れみとも取れる微笑を浮かべる。

「……早くしろ、今ならエミリアともども葬れる。私はゲート制御の力を残しておかねばならないんだからな」

オルバはそう言うと、ローブの懐から拳銃を取り出したではないか。恵美は目を見張る。

拳銃など当然エンテ・イスラの武器ではない。ということは、ルシフェルかオルバのどちらかが、この世界で手に入れたということになる。

真奥と恵美を狙い撃った狙撃事件や、連続路上強盗事件に、オルバは積極的に加担したのだろうか。

エンテ・イスラでの旅の間、大神官の名に恥じぬ立派な聖職者として誰からも尊敬され、天界の力と慈父の笑顔でエミリア達の旅を癒し続けた男の皮をかぶった何者かが、今目の前で自

分に異世界の凶器を向けている。恵美は、エミリアは、悲しさと悔しさに歯噛みする。

一体何が、オルバをここまで変えてしまったのだろう。

穢れた聖職者は、恵美の心中はお構いなしに、倒れる真奥と恵美に銃口の狙いを定める。

そのとき、恵美の耳に遠くから複数のサイレンが近づいてくるのが聞こえた。警察消防が一帯を捜索しはじめたのだろう。ここまで来るのに真奥達もルシフェル達も、大勢の人間の目に留まっている。通報されて当たり前だ。しかしルシフェル相手では、益々被害は拡大してしまうだろう。

真奥はそんな様子を、出血と疲労で薄れつつある思考の中で感じ取っていた。

「……いいな。これで。多分、あいつらなら……」

真奥は誰にも聞こえない声でそう呟くと、

「恵美、つかまってろ」

と隣で倒れている恵美の手を取った。

そして、

「んんっ？」

真奥と恵美が淡く白い光に包まれ、ルシフェルとオルバが同時に魔力と鉛の弾を着弾させた時には、

「……空間転移が可能なほど魔力を残していたのか」

その場には真奥と芦屋の血痕があるばかりで、三人の姿はどこにも無かった。
「ルシフェルっ！」
「……この期に及んでの転移さ。遠くに逃げる魔力も残ってはいないよ。追うのは簡単だ」

「っぷはっ！　ビックリした！」
恵美は真奥が転移魔法を使ったことに驚いたが、今はそれを責めるより先に状況確認である。
大した距離は逃げていない。と言うより、最初にルシフェル達とまみえた場所に戻ってきただけの話で、魔力の航跡をすぐに察知されてしまうだろう。
先ほどと違うことは、そこかしこに危機感の無い典型的日本人の野次馬と、ルシフェルの魔力弾に巻き込まれた人々を救助する警察消防の車両があることくらいか。
「で、でもこんなところに逃げてどうするつもりよ」
今度こそ逃げ場は無い。というより逃げる余力が無い。平気で民家を壊しにかかったところを見ると、どうやら前回の襲撃以来この世界の人間を巻き込むことになんら躊躇が無いようだ。
「ちょっと！　死なないでよ！　大丈夫なの？」
「……」
真奥は息こそしているが血を流しすぎたのか顔色が真っ白になっている。芦屋に至っては白

を通り越して青ざめはじめており、いつ死んでもおかしくない。
「まさか救急車目当てでここに来たわけじゃないでしょうね？」
「……んなわけ……あるか」
「でもっ！　あなた達今のままじゃ死ぬわよ！」
「わあってるよ」
真奥は恵美の手を借りてなんとか体を起こす。
「もうちょい……だと思うんだが」
「今のお前達に秘策などあるのかい？」
絶望的な声がかかる。見れば先ほどと同じようにルシフェルとオルバが首都高を背に浮かんでいる。この程度の距離を空間転移したからと言って逃げ切れるはずもない。絶体絶命だ。
「ルシフェル！　長引くと目撃者が増えるぞ！」
「オルバ、お前はピクつきすぎだよ。増えたなら減らせばいい」
恵美は戦慄した。ルシフェルは不穏な発言とともに急激に魔力を高めている。
「な、何をする気!?」
「謎の爆破テロ、首都高倒壊。犠牲者多数。この国の常識ならそんなところだろうね」
ルシフェルはにやりと邪悪な笑みを浮かべると、
「だが、また新宿地下道の時のように魔王に戻られてはかなわないから」

恵美のすぐ横を、光が掠めた。
「ぐ、がっ！」
呻き声は、恵美の腕の中だった。
「魔王っ!!」
ルシフェルの光弾が真奥の胸を撃ち抜いていたのだ。真奥の胸の中心に黒々と穴が開き、真奥の瞳から光が一瞬で失われた。芦屋を支えていた手から力が抜け、芦屋の体が地面に投げ出される。
「魔王！　魔王！　しっかりして！　魔王！」
ぐらりと恵美の腕によりかかった真奥。恵美は真奥の頬を叩くが、ぴくりとも動かない。
「嘘よ！　嘘よ！　そんな、魔王！」
横たえて心臓マッサージをしようとしたが、貫かれた胸を見て息を呑んだまま固まってしまう。人間の、心臓の場所を的確に貫いている。蘇生させる手段などどこにも無い。
そんな恵美と真奥の様子を見て、満足そうな笑みを浮かべたルシフェルは、
「もう用は無い。小娘は返してやるよ」
と、抱えっぱなしだった千穂をまるで紙くずを捨てるように空から投げ捨てたのだ。
「千穂ちゃん！」
恵美は涙に濡れた顔を上げると、慌てて落下点に滑り込むが、

「うぐっ……！」

脆弱な人間の肉体は、数メートル上空から落ちてくる少女を受け止めただけであっさりと砕けた。千穂の下に滑り込んだ恵美の足が、あり得ない方向に曲がっている。

その様を遙か高みから睥睨するルシフェルは、嗜虐心たっぷりの笑みを浮かべた。

「オルバ、契約を完遂する。約束は守ってもらうよ」

そう言うと、腕を左右に大きく広げる。その両の掌に、先ほど民家を圧壊したものとは比べ物にならない魔力の奔流が集結しようとしていた。

「な、何を……!?」

恵美は痛みをこらえながらルシフェルを見上げる。しかしルシフェルは、恵美を見ていなかった。その視線にあるのは、首都高。

「ルシフェルっ！　やめなさいルシフェルッ！」

ルシフェルの意図を悟った恵美は千穂の下敷きになったまま叫ぶが、そんなことで悪魔大元帥が止まるわけがない。

「……良い声だ。最期まで、破壊の音と絶望の叫びで、美しいコーラスを奏でてくれよ」

首都高を支える橋脚の一つに向かって魔力球を放った。

「さらばだ勇者エミリア！　魔王とアルシエルの後を追うがいい！」

巨大な二つの爆発が橋脚を完全に破壊する。

その場にいる人間全員が天を仰いだ。黒いコンクリートの天蓋が、轟音を立てて迫ってくる。まるで巨大な生き物の顎が、この世の者ではない咆哮を上げながら迫ってくるかのようだ。

傾き倒れはじめた首都高を、最早誰も止めることなどできない。

天板の崩落が始まり、首都高を走っていた車が混乱の中次々と落下しはじめる。

人々の絶叫すらかきけして倒れる首都高の下、恵美は千穂の頭を抱きしめた。

その場に顔と体を伏せ、どうにもならない絶望と無力感に囚われ、意識と視界が闇に落ちた。

「さすが、B級。期待……通り」

胸を貫かれたはずの真奥が、血まみれの顔で笑みを浮かべたことに、誰も気づかなかった。

※

恵美は目を開いた。

死を覚悟したところまでは覚えているが、意識があるということは、自分は死んではいないということだ。

しかし、高速道路の崩落に巻き込まれて無傷でいられるはずがない。一体何が……。

「……んっ」

体は動く。何かが自分の上に覆いかぶさっていたが、それがルシフェルに投げ捨てられた千穂だと思い出す。

「千穂ちゃんっ！　……っぐ」

慌てて起き上がろうとして、初めて恵美は自分の足の状況に気がついた。途端に体中の血が沸騰したような痛みが全身を駆け巡るが、そのことがより自分が生きていることを実感させた。

「ん、げほっ」

千穂が呻いた。恵美は千穂の下からゆっくりと体を起こし、足をかばいながら千穂を地面に横たえた。

「千穂ちゃん、千穂ちゃん！」

「……あ」

頬を叩くと、思いのほか簡単に千穂は目を開いた。気絶させられていたと言うより、ルシフェルの魔力で眠らされていたのだろう。

「遊佐さん……いっつ……！」

恵美のことを認めつつも体が痛むのだろうか、呻いて顔をしかめる千穂。

「あの、翼……怖い人……」

そのうわ言のような千穂の言葉に恵美は思わず顔を上げる。そうだ、自分達が無事なら、最

も警戒しなければならないのはルシフェルだ。しかし、上げた先の視界は黒一色に遮られていた。視界を遮っているものは？

絶望的な轟音と首都高の崩落。ならなぜほぼ真下にいた自分は無傷なのだ？

答えは目の前にあった。

「クックック……」

地を這うような暗い笑い声を聞き、恵美は戦慄する。

闇よりも深い闇。暗闇にあって尚黒き光を放つその姿。かつて恵美の剣が打ち砕いた角はやはり欠けたままだが、その魔力、威圧感、存在が与える恐怖は拭い去りようがない。

その瞳は血の河の如く赤いのに、その肌は全く血の通わぬ冷酷さを象徴する白。黒き光を放つ翼を持つ、二メートルを超える身の丈の男。

そこにいるのは、ルシフェルに胸を貫かれて死んだはずの、マグロナルド幡ヶ谷駅前店A級クルー真奥貞夫ではなかった。

「感謝するぞルシフェル……おかげでようやくこの姿に戻ることができた」

己の魔力で崩落しかけた首都高を支えている悪魔そのものの姿。

「魔王……サタン……」

エンテ・イスラを修羅の巷に叩き込んだ魔王サタンの在りし日の姿が今、目の前にあった。

悪魔の王の、血の色をした禍々しい切れ長の瞳が、恵美を、勇者エミリアを睨み据える。

その瞬間、恵美は言いようの無い絶望を抱いた。

「な、何故……」

ルシフェルはうろたえて、顔を引きつらせる。確かに真奥貞夫を撃ち抜き、命を絶ったはずだ。如何に魔王といえど、死んだ体に絶望から来る魔力を引き寄せられるはずがない。

だがこうして、真奥貞夫は魔王サタンとして、今目の前に立っていた。

超巨大質量である首都高を片手の魔力で支えているその力は、新宿地下道崩落の時の比ではない。やはり魔王は魔王なのだ。一体どれほど広範囲の人間から、力を得ているのだろう。

一方で、この騒ぎを引き起こしたルシフェル本人は、ほとんど絶望も恐怖も喰えずにいた。全て、魔王サタンに吸い寄せられてしまったのだ。悪魔としての在り方そのもののレベルが違う。

悪魔大元帥と、魔王の間には決して越えられない実力の壁が存在したのだ。

そのとき、事態が動いた。

「……勇者エミリア」

魔王が口を開いたのだ。

その音を聞いただけで、まだ近場にいた意識のある大勢の人間が恐怖におののきはじめる。

「あ、あ……」

千穂の有様が魔王を視認している全ての人間を代弁している。存在するだけで、恐怖。目にするだけで、絶望。

オルバなど予想外の出来事に、空中で腰を抜かすという大変器用なマネをしている。

それだけの力と、意志と、魔性が込められているのが魔王の声なのだ。ルシフェルにいいようにいたぶられていた先ほどまでの情けない姿など影も形も無い。

「……」

恵美は返事ができない。

魔王サタンが本来の力を取り戻した。それならばどう考えても彼は敵である。ルシフェル、オルバだけでも難敵なのに、魔王が加わっては恵美一人では太刀打ちできない。

魔王はエンテ・イスラの頃の残虐さと魔力を取り戻し、この世界に混沌をもたらすだろう。

その想像が一瞬にして脳内を駆け巡った。

死への恐怖が一瞬にして世界崩壊の絶望に変わるはずだった。

次の瞬間までは。

「……うおいっ！　シカトか恵美っ！」

「はへっ？」

それが目の前の邪悪な悪魔の王から発せられたと理解するのに、恵美どころかルシフェルすら数秒の時を要し、未知の恐怖におののいていた千穂の震えがピタリと止まった。

「わ、私？」

「私？　じゃねぇよ！　何ボケてやがんだ！　早くアイツなんとかしろって！」

そう言うと魔王サタンは空いている方の指でルシフェルを指差した。

「え？　あ、え？」

恵美は混乱していた。言われていることの意味を脳が理解できない。

「早くしろコレ重いんだよっ！」

見ると魔王の魔力に支えられた首都高の瓦礫が徐々に徐々に高度を下げはじめている。

「魔力が、ナマってる……重い、マジ辛い」

ルシフェルも恵美も、オルバでさえも、情けないことを言いながら冷や汗のようなものを流しはじめた魔王を呆気に取られて眺めるばかりだ。

そして千穂は一人、その異形の生き物を見て、呆けたように呟いた。

「真奥……さん……なの？」

「魔力って……なまるもんなの？」

恵美の場違いな疑問に律儀に答える魔王。

「見ての……通りだ……お願い、早く……」

今まで片手の魔力だけで支えていたのは、どうやら単に格好をつけていただけらしい。力の限界が来たかのように、両手で大きな荷物を抱えるような姿勢になる魔王。首都高の天板だけ

でなく、崩落に巻き込まれた車や人間も支えているらしく、いずれも空中で停止している。
「ン……しょっとぉ！」
空中で踏ん張り気合を入れなおす魔王サタン。四股を踏んで魔力が一時的に増強する様を恵美は初めて目の当たりにして、
「バカじゃないの」
そう言って微笑んだ。その瞬間折れた足が痛み顔をしかめるが、
「こんなフザけた魔王、見たことない。死んだと思ったのに、なんで生きてるのよ」
それでも言葉は止まらない。
「知ってるか、最近じゃ、心臓止まっただけじゃ死んだとみなされないんだぞ。心臓止まっても、脳は何分か生きてるんだってさ」
にやりと笑ってみせる魔王だが、恵美は唖然としてしまう。
「要するに……危なかったってこと？」
「まあなー。ルシフェルが普通にお前と戦い始めたら、間違いなく死んでた。不思議と悪い奴って、面倒くさがってトドメを一気に刺そうとするから、それに賭けたんだ。いやー、危なかった危なかった。敵がB級で助かった」
魔王はあっけらかんと言い放つが、要するにルシフェルが大規模破壊を起こさなければ、あのまま真奥貞夫として死んでいたということだ。一か八かの賭けにも程がある。

「ところでこれ、マジで重いんだけど助けてくんねぇ？　いや、手伝え！　手伝ってくださいお願いします！」

そして散々心配をかけた上に、この態度だ。安心と呆れを通り越し、ふつふつと静かな怒りが込み上げてきた恵美は、魔王の懇願を一蹴する。

「お断り。私は勇者よ。腐っても魔王に手を貸したりするもんですか」

「むっ？」

その場で片足をかばいながら立ち上がる恵美の姿を見て、ルシフェルが唸る。

魔王の言動は完全にルシフェルの理解の外にあった。しかし、真の姿を取り戻して尚、魔王は勇者と共闘し、この世界の人間を助けようとしていることだけは理解できた。

「だから、あとちょっと踏ん張っていなさい」

恵美が右手を額の前にかざす。

「私がすぐに、決着つけてあげるから！」

「ゆ、遊佐さん？」

恵美は腰を抜かしている千穂を見下ろして微笑む。

「少しだけ、そこで見てて」

千穂の頭上に手をかざすと、千穂の体は一瞬で輝く金色の透明な球体にすっぽりと包まれた。聖法気による対魔力障壁だ。

「遊佐さん、これ！」
恵美は一際明るい笑顔を浮かべた。
「千穂ちゃんには、知ってて欲しいの。なんとなくね」
そしてその手を勢い良く振り下ろす。
変化はその瞬間に起こった。
揺らめく恵美の漆黒の髪。それが光を放ちはじめる。恵美の右手の内側に閃光の如き光が宿る。
「顕現せよ！　我が力、魔を滅せんがため！」
「う……おっ……」
ルシフェルが後退する。恵美を中心に風が巻き起こる。ただの突風で悪魔たるルシフェルが物理的影響を受けるはずがない。恵美が巻き起こしたその力は、
「聖法気……」
「私は勇者。世界が変わっても、その真実だけは変わらないっ！」
瓦礫の雲が闇を落とす地上に、一柱の太陽が現れた。
蒼銀の絹糸の如く輝く髪、大きな瞳が如何なる魔も打ち抜く緋色の視線を放つ。
恵美の右手から閃光が奔り、それは剣の形を取った。エンテ・イスラ大法神教会が古より保管していた天界の金属〝天銀〟を体内に取り込み聖法気と呼応させる術だ。

〝エミリア・ユスティーナ〟の『天銀』が形作る剣の名は、〝進化聖剣・片翼〟。その輝きと威力は、持つ者の聖法気を吸収して成立する。

その身を鎧う黄金の光こそは、熾天使の翼を織って作られた天の血を引く勇者だけが纏うことのできる破邪の衣。これも持つ者の聖法気によってその力が大きく左右される。

聖法気が全身に満ち、〝恵美〟が負った傷の全てを癒してゆく。折れた足も、額の怪我も、まるで初めから無かったかのように、その痕すら残していない。

「剣の成長が……第一段階以上にはできないか。ちょっと、不安かな」

太陽が不満げに呟く。

刺突剣のような細身の聖剣、額と胸と足しか覆わぬ破邪の衣は想像以上に頼りない。しかも汚れたスーツの上から纏っているため、見た目も大分ちぐはぐだ。

「まぁいいわ。本領じゃないのは向こうも同じだし、この際見た目なんて気にしてられない」

恵美の姿をした太陽は、それ自体が光を纏った剣の切っ先を真っ直ぐ、〝敵〟へと向ける。

「悪魔大元帥ルシフェル、背徳者オルバ！　あなた達の世界に対する罪を、今日私が断罪する！」

エンテ・イスラから魔を打ち払った勇者、エミリア・ユスティーナの真の姿がそこにあった。

「ひょー！　かっけぇ！」

その神々しい姿に茶々を入れる魔王。

「うるさいっ！　あいつら倒したら、次はあんたの番なんだから覚悟しときなさい！」

「へいへい、なるだけ早めに頼むぜ……と、その前に」
魔王は思い立ったように、また右手を上げた。そして。
『ちょっくら皆眠ってろ！』
呪文には聞こえない呪文とともに、指を鳴らす。するとどうしたことか、今まで人外の様相を呈する魔王たちの様子を遠巻きに眺めていた人間達が、緑色の光に包まれてその場で凝固してしまったのだ。それだけではない。突然世界を静寂が支配した。人間だけではなく、その場を取り巻く全ての時そのものが停止してしまったかのようだ。
「ちょっと！　何したのよ！」
エミリアは魔王を睨むが、右手を戻した魔王は首を横に振る。
「いや、魔力結界。あんまり見られていいもんじゃないし、俺らの戦いの巻き添えになっても悪いだろう。あとはマスコミに取材とか来られたくないし、この辺一帯の空間閉じた」
なんでもないことのように言うが、それをするのにどれだけの力が必要なのか想像もつかないし、そんなことを気にする魔王というのもおかしなものだ。
「だから、閉じた場所からあいつら逃がすなよ。面倒だからな。……っしょっと」
それだけ非常識な力を持つ魔王でも、首都高は重いらしい。真剣に辛そうな魔王を横目に苦笑すると、エミリアは聖剣をルシフェルに向けて構えた。
「これは……僕も全力を出さねばならないみたいだな!!」

ルシフェルも最早観念した。魔王と勇者が、信じられないことだがこの世界において本気で共闘し自分に向かってきている。容易に回復する術の無い魔力と聖法気を全力まで引き出して。奴らは、帰ることを考えていないのか？

「っはっ!!」

ルシフェルは天高く飛翔すると、手加減なしの魔力弾を漆黒の翼から無数の光の帯として撃ち出した。エミリアは殺到する魔力弾を聖剣の一振りで薙ぎ払う。

薙ぎ払われたそれは軌道を変え、全部魔王の背中にヒットした。

「あてててててて！　てめぇ！　何しやがるっ！」

「ごめん！　偶然！」

魔王の抗議の声を軽くいなし、エミリアは地を蹴った。あまり力を入れたとも見えないのに、まるでその体は翼でもあるかのように光の矢となってルシフェルに向かってゆく。

「はあああああっ！」

神速の横一文字をルシフェルは間一髪で回避する。

ルシフェルは漆黒の翼を力強くはためかせ、エミリアの横薙ぎを凌駕するスピードで宙を舞いはじめた。

「ついてこられるかっ!!」

ルシフェルの手刀が黒く光り、そこから飛ばされる黒い刃と、ルシフェル自身の高速接近に

よる攻撃がまったく同時の波状攻撃となってエミリアに襲いかかる。
エミリアは避けるそぶりを見せない。空中で体を丸めると、破邪の衣が一際大きく輝いた。
黒い刃が、ルシフェルの拳が、その光に悉く受け流された。
「……温いわ。まだまだよ」
ルシフェルは鼻を鳴らす。
「はっ、強がるな！　防御も絶対ではなく、かわすこともできないんだろう？　ならば今の貴様の刃は、僕には絶対に届かない！」
ルシフェルの言葉を肯定するように、エミリアの額から一筋、血が流れた。そこは奇しくも、〝恵美〟が地下道で負ったのと同じ場所だった。
「貴様の飛空能力は往時ですら僕に劣っていた。このまま時間が長引けば魔力を得られる僕の勝ちだ！」
確かに聖法気を補充する術の無いエミリアが長期戦を続ければ、やがてガス欠となるだろう。
「悪いが今回ばかりはそうはならない」
その場の誰でもない声は二人の更に上空からだった。
巨大な岩塊がルシフェルとエミリアの間を切り裂くように通過したのだ。
「貴様！」
「あなたは！」

巨大な体軀に血の通わぬ肌と、蟲を思わせる節くれ立った禍々しい尾。その尾の先は二股に分かれた鉤爪のような棘だった。

「勇者などと共闘するのは御免なのだがな。しかし私は、魔王サタン様に忠誠を誓う者」

かつてエンテ・イスラ東大陸を恐怖の巷に落とした悪魔大元帥、アルシエル。

「ならば今の私の敵は、貴様だルシフェル」

ガラスを引っかくような耳障りな音声こそが、人間芦屋の毒舌の元なのだろうか。

「そういえば姿が見えなかったけど、なんで今日に限って戻れたの？」

「……」

新宿地下道の時といい、どうもアルシエルは大事が起こると忘れ去られる運命にあるらしい。それをひがんでいるのかどうなのか、人間とはまるで相似しない構造の顔からはなんの表情もうかがうことはできない。

「魔王様が瀕死の私が復活できるだけの魔力を吹き込んでくださった。それだけだ」

「なるほどね。でも戻れたなら今までどこにいたのよ」

「……ズボンが破れたから、アパートの押入れにしまってあった大元帥マントを取りに戻った」

そう言うと、やおらアルシエルは、巨大なローブを羽織る。悪魔大元帥の威厳を示す巨大な生地に魔王軍の紋章。そして四人の悪魔大元帥だけが装着を許される煌びやかな四天王徽章。

魔王軍エンテ・イスラ東大陸方面軍総司令官、悪魔大元帥アルシエルの名に相応しい大悪魔

の姿がそこにあった。
　エミリアは、悪魔が伊達や酔狂で服を着ているわけではないと初めて知った。別に悪魔が裸でいたからと言って、人間がどうこう思うものでもないのだが。
「……それはご苦労様。でも、馴れ合うつもりはないわよ」
「お互い様だ。この戦いが終われば、我らはまた敵同士」
　アルシエルは吐き出すように呟く。
「それなら結構」
　とエミリアはルシフェルを見据えたまま、手刀を背後に振る。
　その手から放たれた一筋の光が、アルシエルを背後から狙い撃とうとしていたオルバの銃を一瞬で溶解させた。
「ひっ！」
　アルシエルはそれを一瞥だにせず、
「礼は言わんぞ。あの程度で私が傷つくはずもない」
「人間の脆弱さを知ってまだそういうことがいえるとは大したものね」
「……役立たずがっ！」
　ルシフェルはオルバに罵声を浴びせる。
「貴様も魔王様を追い詰めた人間の一員なら、それなりに戦って見せろ！」

「か、帰れなくなるぞ」
「この場で負ければ同じことだ！」
「……くそっ……」
オルバもようやく体勢を立て直し、諦めたように構えを取る。武器らしきものは見えない。だが、内なる聖法気は確実に高まっている。
聖と魔、魔と聖のぶつかり合いが今、始まろうとしている。
「アルシエルの奴、自分だけ……」
魔王は一人呟いた。
「やべぇな……。今の俺、役割も格好も地味すぎじゃね？」
ユニシロが縫製技術の粋をこらした吸汗Tシャツとストレッチパンツは優秀だった。新宿地下道で破れてしまったお洒落デニムと違い、人間より遙かに巨大化したにも関わらず、破れることなく肝心な場所だけは死守し、魔王サタンの姿を野暮ったく見せているという点に於いて。
「映画……じゃないよね」
千穂だけが、聖と魔の激突の目撃者として意識を保っていた。聖法気の対魔力障壁の中で、呆然と目の前で展開されている人外の戦いを眺めている。口は開きっぱなしで、体の痛みすら

どこかに飛んでしまっていた。
アルシエルの力が無数の巨大な瓦礫を浮遊させる。それらは一斉に超スピードでルシフェルとオルバに襲いかかった。
エミリアはそのうちの一つに乗り、ルシフェルに肉迫する。アルシエルはエミリアの乗る岩塊を心底嫌そうに、尾の先の棘をぴくぴく動かして操作した。
「天光炎斬！」
聖剣が振るわれ、無数の炎の刃が更なる超スピードでルシフェル目がけ発射され、その肩口を捉えた。ルシフェルは空中でよろめくが、深手ではない。
「エミリア正気か！　魔の者と共闘するなど、大法神は決して許されんぞ！」
アルシエルの岩塊を回避しながらオルバがまったく無自覚な罵声を吐き、エミリアどころか彼方で重労働中の魔王すら失笑させた。
「あなたに言われたくないわ」
「おめぇが言うなハゲ」
「お前が言うことではないな」
「……お前が言うな」
それどころかルシフェルとアルシエルまでが口に出して言う始末だ。
オルバはまさかその場の全員から総突っ込みを受けるとは思わなかったのか、唖然とした瞬

間小さな岩塊を避けきれずに喰らってしまう。普通の人間なら即死だが、そこは腐っても大法神教会最高聖職者。軽く首を横に振って唸った。

「……ちと油断した」

見ればオルバの周囲に細かい破片が散らばる。瞬時にガードしたのだろう。しかし頭部の保護が行き届いていない部分にわずかに出血が見られた。

「……」

「それは油断とは言わねぇだろう」

遠くからそれを見ていた魔王は小さく呟き、その間にアルシエルは即座にオルバに肉迫する。

「ええい近づくな下賤の者っ!!」

「……」

「うわーオルバがやばい。自分の発言でオルバがやばい」

アルシエルが必要なこと以外何も言わないので、魔王が状況を実況するしかない。

「しっかし変な戦いだな。あいつら誰が敵で、誰が味方か分かって戦ってんのか？」

視界の片隅では、エミリアの力に守られたままの千穂が目まぐるしく視線を動かしている。

途中何度も魔王と目が合い、そのたびに複雑そうな表情を作る。

「あー……流石にコレは、もう言い訳できんよなぁ」

魔王は苦々しく呟いた。

「天光氷舞！」

エミリアの剣とルシフェルの魔力障壁が激突すると、その力と力のせめぎ合いの中に吹雪が吹き荒れて、

「う、ぬっ……」

ルシフェルの翼に徐々に霜のようなものを降ろしはじめた。

「その氷は魔を凝固し繋ぎ止める力がある。あなたの速度、捉えたわ！」

エミリアの剣がルシフェルの障壁を力強く引き裂き、その胸板に裂傷を走らせた。

「ぐおおおっ!!」

ルシフェルは距離を取ろうとするが、

「逃がさない！」

エミリアは魔王とアルシエルが浮遊させている岩塊を足場にしながらルシフェルに迫る。

「くっ!!」

ルシフェルも牽制のために黒い炎を放つが、エミリアは避けることすらせずに当たるに任せている。事実全て破邪の衣の前に打ち砕かれていた。

アルシエルもまた、オルバを追い詰めつつあった。

オルバは元々勇者エミリアの一党の中では後方支援に長けていた男であり、ただ一人で悪魔大元帥と事を構えるには圧倒的に力不足であった。

防戦一方のオルバはルシフェルに助けを求めようとするも、そのルシフェルはいま正に勇者の力の前に劣勢に立っている。

エミリアとアルシエルが、ともに相手を追い詰めようとしたそのとき、

「!?」

「……？」

天地を鳴動が揺るがした。全員の動きが止まる。鳴動とともに解放された魔力のせいだ。

「魔王……」

「魔王様……」

エミリアとアルシエルが魔王を凝視する。

魔王は人間の姿の時とまったく変わらぬ様子で、安っぽい高笑いを上げていた。

「重かった、すっげ重かった。でも俺偉い。そっと下ろした！　だからもう大丈夫！」

先ほどの鳴動は、崩落寸前の首都高が魔王の魔力によって地面に下ろされた瞬間の音だったのだ。

「さて、こっからは俺も参戦させてもらう」

そう言っている間にも、魔力結界に包まれた車や瓦礫、人間などを次々と地面に軟着陸させる魔王。その程度のことなら、今の魔王にとっては片手間の作業だ。

「手早く終わらせるぜ。なんせ」

魔王の魔力が、火山の噴火の如く強烈な勢いで、闇色の陽炎となって立ち上る。アルシエル

が薄く微笑み、オルバはまたも空中で腰を抜かしへたり込んでしまう。
ルシフェルはと言えば、その顔には焦燥しか浮かんでいない。
エミリアだけは、何故か魔王が今何を一番気にしているかが分かってしまった。
太陽が中天に差しかかる。もうすぐ、お昼時だ。
「このままじゃバイトに遅刻しちまう。今日はちーちゃんに、ソフトクリームマシンのメンテナンスを教えてやる約束したからな」
「っ……」
魔王の流し目など普通の人間が受ければ気死は免れないはずなのに、見られた当の千穂は、なんとバリアの中で思わず顔を赤らめているのだ。
アルシエルは呻くように天を仰ぎ、エミリアはと言えば魔王の邪悪な笑顔が妙に可愛げのあるものに見えて、そう思ってしまった自分の頬をひっぱたいた。
「さて……お前ら。よくも世界を支配する予定のこの俺に、地味な役割押しつけてくれたな！」
怒るポイントはそこか。
そう突っ込む間もなく、魔王はへたり込んでいるオルバを眼光鋭く睨みつけた。
「ふぐぉっ!?」
魔王の視線だけの気魄、それだけでオルバが巨大なハンマーで殴られたかのような衝撃とともに吹っ飛ぶではないか。オルバは壁の如くそそり立つ首都高の天板に着弾し、コンクリート

を陥没させながら失神した。
「脆い！　脆いなオルバぁ!!」
哄笑する魔王は最早オルバに一瞥もくれず、次の瞬間にはルシフェルの前に立っていた。
ルシフェルは勿論、離れた場所にいたエミリアすら、その移動を目で捉えられなかった。
「ま……魔王様……」
ルシフェルは完全に腰が引けてしまっている。
「今さらテメエに様付けされたって嬉しくねぇよ」
基本的に悪魔は上位階級の者には逆らえない。半分天使とはいえ、ルシフェルも一度は闇に落ちた身である。
「なぁ恵美、コイツ、どうすればいいかな？」
魔王が嗜虐心にうきうきしながら宿敵に問う。
勇者はつまらなそうに宿敵に答えた。
「そうね、とりあえず、街を滅茶苦茶にした責任取らせればいいんじゃないかしら」
「そうだな。あと、もしバイトに遅刻したらルシフェル、テメエのせいだからな。皆勤賞逃すようなことがあったら、どうしてくれるわけ？　ああ？」
「な、なんの話だっ!!」
ルシフェルが叫ぶとアルシエルが誰にも聞こえない声で呟く。

「我々には一生理解できない類の話さ……」
「とにかく、貴様の魔力はいただく」
悪魔の王が楽しそうにニヤリと笑う。
「お仕置きはそれからね」
勇者が剣の腹を叩きながら無表情に呟く。
「ひっ……」
天上の光と、奈落の闇に睨まれてルシフェルは喉を鳴らす。
「おめぇも悪魔大元帥なら、潔く覚悟決めやがれ!!」
魔王の怒号とともに、光と闇が笹塚を乱舞した。

「て、お前この落とし前どうつけるつもりだ?」
魔王の、いや、真奥の問いに、堕天使の姿を失ったルシフェルはただただ黙り込むしかない。
正座である。激しい戦闘の後で崩れ放題の、そこかしこに瓦礫やらコンクリート片やらが転がるアスファルトの道の上に、人間の脆弱な肉体で、正座である。
かつてエンテ・イスラ西大陸を地獄に落とした悪魔大元帥ルシフェルが、魔王と勇者に正座させられている。

日本の、東京の、笹塚で。

「首都高と外環道は初台から調布までの区間、未曾有の大事故により通行止めが続いておりますってか。甲州街道もそうだし、京王線に至っちゃ新宿の手前で完全不通だ。俺も気をつけていたつもりだが、死人が出てないとも限らないぞ」

「と言うより、この状態で死人が出ていない方が奇跡です」

悪魔から人間に戻った傷一つ無い芦屋は、悪魔大元帥のマントを無理やり体に巻いていた。

「魔王様の御力が無ければ首都高崩壊に巻き込まれ落下した車の乗員は助かるはずがありません。甲州街道上の車もです。まして周辺住宅がこの程度の被害で済んでいるのが奇跡です」

「普通この世界で俺達みたいな奴がドンパチやったりしねぇからよ。避難とかしてない奴らもいるだろうな。保護できる限り魔力結界張ったつもりだけど、全部カバーしきれてるかどうかもわかんねぇんだぞ」

ルシフェルはただただ沈黙。

「一つ提案があるんだけど」

真奥のアパートから転がり落ちた上に激しい戦闘を繰り広げたおかげで、見るも無残な有様になってしまったスーツを纏う〝恵美〟がルシフェルを見下ろしながら言う。

「とりあえず、こいつが爆弾魔ですとか言って警察に突き出しちゃえば？」

「俺もそれは考えたんだけどさ、最初は騒がれるかもしれねぇけど、実際はなんの証拠も存在

しないわけだし意味ないんじゃねぇかな。連続強盗事件が解決して喜ばれはするだろうけど」

真奥はと言えば、巨大化に耐え、繊維の伸びきったシャツとストレッチパンツが辛うじて体を覆っている状態だ。

「でも、じゃあどうするのよこの有様」

「どうすっかなぁ、魔力の無くなった悪魔大元帥とかクソの役にも立たないしな」

ルシフェルがまったく大人しくなってしまっているのは、一重に真奥がルシフェルの魔力を全て喰ったからに他ならない。

芦屋も、真奥と同じようにして得た魔力がいくらか残っており、恵美の力もそれなりに残っている。魔力ゼロのルシフェルには勝機のしの字も無いのである。

「あ、あの……」

そこにおずおずと口を挟んだのは千穂だ。目立った怪我も無く、ルシフェルに負の感情を吸収されて体力を消耗した以外には大事の無かった千穂。そのせいで妙にさっぱりした顔つきで真奥に尋ねる。

「今さらこんなこと聞くのもおかしいような気はするんですけど……」

「なんだよちーちゃん」

返る言葉は、声は、間違いなく千穂の知る真奥貞夫である。しかし千穂は、巨大な生き物が自分の見ている前で真奥の姿を取ったことを克明に記憶していた。

「皆さん……その、なんなんですか？」
至極もっともな問いに、真奥と芦屋と恵美は思わず顔を見合わせる。
「えっと……そう改めて聞かれると恥ずかしいんだが、俺、よその世界で魔王やってるんだ」
頭をがりがりと掻いて本当に恥ずかしそうに言う真奥。まるで隠れた趣味をこっそり打ち明けるようなしぐさに、千穂は内容を理解する前に吹き出してしまう。
「あー、信じてないだろ！」
真奥が口を尖らせると、千穂は慌てて手をばたつかせる。
「そ、そんなことないですよ！　だって真奥さんが凄いことしてるの、私見ましたもん。あれだって、そうなんですよね」
千穂が指差す方向には、魔力結界に封印されたまま微動だにしない大勢の野次馬や、落ちてきた車などがそこかしこにあった。
「まあな。でもあんなの、大したことじゃねぇよ」
「魔王様、日本において謙遜は美徳ですが、ここはもっと堂々としていただかないと」
呆れる芦屋はいつも通りのやかましい主夫調に戻っている。
「こいつらは悪魔だけど、私は人間だからね。あ、半分は天使なんだけど」
真面目くさって言う恵美。やはり千穂は吹き出してしまう。
「ちょっと千穂ちゃん！」

「ご、ごめんなさい！　て、でもなんか、おかしくて」
「え、お前天使とのハーフだったの？　初耳なんだけど」
「あなたは今さら何言ってるのよ、魔王のくせに、私のことなんだと思ってたわけ？」
そんなとぼけたことを言う真奥に突っ込む恵美。やがてこらえきれなくなって、千穂の笑い声はどんどん大きくなる。
「だって、悪魔とか天使とか、もっと……あはは、こう、架空の凄い存在としか思ってなかったのに、こんなに、身近に、いる、なんて……」
笑いながらも無理に喋ろうとするから途中でむせる千穂。慌てて恵美がその背をさする。
「だって、俺お前のそんな個人情報知らないし、異常に強い人間くらいにしか思ってなかった」
「あのね……単なる人間て、聖剣レベルの天銀を体内に収めておけるわけないでしょ」
「なるほどな。よくわからん変身する奴だと思ってたけど、ようやく謎が解けた」
「私にしてみればあなた達の今の姿の方がずっと衝撃的だったけどね……千穂ちゃん落ち着いた？」
「は、はい、すいません」
ようやく笑いが収まった千穂の耳に、恵美は口を寄せる。
「ね？　だから私と真奥が、何か特別な関係ってことは絶対にないから、安心して」
「ゆ、遊佐さん……」

笑ったり、真っ赤になったり、忙しい千穂。誤解を解いて胸を撫で下ろす恵美。その様子を見て苦笑を禁じえない真奥と芦屋。

「にしてもお前さ」

真奥はバツが悪そうに眉根を寄せる。

「まぁ今さら聞くのも変だけど、あんだけ力残してたんなら、なんで今まで襲ってこなかったんだよ。どう考えても昨日までの俺だったら、消し炭になってる強さだったじゃねぇか」

「あら、そんなこと？」

恵美はなんでもなさそうに肩をすくめた。

「卑怯な魔王が、力を失ったように見せかけて爪を隠してるかもしれないでしょ？　それに、前にも言ったけどあれだけ全力で戦っちゃったら、よしんばあなたを倒せたとしてもゲートを操作できるほど力を残せるかどうか分からないじゃない。そういうことよ」

「あ、なるほどな」

真奥はすんなり納得しかけ、すぐに言葉通りの意味ではないと気づいて蒼白になる。

逆に言えば、実は恵美が帰ることを諦めてしまえばいつ滅ぼされてもおかしくなかったわけだ。今まで恵美が自分を滅ぼすチャンスはいくらでもあった。

そんな真奥の表情に気づいたのか、恵美は面白くなさそうにそっぽを向く。

「言っておきますけどね、私はこれでも人々から尊敬される勇者なの。英雄なの。そんな私が、

弱者を一方的に嬲り殺しにするようなこと、できるわけないでしょ」
「弱者って……ちょっとそれ酷くね？」
「本当のことでしょ」
「あー、じゃあどうすんだお前！　俺、力取り戻したぞ！　力使いきったお前なんか一ひねりだぞ！　どうだ！」
半分本気で身構える真奥。
「あーらそう？」
しかし恵美は余裕の表情。傍らの千穂を抱き寄せると、彼女に抱きつきながら彼女の陰に隠れるようにして、
「ねぇ千穂ちゃん。あいつ、力を取り戻したの笠に着て、私をいじめようとするのよ」
そんなわざとらしいことを言い出した。
「……そうなんですか、真奥さん」
しかも千穂は、少しだけ悲しそうな顔で真奥のことを見るのだ。そのあまりに純真な様に真奥はひるみ、顔を逸らしてしまう。
「そっ、そんな目で俺を見ないでくれ、そ、そんなことするわけないだろ！　俺は誇り高き魔王だぜ？　やるときは正々堂々だ！　だからちーちゃんそんな悲しそうな顔すんなよ！　恵美もてめぇ卑怯だぞ！」

真剣に言い訳している真奥の後ろで、千穂以上に悲しげな溜息をついたのは芦屋だった。
そしてそんな様子を、異次元の世界を見てしまったかのように呆然と眺めるルシフェル。
「お前ら……どうしちゃったんだよ」
その声に我に返った恵美と真奥は、許可なく発言をしたルシフェルを頭の上から踏みつける。
「ふぎゃ」
「そうそう、俺らのことより今はこいつ。あと、笹塚。どうするよ」
改めて周囲を見回す真奥と、苦悩するように腕を組む芦屋。
「立つ鳥後を濁さず、とも言います。エンテ・イスラに帰るにしても、世話になったこの世界に混乱を残したまま帰るのは、いくら我々が悪魔でも寝覚めが悪い」
芦屋の言葉は全くもって悪魔らしくないが、それ以上に恵美は『帰る』という言葉に顔が強張る。
「……やっぱり帰るの？」
「当たり前だ。魔王様が魔力を取り戻した今、この世界にとどまっていなければならない理由など一つも無い。我々の第一目標はエンテ・イスラなのだからな」
芦屋は冷たく言い放つ。
「帰るって、実家とかですか？」
まだ真奥たちの全てを理解しているわけではない千穂の質問はこの場では無視された。

「いや、でも俺今月結構バイトのシフト入ってムギュ」
「魔王様はエンテ・イスラ制圧とマグロナルドのアルバイトとどちらが大切なのですか！」
芦屋は真奥の顔を平手で潰す。
「よろしいですか、確かにマグロナルド幡ヶ谷駅前店と木崎店長の計らいがなければ日本での生活はもっと厳しくなっていたであろうことは認めます。ですが、魔力干渉を持たぬ紙の上で人間と交わした契約などいかほどの価値がありますか。時給千円は惜しいとは思いますが……」
「へぇ、凄いじゃない。マグロナルドで千円とか」
「エミリアは黙っていろ！　とにかく、魔王様ともあろう御方が鶏肉や牛肉や豚肉や魚やジャガイモを調理して喜んでいるなど、かつての闇の同胞達が知ればどれだけ悲しむでしょうか。佐々木さんとの仕事の約束を反故にしたくない気持ちは分かります。しかし我ら悪魔はいたいけな少女との約束を破りそこから生まれる負の感情を喜んでこそでしょう！」
「仕事を教える約束を裏切られて生じる負の感情ってそんなに大したものなのかしら……」
「え！　真奥さん、バイトやめちゃうんですか！」
「我らの悲願はエンテ・イスラをこの手で制圧すること。私は日本に下りて以来何度も口をすっぱくして申し上げてきました。まずは我々の最初の目標を完遂させねばなりません！　今日と言う今日は魔王様に決断していただきます。ルシフェルの処分を下し、力の落ちたエミリアと決着をつけ、笹塚に別れを告げるのです！」

「お前、悪魔の姿の時と口数が違いすぎんだろ……」
真奥は芦屋の早口にげんなりする。
「じゃあ、どうやって後を濁さずに帰ればいいんだよ」
「我々は特に悪いことはしておりません。魔王様が強いてやるべきことは木崎店長と相談して円満に退職することだけです。真奥はバイトが辛くてバックれた、などと思われてはいけませんからね」
「えー……だってまだフェア商品の地区売り上げ一位が……」
「幡ケ谷地区よりもエンテ・イスラを気になさってください！」
「冷蔵庫も洗濯機も自転車も買ったばかりなのに」
「ゲートを操る魔力を取り戻した今、白物家電や自転車に頼る必要がどこにありますか！」
「あの……で、僕はどうすれば……」
正座させられ踏みつけられて、その上置いてきぼりをくらっている不憫なルシフェルが瓦礫に顔を埋めながらぼんやりと声を上げると、反応したのは二人ではなく恵美だった。
「あ！　そういえばルシフェル！　私の職場に電話してきたのってあなた？」
「あ、ああ……そうだよ？」
あっさり認めるルシフェル。
「どうやって私の職場突き止めたのよ？」

「そういやそうだな。あれだろ？　仕事中に脅迫されたってやつ？」
真奥が足をどかすと、ルシフェルは恐る恐る顔を上げる。
「そうよ。どうなのそこのところ！」
「あ、それは……ほら、最初に襲った時に……エミリア、お前これ落としただろ」
そう言って踏まれたままのルシフェルが取り出したのは、熊と白い小熊と黄色い鳥のイラストがプリントされた二つ折りの財布だった。
「あーっ！　私の財布！」
恵美はルシフェルの手からファンシーなデザインの財布をひったくる。
「その中に職場の従業員カードみたいのが入ってたからそれを見て職場を……」
「うっわルシフェルお前拾った女の財布の中身勝手に見たのかよ！」
「最低ですね。このご時勢訴えられても文句は言えません」
真奥と芦屋が露骨に顔をしかめる。
「お前、財布はダメだろ、そこは見ちゃダメだろう。個人情報の塊だぞ」
「悪い人だとは分かってましたけど、サイテーな人だったんですね」
千穂は、先ほどの恐れとは打って変わって見下げ果てたような視線をルシフェルに向ける。
「なあ芦屋。なんだっけあの財布に描かれてるあのキャラ」
「最近人気のキャラクターですね。えっとリラ……リラックス熊とかなんとか……」

真奥の顔がまるで恵美を哀れむかのように歪み、
「ちーちゃんだって本物かニセモノか知らんけどヴィドンとか持ってんのにお前……」
「本物ですよっ！　あ、で、でも可愛いですよね、リラックス熊！」
千穂も困ったような表情を浮かべた末、フォローにもならぬフォローを入れた。
「う、うるさいわねっ！　す、好きなんだから仕方ないじゃないの！」
恵美は少し顔を赤らめて、財布の中身を改め、何かに気づいて声を上げた。
「あっ!?」
「な、なんだよ？　中身を盗ったりはしてないぞ！」
「金ダコのスタンプカードがない！　酷い！　スタンプ一杯になってたのに！」
恵美は真っ赤になって怒っている。
「そ、それは、デビルフィッシュの包み焼きなんて食べ物見たことなくてつい好奇心で……！」
話がまったく支離滅裂でまとまらない。話せば話すほど、卑近な話題にどんどん脱線していってしまう。しかも誰も収拾をつけようとしない。

「おぇっぷ……いったい、これあどういうこった？　なんで全部止まってんだ」
「私に聞かないでくださいー。魔力結界か何かじゃないんですかー」

「あそこに立ってンの誰だ？」
「エミリアに見えますけど……」
「あそこで埋まってんのは？」
「……オルバ、てすねぇ」
「て、あの女の子と野郎どもは？」
「さあ……」
大法神教会の思惑を知った勇者エミリアの仲間、仙術道士アルバート・エンデと、西大陸神聖セント・アイレ帝国宮廷法術士エメラダ・エトゥーヴァ。二人がルシフェルとオルバの航跡を追いかけてゲートを通り抜け、笹塚に降り立ったのは、丁度そんなときだった。

「するってぇと何か？　お前が魔王サタンで」
三十がらみの、芦屋を凌駕する体格の色黒の男。整えられた白髪に白髭に、色黒の肌、そして何より特徴的なのは、その黄金色の瞳である。アルバートは腕を組んだまま、魔王を見下ろしている。全身の筋肉を強調するように細身の黒いレザースーツを身に纏い、真奥と並ぶとレスラーと中学生ほどの違いがある。
「あなたがアルシエルなんですか～？」

小柄なエメラダ。先が丸まった碧緑の短い髪をふわりと揺らして、髪と同じ色の瞳で芦屋を見上げている。オルバの纏う法衣に似たローブを着ているが、オルバのシンプルなそれよりも、赤やオレンジといった派手な色合いに染められ、背には神聖セント・アイレ帝国の国章が金糸で刺繍されていた。二人とも武器らしきものを携帯していない。

「その通りだ。恐れおののけ」

相手に戦うつもりがないと分かった真奥は、堂々と胸を張るが、

「無茶言わないでください～」

エメラダに一蹴されて即座にしょげ返る。

「いやあ、どうすっかな、エメ。俺あいきなり魔王と対面するとは思ってなかったから、あんまり体力残してねぇンだ」

「そういうことを～、敵の前で言わない方がいいと思うんですけど～」

「そうか？　そりゃそうか。いや、失態失態」

後ろ頭を掻きながら白い歯を見せて意味なくゲラゲラと笑うアルバート。

二人が現れてからこっち黙ったままの千穂が、アルバートの笑い声を聞いた瞬間、何かに気づいて巨漢を指差した。

「ま、真奥さん！　私が聞いたテレパシーの声、この人の声です！」

「あ？　お嬢ちゃん、まさか俺の概念送受聞いたのかい？」

元から脱線していた話が余計おかしな方向に走りそうになって、恵美が慌てて止めに入る。
「とにかくみんな、一度お互いの状況を整理するためにも、今は気を落ち着けて話し合いましょ。アルシエル、あなた達のアパートに移動しましょう。これ以上ここでおしゃべりしてるわけにもいかないし」
「何を言う！　勇者の一味を魔王城に招くはずが……」
誰よりも勝手に話を進める恵美に噛みつく芦屋だが、それを制したのは真奥だった。
「わあったよ。芦屋、緊急事態だ。今は仕方がない。これ以上俺も魔力結界を維持すんのめんどいし、折角魔力を取り戻したのに、ここでこいつらと戦って消耗するのも得策じゃない」
急にまともなことを言い出すので、芦屋は渋々頷くしかない。
「……あそこで埋まってるオルバはどうするのですか」
「ほっとけ。あいつはルシフェルと共謀して強盗とかやってたんだろ。あのままにしとけば、いずれ警察が豚箱に送り込んでくれるさ」
そう。オルバとルシフェルは、日本で犯罪に手を染めているのである。オルバに裏切られた恵美達も、元から敵である真奥達も彼を気にかける必要はどこにも無いのだ。
「おい恵美、お前場所分かるだろ、ちーちゃんとそいつら連れて先行ってろ」
真奥はアパートの鍵を恵美に向かって放り投げる。
「え？」

「俺は後片付けしてから行くから」
「……まさか、こっそりエンテ・イスラに帰る気じゃないでしょうね」
「そんなことしねぇよ！　大体お前の仲間がいるんだから、そんなことしたらすぐに追っかけられちまうだろう。いいからさっさと行け！」
恵美は疑いの眼差しを向けながらも、鍵を握ると素直に千穂やエメラダ達を促し歩きはじめる。
「お前ら、なんかいい感じになってンなぁ」
「エミリアが魔王と仲良くなってるなんて意外です～」
「そこだけは全力で否定させてもらうわ！　とにかく行きましょう」
恵美は一度だけ真奥を振り返ったが、勇者のパーティは素直に笹塚の裏通りに消える。
それを芦屋は見送りながら、
「どういうおつもりですか」
真奥は首都高を指差す。
「このままってワケにゃいかねぇだろ。芦屋、ルシフェル、手ぇ出せ」
芦屋は一瞬躊躇ったが、諦めたように溜息をついて苦笑する。それを見たルシフェルは、
「え、まさか……」
「ああ、折角魔力を取り戻したのにな」

「そんなことしたら……」
「仕方がない。魔王様が決められたことだ。私はただ従うのみ」
「……一体、どうなっちゃってるんだよ。お前も、魔王様も」
「さぁな。私にも良く分からん」
「何ごちゃごちゃ言ってんだよ」
「いえ、なんでもありません。どうぞ、魔王様」
真奥は芦屋の手を取ると、うきうきして言う。
「下のもんの失態は上の責任だ。エンテ・イスラでもマグロナルドでも、それは変わりはしない。支配者たるもの、支配する全てに責任負わなきゃな」
真奥は崩壊した笹塚を見て、微笑んだ。

※

〝ヴィラ・ローザ笹塚〟を見て、エメラダとアルバートは顔を引きつらせた。日本に来て三十分と経たない二人にすら分かるほど、その建物は〝魔王城〟のイメージから遠くかけ離れた建造物だった。
「あの～、エミリア～？」

「言いたいことは分かるわ。でも間違いなくこの建物の、二階のあそこの部屋が、日本における魔王サタンの居城、魔王城よ」

「あそこの部屋って……あの部屋だけなのか？」

「そうよ。他は空き部屋」

しばらく動きが止まる二人。やがてエメラダがはっとして手を打つ。

「あー！　あれですねー、怪しまれないために外見は古く狭そうに擬装しているけどー、中は異空間か何かで無限の広さに改造されてて～……」

「六畳一間。多分だけど、アルバートが住んでた山小屋の半分くらいの広さね。お風呂無いし」

「そ、そりゃまた……」

「どんな魔王ですかー……」

呆れて絶句する二人。

「逆に私は、このアパート見て真奥さんのイメージに物凄くしっくりきたんですけど……」

千穂の発言は、それはそれで酷い。

「ま、中に入れば納得するわよ。行きましょう」

恵美は朝方派手に滑落した階段を警戒しながら上がっていく。

シリンダー錠を開くと、古びた建物と生活の臭いがどんよりと流れ出し、改めてエメラダとアルバートは絶句した。

千穂は先ほど取り落としてしまった缶入りせんべいの紙袋がそのままになっているのを見て、それを拾い上げる。埃を払うと、千穂はアルバートとエメラダを振り返る。
「えっと、とりあえず日本では、靴を脱いで家に上がるんです。ここで……」
と、千穂は猫の額ほどの広さの玄関で、ローファーを脱ぐ。恵美も当然そこで靴を脱ぎ、それにならってエメラダとアルバートも履いていたブーツを脱ぐ。四人分の靴があるだけで、もう玄関の土間は一杯になってしまった。
「ああ、俺の山小屋の方が、よっぽどマシだな。これじゃ罠も張れやしねぇ」
「罠どころか必要最低限の家具も無いのよ。ま、私が言うことじゃないけど、適当に座って」
複雑な表情で思い思いの場所に腰を下ろす。
「あ、わ、私お茶かなんか入れますね」
千穂が思いついたように台所に立とうとするが、それを止めたのは恵美だった。
「千穂ちゃん無理よ。この家、急須も湯のみも無いわ。冷蔵庫の中も戸棚の中も、何食べて生きてるのか不思議なくらい空っぽよ」
「え……？」
千穂はシンクの前で恵美を振り返った。そこに浮かんでいるのは、驚きよりも疑念だった。
「遊佐さん、なんでそんなこと知ってるんですか？」
「えっ？　それはこの前、私がと……」

と、そこまで言って、恵美ははたと気がついた。今のは完全に失策だ。女が男の家の台所を把握していることの意味を分からない千穂ではない。大体恵美が魔王城の内側をよく知っているのも、エメラダ達の目には不自然に映るだろう。

「この前遊佐さんが……なんですか？」

「えっと……、その、本当、不可抗力だったんだけど……」

と、勇者にあるまじき見苦しい言い訳が始まろうとしたそのときだった。

「おおっ？」

「あれ～？」

アルバートとエメラダが、同時に大声を上げたのだ。もちろん恵美をからかうためではない。恵美自身、二人が何故声を出したのか分かっていた。

「お二人とも……どうしたんですか」

千穂の問いに、アルバートとエメラダは顔を見合わせた。

「今の～……なんでしょうか～？」

「物凄い量の魔力放射の余波、だな。おいエミリア。あの魔王ども、本当に大丈夫なのか」

「……と、思うんだけど」

恵美も流石に声音に緊張をにじませる。

たった今、三人が感知した魔力の量は尋常ではなかった。笹塚駅方向からの巨大な爆風がア

パートを撫でて彼方にまで広がっていくような、そんな感覚。日本に来てからこっち、先ほどの戦いの中ですら感じなかったほどの巨大な魔力の爆発だ。

「何か、うまく誤魔化されてる気がする……」

魔力を感知できない千穂は恵美への問いをはぐらかされてむくれているが、それに取り合っていられないほどの非常識な魔力量だったのだ。

真奥は何もしないと言ったが、信用して良かったのか。今の今まで恵美に見せていた、日本や人間に対して妙に親和した姿は全てポーズだったのか。そんな不安がよぎった瞬間だった。

「おーい、開けろ恵美！　帰ったぞ！」

突然ドアが叩かれ、もとい蹴られ、大声が飛び込んできたので、恵美は思い切り身を竦ませた。千穂を除く三人が顔を見合わせてから、ドアを見る。

「……開けますか～」

エメラダは半目になってドアを睨む。

「開けますかって、ここあいつンちなんだろ？」

「でも、魔王ですよ～？　それに、今さっきの異常な魔力量……」

「こんなタコ部屋みてぇなとこに住んでる魔王なんざ怖くもなんともねぇよ。それにさっきのが魔王なんだとしたら、大した力は残しちゃいねぇだろう。イザとなりゃ俺が返り討ちにしてやるよ」

「言ってくれるなアルバート！　ここを開けたらお前らに目に物見せてやるからな！」
部屋の外で喚く真奥。ドア一枚隔てているだけなのに、魔力の片鱗すら感じられない。
「いーっだ！　誰が開けるもんですかー」
「……」
エメラダ達のやりとりに恵美の疲労は急激に増した。やはり、考えすぎだろうか。
「てめぇら！　いい加減にしねぇと大家呼ぶぞ！」
「アルバート、開けてあげて」
恵美が言うとアルバートは渋々腰を上げる。
「なんだ、そのオーヤってのはそんなに強ぇのか」
鍵を開けながら尋ねると、答えたのは外にいる真奥だった。
「ああ強ぇぞ。一度相対したら魂まで屈服しちまいそうな外見の持ち主だ」
あながち冗談ではない表現だと恵美は知っている。そういえば、ルシフェルが暴れていることを感知し部屋を飛び出した後、大家の志波はどうしたのだろうか。
明らかに彼女は真奥達の正体に勘づいているかのようなそぶりだった。
思いを巡らせている間にアルバートがドアを開けると、ぐったりした芦屋とルシフェルを両脇に抱えている真奥がのそのそと入ってきた。
「おい、どけ、こいつら重い」

二人をずるずるひきずって畳に放り出す真奥。気を失っているらしい芦屋を見て、千穂は息を呑み尋ねる。

「え、あ、芦屋さんどうしたんですか？」

「ああ、ちょっとな。魔力を搾り出して、死にかけただけだ……て」

真奥は大きく息を吐いて座り込むと、アルバートとエメラダを見る。

「今さら自己紹介もいらねぇな。一体お前ら何しに来た？　その様子を見るに、俺を倒しに来たってんじゃなさそうだが」

「まぁな。俺達はお前に会うつもりはなかった。ただエミリアを助けに来たンだよ」

アルバートは肩を竦めて恵美を見る。

「オルバだけじゃなかったんです～。教会全部がグルだったんです～」

両の拳を握って顔をしかめるエメラダは、勢い込んで口角沫を飛ばした。

「なんですって！」

「教会の奴ら、俺達にも脅迫まがいに手を回してきてな。監視つきの軟禁状態で、逃げ出すのに一苦労だった」

「大人しくしてれば今後の生活は保障するからとか言って～、私にも王国からの引退迫ってきて～、救国の英雄に世界のイニシアチブを取られるのがそんなにイヤなんですかね～」

そんな二人の苦労話を、真奥は愉快そうに聞いている。

「何もしなかった奴らに限ってそういうこと言うんだよな。その点魔界は完全実力主義だ。どうだお前ら、俺の配下にならないか」

真奥の冗談とも本気ともつかぬスカウトに、エメラダはしかめっ面のまま舌を出した。

「べぇ～っだ。こ～んな貧乏人の配下なんて御免です～」

アルバートはアルバートで真奥を上から下まで眺めて、

「筋肉が足りねぇ筋肉が。俺の上に立つ男はもっとガタイのいい奴じゃなきゃいかん」

と、無意味に胸を逸らして、確かに言うだけのことはある大きな力瘤を作ってみせる。すごおい、と千穂が感心するものだから、調子にのって色々なポーズをとってみせるアルバート。

「あなた達、問題はそこなの？」

恵美の突っ込みは虚しく散った。

「ま、冗談はさておき、とにかく俺達あエミリアに危険が迫っていることを知らせたかった。魔王やエミリアの航跡がこのニホンにたどり着いていたのは簡単に分かったからな」

「でも～、私達に分かったってことは～、エミリアを嵌めたオルバや教会にも当然分かってるってことですから～、どっちが先にエミリアを見つけられるかが勝負の分かれ目でした～」

エメラダとアルバートはそのときの苦労を偲ぶように遠くを見る。

「俺達もあいつらもソナーばんばん飛ばしてな、おかげでこの世界にゃあ結構迷惑かけたはずだ。地震かなんかが多かったんじゃないか？」

ここまではほぼ、真奥の推測通りだ。

「それで、私がアルバートさんのテレパシーを聞いちゃったのはどういうことなんですか？」

千穂の問いにアルバートはなんでもないように答える。

「ああ、概念送受（イアリンク）は意思と意思をリンクさせて飛ばすものだが、送信先をこっちの意思で絞（しぼ）り込める。受信する側の意思条件はこうだ。『四六時中〝魔王〟のことばっかり考えてる人間』」

そのなんでもないような一言を恵美と千穂が理解するのに、それぞれ時を要した。

恵美はなるほど、魔王を討伐（とうばつ）するために日本にやって来たのだから条件に当てはまる。たまたま概念送受が日本に到着した際圏外にいたというだけのことだ。

だが千穂は、

「なっ……そっ、わ、わたっ……」

みるみるうちに顔を真っ赤にして、言葉に詰まってしまう。千穂は勿論（もちろん）四六時中考えていたのだ。〝真奥〟のことを。

それが何故（なぜ）かは言わなくたって誰でも分かる。問題はそれを他人の口からバラされ、しかも真奥に聞かれてしまったという事だ。

「へ～、魔王も案外隅に置けないんですね～」

更にはエメラダが余計なことを言うものだから、千穂の感情メーターは一気に目盛りを振り切り臨界点に達し、

「あう……」
と呻いて恥ずかしさで意識が途絶え、芦屋とルシフェルに並び倒れてしまうこととなった。
「……で、これからどうすんだ？」
真奥はどんな表情を浮かべてよいかわからず、三者三様の顔を並べる勇者一行に尋ねた。ここで自分も恥ずかしさで取り乱せば、それこそ末代までの恥だ。
「どうするも何もなぁ。俺達はオルバとルシフェルにエミリアがどうかされちゃマズいからって追ってきただけだから、まさか魔王がいるとは思いもしなかったし」
「基本的にはエミリアを連れ帰って、本当にエンテ・イスラ復興のリーダーになるのは誰かってことを民衆に分からせたいんですけどー」
と、アルバートとエメラダは顔を見合わせる。
「でも、多分俺達もお尋ね者なんだよなぁ、教会的に」
「ですよねぇ～」
「それじゃ意味ねぇじゃん」
「いや、意味は無くはない、現実に天界の一部は俺達の味方だ」
「私達はこれがあったから～、ゲートを通るのに聖法気を使わず来られたんです～」
そう言ってエメラダが取り出したのは、大きな羽ペンだった。
真奥はそれを見て軽く目を見開く。

「いいもん持ってんな。天使が世界を渡る虹の橋を空に描くときに使うペンだな」
「ちょ、ちょっと！　そんなもの魔王に見せていいの!?」
恵美は慌てるが、真奥が首を振る。
「魔界の者には使えない。安心しろ。天使自身と、天使が認めた者だけが使うことが許される天界の雑用品だ」
「そ、そう……て言うかなんであなたそんなこと知ってるのよ」
「昔聞いたんだよ。で、誰の翼を使ったペンだ？　いや、言わなくていいや。想像はつく。ライラだろ？」
「お、正解」
「賞品はありませんよ～？」
すんなり認めるアルバートとエメラダ。
「あのお転婆娘、またそんなことやって、大丈夫なのかね」
真奥は、遠い過去を偲ぶように苦笑する。
「天界的に、大分危ない橋を渡ってはいるみたいだがな。詳しいことは知らんが」
「でも～、自分の娘が危険だって分かったら～、やっぱり放っておけないじゃないですか～」
エメラダのその一言に、目を瞬いたのは恵美だけだった。
「……自分の娘……って？」

「あ、あれ～？　エミリア、知らなかったんですか～？」
「お前のお袋さんだって言ってたぞ」
恵美の思考は一瞬にして真っ白になった。
「え……、そうなの？」
「そうなのってお前……」
恵美はまったく実感が沸かないのか、ぼんやりとした目のままだ。
「ま、とりあえずこれはお前さんに渡しとく。どう使うかはお前さん次第だ」
真っ白で、大きな一枚羽根を用いた羽ペンだ。薄く光を帯びて、ペン先に燐光が灯っている。
手にした瞬間、不思議と暖かい気持ちになった。梨香の家で感じたあの感覚だ。
父が、いずれ分かると言っていた母の正体。教会騎士団だった頃から何度も聞かされたことだし、父は人間だったのだから、天使とのハーフである自分の母は天使であるに決まっているのだが、こんな形でその片鱗に接するとは思いもしなかった。
「そうだ、おふくろさんからの伝言を預かっていたんだ」
「お母さんの……？」
恵美の心臓が大きく跳ね、顔が上気する。
「『あんたのお父さんはいい男だった』だそうだ」
恵美と真奥は同時にコケた。

「そ、そんなこと今言われても……」
「そ、それ娘への伝言じゃねえだろ」
「確かに渡したし、伝えたぜ。て……」
アルバートは座りなおして恵美に切り出す。
「いつ向こうに帰る？」
「……え？」
「お前さんもこっちで整理しなきゃいけないことはあるだろうから、今日すぐにとは言わないが、あんまり長い間留守にしてると教会のいいようにされちまう。なるべく早く帰ってくれると助かるんだが」
恵美は言葉に詰まる。
「私は……」
「まあ、それは魔王城で話すようなことでもない気はしますけど～」
恵美は頭の中に空虚な思考が渦巻くのを自覚し、それを落ち着けることができないまま真奥に言った。
「あなたは……いつ帰るの」
「あ？」
真奥はティッシュで洟をかむと、それを丸めてくずかごに放り投げる。外れた。

「お前何言ってんだ？　俺帰らないぞ」
これには三人揃って目を丸くした。
「……は？」
「というか、帰りたくても帰れない。」
「？？？」
頭の上に無数のクエスチョンマークを浮かべる勇者一味を見て、魔王は軽く笑った。
「さっきのあの惨状から何事も無かったように全部元に戻すのにどれだけ魔力が必要だと思うよ？　言っとくけどエンテ・イスラの魔王城、俺が全部一人で建てたんだぜ？」

恵美とエメラダとアルバートは、天を覆う首都高と、車の往来が無いものの完全な姿を取り戻している甲州街道や笹塚駅。戦闘の傷一つ無い周囲の建物を見てただただ唖然としていた。
周囲には緊急車両が無数に停車しているものの、一体何故彼らは出動してきたのか、本人達が分かっていない模様だ。
巻き込まれたと思われる人々がそこかしこにいるのだが、高架線路の崩落や戦闘の余波に巻き込まれたはずの場所には、怪我人もいなければ死体も無い。
つまり全てが、戦う以前に戻っているのだ。違うのは狐に化かされたようにここ数時間の記

憶が無い人間達だけだ。
「なぁエミリア。つまりこれぁ……」
「多分ね」
「あの人本当に魔王なんですか～？」
「のはずよ」
笹塚駅のショッピングモールは、早くも日常の喧騒を取り戻しつつあった。往来を行く人の表情は皆、歯の奥に何かが挟まったような釈然としないものだった。
「てことはよ、やろうと思えばさっき、その……」
「あなたならできた？」
アルバートは沈黙で答えた。

「普段悪いことやってる奴がいいことすると、それだけでなんか今までのが帳消しになるくらいの勢いでいい奴に見えるようになるもんだ」
「はぁ……」
「だからあのとき俺は絶対あいつらが襲いかかってこないと思ってた」
「はぁ……」

「どうよ、俺の計算完璧」
「で、帰れるんですか」
「……さて、まだ間に合うからバイト行ってくる」
「魔王様……」
「あ、そうだ、ルシフェルふんじばっとけよ。変なことされちゃかなわんからな」
件の堕天使は未だ気絶しっぱなしで、何かできる体力も残っていそうにない。目を覚ました芦屋にも、真奥を止める力はもう残っていなかった。
「……おーい、ちーちゃん、おきろー、ちーちゃんも今日バイト入ってただろー」
どうしても恵美達と（と言うよりアルバートと）一緒に帰りたくないと言い張った千穂は、畳に突っ伏したまま足をじたばたして真奥に逆らう。
「うう……アルバートさんのバカぁ……」
真奥は心底困り果てた顔で溜息をついた。
「ったく……勇者なんかに関わると、ほんとロクなことがねぇや」

※

その日のマグロナルド幡ヶ谷駅前店の売り上げは散々だった。

今日に限っては、はっきりと自分に責任がある。

全ての被害を元通り復旧し、広域催眠で何も無かったかのように装ったにも関わらず、やはり『この辺で何か物騒なことが起こった』という印象が心のどこかに残ってしまった周辺住民が、外に出かけてくれなかったのだ。

千穂は終始不機嫌で、全く真奥に近づこうとしない。真奥はそれをルシフェルとの戦いや、それ以前の恵美との間の誤解が原因と考え思い切って声をかける。

「なあ、ちーちゃん」

「……なんですか」

声が冷たい。魔王であることを恐れられているわけではないようだが、そうすると、何故ここまで不機嫌なのかが分からない。巻き込んでしまったことを怒っているのだろうか。とにかくこのままでは仕事に支障が生じる。真奥は思い切って千穂に言った。

「俺の力があれば、その、嫌な記憶だけ消すこともでき、る……ぞ」

裏目に出たことはセリフの途中から分かってしまった。聞いた途端、千穂は瞳を潤ませて泣きそうな顔になったからだ。言葉が尻すぼみになってうろたえる真奥をほとんど睨むようにして見上げる千穂。

「嫌です」

「へ？」

「真奥さんのバカっ！」
「えええええ？」
全く予期しない反応だった。その後千穂はそっぽを向いてしまい、その日の仕事が終わるまで真奥と全く口をきくこともなく、
「お疲れ様でした。また、次のシフトで」
と言って午後十時にあっさりと帰ってしまった。
情けないかな、真奥貞夫には魔王サタンとしての覇気などかけらも見受けられず、女子高生の複雑な心境が分からないままその日の勤務を通常通り終えてしまった。
しょんぼりしながらデュラハン号をこいで家路をたどると、あのレストラン前の交差点に、恵美が立っていた。予め申し合わせていたように、恵美と真奥はお互いを認めるとわずかに間合いを置いて向かい合う。
「……よう」
「軽いわね。これでも宿敵同士の対峙よ……なんでちょっと元気ないのよ」
私服姿の恵美は、何故か手を後ろに組んだまま尋ねてきた。何かを持っているのだろうか。
「なんでもねぇよ。それよりこんな遅くにどうした。今日は終電無くなっても泊めてやらんぞ」
「そうなったらタクシーで帰るわよ。今日は財布もあるし」
「な、なんて贅沢なんだてめぇ。深夜は三割増じゃねぇか」

虚しい会話をひとしきりしてから、真奥はデュラハン号から降りる。殺気や不穏な気配は無いが、二人の会話がデュラハン号越しに行われるのはデフォルトだ。
「で、今日はなんだ？　お礼参りか？」
茶化すつもりで言ったが、恵美の口から出た言葉は意外なものだった。
「千穂ちゃんに変なことしなかったでしょうね」
真奥は虚を突かれて鼻白んだが、複雑な色の溜息とともに言う。
「昨日と今日の嫌な記憶消そうかって言ったら、バカって言われた」
「……はぁ？」
真奥は恵美の声の意味を分かっていないようで、
「俺何か悪いこと言ったのかな。それから一言も口聞いてくんなくて」
そんなことを言ってまた肩を落とした。
千穂の気持ちを知っているくせに、踏むべき段階を全てすっ飛ばしてそれを言ったのだとしたら、相当デリカシーに欠ける発言である。恵美は呆れるしかないが、それを忠告してやる義理も無いので本来の用件を切り出した。
「あなた、帰るつもりあるの？」
「……前もそんなような話した気がするが、またどうした。帰る気なら満々だぞ」
「そう。まあ、私は今のところいつでも帰れる身になったわけだけど」

「ん？」

わざとらしく明るい口調で、自慢げに話す恵美。

「これからはゲート制御のために聖法気回復の手段をあくせく探す必要も無いし」

「おいコラ」

「バイトも適当にこなして、気が向いたらいつでも向こうに帰ればいいんだけど」

でも、と恵美は厳しい表情を作って真奥を見る。

「ただやっぱり気になるのよ。魔王が生きている限り、私は勇者であり続けなければならない。あなたがこっちに残り続ける以上、私はあなたを追う義務がある」

「いやだから、そんな義務は放棄してもらって構わないっつってるのに」

「またルシフェルやアルシエルを使って何かを企まないとも限らないし。だからあなたがエンテ・イスラを諦めるか、私に倒されるかしない限り、私は向こうに帰れないのよ」

「……つまり帰れるにも関わらず、こっちに残るってことか？」

持って回った言い方だが、要するに真奥が日本に残るなら自分も残るといっているのだ。恵美は少しだけ真奥から視線を逸らして、妙に言い訳がましく言う。

「向こうのお偉方に何を思われてても別に気にはならないし、こっちの友達といきなり別れるのもアレだしね」

「アルバート達が納得すんのか？」

「魔王を野放しにはできないってね、分かってくれたわ。アルバートもエメラダも、向こう側から私を支援してくれることになったの。こっちで保管しても問題ない形で聖法気を補充する手段を送ってくれることになったわ」

「野放しって、俺はケモノか」

「魔物じゃない」

「そりゃそうか」

納得してしまう真奥。

「で、どうする？　俺の魔力はほとんどスッカラカンだ。ここでやるのか？」

恵美の言葉をそのまま受け止めるなら、今真奥を倒せば恵美はなんの憂いもなく即座にエンテ・イスラに帰れることになる。真奥は一瞬緊張をにじませた。

だが恵美はこの千載一遇のチャンスを一笑に付す。

「何度も言わせないで。私は勇者よ。正々堂々正面から全力のあなたを完膚なきまでに打ち倒すチャンスが来たらそうさせてもらうわ」

まるで日本で再会したあの雨の昼に見た、太陽のような笑顔で言われて、真奥は鼻白んだ。

まさかそんな顔を見せられるとは思っていなかった真奥は、わざとぶっきらぼうに返す。

「ならお前、なんでまた俺を待ち伏せしてたんだよ。そんなこと、俺に教えたってお前にはなんの得も無いだろうに」

すると、一転困ったような表情になった恵美は口の中をしばらくもごもごさせ、
「え、ええっと。そうね、その、まあ話はついてよ。ついで。あなたは労せずして敵の情報を手に入れたのよ。文句言われる筋合いは無いわ」
噛みながらそんなことを言いはじめる。真奥はワケが分からない。
「いや、そりゃそうだが、だからそれがついてなら本来の用事はなんなんだっての」
「っ～～……」
恵美は何かを言いだしあぐねているようだ。なぜかその姿が、新宿アリタ前で見せた千穂の姿に重なった。手を繋いで欲しいと言った千穂の姿に。
だが、恵美から真奥にそんな友好的な申し出がでるはずがない。と、ここで初めて恵美は、後ろで組んでいた手を前に出した。その手に何やら長い棒状のものが握られていて、いきなりそれを真奥に向かって突き出すではないか。
すわ聖剣か、凶器かと身構えて身を引いた真奥は、
「……？」
自分の眼前に突きつけられている物を見て、首を傾げた。
それは、傘の柄だった。
顔をしかめながらも真っ赤にしている恵美が真奥に突きつけているのは、新品の紳士用雨傘の柄だったのだ。真奥も知る高級百貨店の包装紙が巻かれており、有名紳士服ブランドのロゴ



が柄に刻印されていた。

「か、傘？　え？」

「この前、私……その、貸してもらったの、捨てちゃったでしょ。よく考えると、悪いことしたなって思って……」

そう言えば、恵美を勇者エミリアと知らずに貸したビニール傘は、真奥を魔王サタンと知った恵美に捨てられてしまったのだった。要するに、これはあのときのお礼なのだろうか。

「言っとくけど！」

どうしていいか分からない真奥を、恵美はきっと睨みつけた。

「私は、受けた恩を返してるだけなんだから！　魔王に傘を借りたなんて不徳不名誉も甚だしいけど、受けた恩を仇で返すのはそれ以上に恥ずべき行為だと思ってるだけなんですからね！」

ほとんど叫ぶようにそう言うと、傘の柄を真奥の鼻面にぐいぐいと押しつけてくる。

「さ、さっさと受け取りなさい！　こうしてるの重いんだから！」

「あ、ああ」

手に取ると、恵美は持っていた端を真奥に投げつけるように手放した。今まで真奥が手にしたことのないような重みのあるウッドグリップ。傘布は厚みのある艶やかな生地で出来ており、その上から触れる骨も頑丈な造りのようだ。チャコールグレーを基調としたシンプルな色はどんなファッションにもマッチしそうで、広げれば大人二人はゆうに入れそうなサイズである。

「お前、これ高かったんじゃないのか？」
「本当に野暮な魔王ね。普通そんなこと聞く？　五千円程度、大した値段じゃないわ」
真奥はそのあっさり言い放たれた予想外すぎる値段に腰を抜かしてしまった。
「ごっ……!?　お、お前たかが傘ごときに五千円ってそんな……俺がお前にやったの、近所の郵便ポストにひっかかってたの拾った奴だぞ？」
「うるさいわね！　私に言わせれば、永遠の宿敵が拾い物のボロ傘使ってるのが耐えられないだけよ！　魔王なら魔王らしく、自分に合ったもの持ちなさいよね！」
「う、む、それは一理あるが……しかし、そっか、五千円かぁ。すげぇなぁ。とてもあのボロ傘と同じカテゴリーの日用品とは思えない。包装紙取っていいか？」
「あなたにあげたものよ。好きにしたら!?」
恵美はもう真奥のことを見ていない。腕を組んで顔をしかめたままそっぽを向いている。
真奥はテープを丁寧にはがして包装紙を畳みポケットに入れると、傘を広げた。
「おおでっけぇ！　しかも頑丈そうだ！　今まで俺が使ってたのは傘じゃなかったんだな！」
感嘆の声を上げてはしゃぐ真奥。その姿を横目で一瞬だけ見た恵美は、ほんの少しだけ満足そうに、唇の端を上げた。
「……それじゃ、私の用は済んだから」
そう言って、恵美は真奥に背を向ける。その背に真奥の声がかかった。

「そっか、わざわざ悪かったな、ありがとな」
魔王である彼の口から放たれる礼の言葉。何故か、それだけは恵美の胸の中にストンと納まった。だから恵美は、一度だけ振り向いた。
「言い忘れたわ」
「ん？　なんだ」
そのとき微笑が浮かんでしまった理由は、きっと永遠に分からない。
「きちんと千穂ちゃんと仲直りしなさいよ」
まさかそんなことを言われるとは思わなかったので、目を丸くしたまま返答に窮してしまい、そんな様子を見て満足したのか恵美は微笑んで再び背を向けた。
「じゃ、またね」
そして闇の交差点で互いに背を向け、勇者と魔王はそれぞれの家路に着いたのだった。

「あ、お帰りなさい魔王様、今日の夕食は薄焼き卵ですよ」
「そこは嘘でもいいから厚焼きって言っとけよ」
体力だけはすっかり回復した芦屋がアパートで待っていた。芦屋は真奥の手にある真新しい傘に素早く気づき柳眉を逆立てる。が、真奥はそれを予測していて機先を制した。

「もらいもんだ！　もらいもん！　家計から出したわけじゃねぇよ！」
「もらい物？　魔王様にそんな高そうな傘をくれる聖人のような篤志家がいるのですか」
「遠まわしにヒドイこと言われた！　アレだ、情けは人のためならずって奴だよ」
言うと真奥は、玄関にそっと傘を立てかけた。今までのように、乱暴に放り出していい傘ではない。今度傘立てを買わなければ、と心の中で思った。
ふと真奥は、じっとりとした視線に気づき顔を上げる。ばさばさの長髪で小柄な、どこにでもいる日本人の姿となって隅っこに正座しながらもそもそと卵焼きをかじっているルシフェルだった。
真奥と目を合わせたままそれでも口は開かない。真奥はつまらなそうに言う。
「お前どっか行くアテあんのか」
「……あったらこんなところで卵焼きなんか食べてないよ」
「そりゃそうだ。考えてみりゃ、お前日本でもお尋ね物なんだもんな」
オルバがどうなったか知らないが、もし強盗の罪を問われたら、共犯者であるルシフェルのことを黙っているとは思えない。
日本の警察がすぐにオルバの言うことを真に受けて動くとも思えないが、危うい立場であることに代わりはないのだ。
「一つ聞きたいんだが、お前どうやって恵美の職場の、恵美のパソコンにアクセスしたんだ？」

「……え？」

ルシフェルは首を傾げる。

「事と次第によっちゃお前、色々できるようになるかもしれねぇぞ。俺の力を取り戻すのに協力すれば、助けてやってもいい」

※

それから日本の、東京の、渋谷の、笹塚には、真奥にとっての非日常的な日常が戻ってきた。

真奥と芦屋の二人は戦いの翌日の午前中、大家の志波美輝宅を訪れた。やはり二人とも、自分達の正体を察しているらしい、色々な意味で人間の規格を外れた大家が何者であるかは気になっていた。

千穂とともに地震警告のメールを送ってきた正体不明の送信者も、全てを見通していた様子である大家である可能性は非常に高い。

恐る恐るインターフォンを鳴らした時には大家と膝を交えて話す覚悟でいたのだが、待てど暮らせど家人の返答はなく、やがて芦屋が門扉に一枚の紙が貼られていることに気づく。

『ミキティよりヴィラ・ローザ笹塚入居者様へ　所用にてしばらく海外に参りますので、御用の際は下記の不動産管理委託会社まで』

二人が顔をしかめたのはその事実に対してではなく、その紙の最後が大家のものと思しき真紅のキスマークで締められていたからだ。

海外ということは、しばらく戻ってはこないのだろうか。あの体と外見で、凶器扱いされて空港の税関で止められたりはしないのかと、いらぬ心配が頭をよぎる。

真奥はその日もバイトのシフトが昼から入っており、夕方に現れた千穂はまだ少しぎこちないながらもいつもの千穂に戻っていた。

芦屋は家で掃除と洗濯を済ませてから美術館とスーパーを巡るゴールデンコースだ。

「おっはよー恵美。今日は何事もないといいね」

その日は出勤するや、そんなことを言って恵美を茶化す梨香がいた。恵美は梨香の顔を見て、

「梨香……実は……」

謝りながら、昨日、梨香と別れてから事故に遭って借り物のブラウスをボロボロにしてしまった、と話した。梨香は怒りもせずに苦笑する。

「ほんとだ。よく見たらあっちこっち痣が……恵美、よく死なないね」

ルシフェルとの戦いが決着した後、恵美は敢えて戦闘中に負った傷を全て治さずにいた。前々日には地下道の崩落に巻き込まれて大怪我をしたというのに、たった二日で綺麗に傷が消

えているのは流石におかしいからだ。

「使い古しだから別に気にしないでいいんだけど、恵美の気が済まないって言うなら、今日はお昼ご飯の行列に付き合ってもらおうかな」

そう笑って恵美の肩を叩く。恵美はほっと胸を撫で下ろして了承し、当たり障りのない会話をしているうちに始業時間となる。

朝礼メールをチェックする暇もあればこそ、いきなり恵美のブースに着信があった。頭を仕事モードに切り替え電話を取る。

「お電話ありがとうございます、ドコデモお客様電話相談室担当、遊佐がお伺い……」

『おーすげぇ！　本当にかかった！』

「……は？」

聞こえてきたのは、耳に慣れてはいるけど、馴染みたくない声だった。

『おーい恵美ー、聞こえるかー』

「っっっ！」

恵美は一瞬息が詰まり、頭に血が上ってしまう。

『いやー、狙い撃ちって本当にできんのな。これ思ったより使えるかもしれねぇや！』

「一体なんのつもり!?　私今仕事中なんですけど!?」

『そう怒るなって、実験だよ実験』

「なんの!?」
『ハッキング』
「は……っ……え？」
『いや、漆原がお前のブースに直接アクセスできたのはネカフェからお前の会社の管理コンピューターにハッキングしたからだって言うんだよ。で、うちにパソコンがあればもっと色々できるんじゃねぇかって思って、俺はクレジットカードの分割払いで初めて高価な買い物した』
　恵美は自分のこめかみが脈打つのを意識しつつもとめることができない。
「色々聞きたいことはあるけど、まず誰よ漆原って！」
『ルシフェルのことだよ。あいつ意外とコンピューターできんのな』
「知らないわよ！　なんの話よ！」
『いや、最初は気心知れた奴のところの方が安全だと思ったからさ、邪魔してわりぃ』
　まったく悪びれない真奥。恵美はドンドンとデスクを叩く。
「気心知れた!?　フザけたこと言わないで！　なんで私があなた達と……」
『いいじゃん、俺に対等にぶつかってくる顔馴染みってお前が初めてだからついな、悪い、んじゃな』
　一方的に言いたいことを言って真奥は電話を切った。
　恵美はやり場のない感情を爆発させることすらできず呻いている。

「ちょ……恵美、どしたの？」
隣のブースから恐る恐る梨香が問いかけてきた。
「なんでもないわよ!!」
恵美の裂帛の気合とともに放たれた声は、オフィス中の社員を竦み上がらせたのだった。

「あー面白かった。んじゃ俺バイト行ってくるわ。漆原、お前はパソコンの扱いに慣れとけよ」
マイク付きのヘッドセットを外すと、真奥は満足げに言う。
「……こんな旧型」
ＩＴ方面から真奥たちに協力することで魔王城滞在を許されたルシフェルこと漆原半蔵は、真奥が秋葉原で格安で購入してきた、ＯＳが二世代前のノートパソコンが心底不満そうだ。ネットカフェで扱ったものはこれよりずっと新しい機種だったらしい。
「お前のためにわざわざ買ってやったんだぞ！　モバイルネット回線も即日引いてもらって、どれだけの出費だと思ってるんだ」
「ネット回線同時加入なら、本体価格は相当割り引かれてるだろ！　もうちょっとなんとかならなかったわけ？」
「お尋ね者が偉そうに。新しいのが欲しかったらとっとと俺が魔力を回復できる手段を見つけ

て、綺麗な身になって働け」
「全く……なんて僕が人間なんかの法律に従わなきゃならないんだよ」
ぶつぶつ言う漆原を見て、真奥と芦屋は顔を見合わせて笑った。
「俺達にもあんなこと思ってた時期があったなぁ」
「そうですね。なんだか随分と昔のことのような気がしますが」
ふと芦屋は、百円ショップで購入した五百円商品の壁掛け時計を見る。
「魔王様、出勤のお時間です」
そう言って恭しくドアを開ける。
「僕、なんとかペッパーポテトもういらない！　持って帰ってくるなら違うやつ！」
「今日の夕食は卵スープを予定しております。道中、お気をつけていってらっしゃいませ。」
ワガママを言う漆原と、主夫として働くことへの諦観を哲学にまで昇華させた芦屋に見送られ、真奥は今日もデュラハン号に跨って元気にアルバイトに出かける。
笹塚駅から徒歩五分、六畳一間の魔王城は、今日も平和に時が過ぎそうだ。

―了―

作者、あとがく　— AND YOU —

悪魔と契約すると、命とか魂とか、『それ取られたら願い叶える意味ないじゃん！』というものを代償として要求されるものです。

和ケ原聡司という名の作者は、悪魔の中の悪魔、魔王と契約を交わして作家になりました。天使の血を引く勇者が隣で睨みをきかせていてくれたおかげで、幸い作者はその場で命を差し出さずに済みました。しかし、その代わりに魔王と勇者は二人して、作者に「人生をよこせ」と言い出します。

作者は彼らとの契約のおかげで作家になれたのです。それくらいは対価として当然だと思って素直に従っていると、次第に住む場所と、食うものと、着るものと、働く場所をよこせと、要求はエスカレートしていきました。

作家になれただけでなく、表現の世界を飛ぶための銀色の羽までもらった作者は、素直に彼らの要求されたものを次々と差し出していきました。

そうこうしているうちに、結果的に作者は彼らに命を差し出していました。作者は、限られた人生の時間、すなわち命を差し出していたのです。さすがは悪魔の契約。知らないうちに命を差し出さざるをえなくなるとは、恐れ入ります。

ですが魔王は、さすが悪魔を統べる王だけあって欲張りです。作者の人生だけでは生きていけないと言い出しました。

魔王との契約の仲介人を務めてくれた、編集の荒木さん。彼らに与える衣類や住居や職場や肉体を描いてくれた029さん。そして製本にかかわる全て人の人生まで欲しがるようになりました。

皆さん、その要求を受け入れて、魔王と勇者に人生の一部を差し出してくれました。

作者は言います。もうこれだけあれば、お前ら生きていけるだろう、と。

ところがです。今度は勇者が、更なる要求を突きつけてくるではありませんか。

「一番肝心なものが足りない。それが手に入らないと、私達は生きているとは言えない」

それは何だと作者は尋ねます。すると、魔王と勇者は二人揃って言うのです。

「読者の人生が欲しい」

彼らの世界は、読者の人生なくしては成立しないのです。それが無くては、今まで作者たちが彼らに差し出してきたものには、なんの価値もありません。

今回、私作者は、読者の皆さんの人生から、少しの時間を頂戴します。
戴いた時間の代わりに、それに見合う世界と、命と、物語を、読んで下さった方の心に残すことができれば幸いです。
まったく、ひよっこのくせに分をわきまえず、大それたことを言う作者です。
あと、勇者になりかわりまして、日本全国の貞夫さんに、心からお詫び申し上げます。

魔王と契約した作者の描くこの物語は、毎日を必死に、楽しく生きている奴らのお話です。
あなたの町の、あの人は、もしかしたら異世界からの来訪者かもしれません。

『はたらく魔王さま!』
巻末特別企画



履歴書



ふりがな	まおう さだお
氏名	真奥貞夫
考えた人	ことも ない 日生（満300歳くらい） 性別 男
ふりがな	とうきょうと しぶやく さえづか
現住所	東京都渋谷区笹塚X-X-X ヴィラ・ローザ笹塚201号室 魔王城
電話	060-0000-0666

年	月	学歴・職歴
日本換算 寛保元年～	寛政	11年頃 魔界の各地を転戦
明治3年		魔界の王就任
平成2X年		魔界の王を引退
平成2X年		マグロナルド幡ヶ谷駅前店アルバイト
平成2X年		現職

資格	魔界一級建築士、デュラハンチャリオット普通免許、危険魔法薬取扱士、ワイバーンライセンス、悪魔医師、魔会計士、中小魔族診断士、魔道アナリスト	
特技・趣味	世界征服、接客業、語学	
志望動機	マグロナルドの仕事で得た経験を、世界征服に生かしたい。	
本人希望欄	うまい飯を食いたい。	
通勤時間	デュラハン号をもってすれば、ものの10分もかからない。	扶養家族の有無 魔王軍の全軍勢 / 保護者の氏名 芦屋四郎

勝手に書き込むなよ！ by真奥

履歴書



ふりがな	ゆさえみ
氏名	遊佐恵美
生年月日	秋 日生（満 歳） 性別 女
ふりがな	とうきょうとすぎなみくえいふくちょう
現住所	東京都杉並区永福町♠-♠-♠
	アーバンハイツ永福町501号室
電話	090-××××-0211

生年月日 過当すぎんだろ by真奥

現住所 時計い多いこんな… by恵美

17だけど、20。ってことにしといて。

年	月	学歴・現歴
平成×年		エンテ・イスラ西大陸の寒村に生まれる
平成×年		家事手伝い
平成1×年		教会騎士団隊長職 就任
平成1×年		勇者 就任
平成2×年		株式会社ドコデモグループお客様相談センター契約社員 現職

資格	防災資格、穀物選別士、TOEIC700点
特技・趣味	刃物研ぎ、除霊、時代劇鑑賞、語学、魔王討伐
志望動機	勇者として当然の勤めよ。
本人希望欄	魔王を倒せるなら、どんな環境でも耐えてみせるわ。 でも、お風呂はもうちょっと広いと嬉しいけど。
通勤時間	最寄り駅は京王井の頭線永福町駅 電車と徒歩で約25分
扶養家族の有無	なし
保護者の氏名	鈴木梨香

趣味かよ。 by真奥

特技も by恵美

そんなっ！ by真奥

おい by真奥

何の大切あるの？ by恵美

履歴書



ふりがな	あしやしろう
氏名	芦屋四郎
年 月 日生（満1500歳）	性別 男
ふりがな	日本に来た日はいつか覚えてない。
現住所	東京都渋谷区笹塚X-X-X ヴィラ・ローザ笹塚201号室
	魔王城真奥方 携帯 持てよ by真奥
電話	必要ありません

年	月	学歴・職歴
		日本の元号以前から、魔界の一兵卒として各地を転戦
宝暦くらい		現魔王サタンの参謀として軍門に下る
嘉永くらい		四天王結成
明治		悪魔大元帥就任 エンテ・イスラ東方攻略軍総司令就任
平成2×年		エンテ・イスラ東方攻略軍総司令解任
平成2×年		無職、主夫

資格	調魔師免許、ワイバーン大型免許、魔道具鍛冶師、危険魔法職取扱士、魔界福祉士、ダークヘルパー、魔育士、魔界文書検定一級、魔王城秘書検定一級、マジックコーディネーター
特技・趣味	世界征服の手伝い。掃除、洗濯、炊事、念動力。
志望動機	志望してこうなった覚えはないのですが……。
本人希望欄	一刻も早く、魔王城にその名に相応しい職業にお戻りいただきたい。 コンロをIHにしたい。魚グリルが欲しい。 誰のだよ！ by真奥

通勤時間	主夫は目覚めた瞬間から働き始めます。	扶養家族の有無	私の存在が、魔王城にかかる税を軽くしている	保護者の氏名	私が保護者だ！

履歴書



ふりがな	ささき　ちほ
氏　名	佐々木千穂
平成X年	9月10日生（満16歳）　性別 女
ふりがな	とうきょうと しぶやく はたがや
現住所	東京都 渋谷区 幡ヶ谷 ロ-ロ-ロ
電　話	090-AAAA-1000

年	月	学歴・職歴
平成XX年	3	渋谷区立笹幡中学校卒業
平成XX年	4	東京都立笹幡北高等学校入学
平成XX年		二年生在学中

資格	英語検定三級、漢字検定準二級
特技・趣味	弓道初段、掃除、料理、音楽鑑賞
志望動機	学生生活をより充実させるため、アルバイトを通じて社会経験を積みたいと思いました。あと、小さいころから、マッグのお姉さんが憧れでした。
本人希望欄	とにかく、精一杯がんばりますっ！　あ、あと、その、できれば土日は真奥さんと一緒が……あ、な、なんでもありません！
通勤時間	徒歩10分
扶養家族の有無	なし
保護者の氏名	佐々木千一（父） 佐々木里穂（母）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒160-8326 東京都新宿区西新宿4-34-7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「和ヶ原聡司先生」係
「029先生」係

■

電撃文庫

はたらく魔王(まおう)さま!

和ヶ原聡司(わがはらさとし)

発行　二〇一一年二月十日　初版発行

発行者　髙野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一六〇-八三二六　東京都新宿区西新宿四-三四-七
電話〇三-六八六六-七三一一（編集）

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製・複写することはできません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

© 2011 SATOSHI WAGAHARA/ASCII MEDIA WORKS
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870270-6 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

シロクロネクロ

多宇部貞人
イラスト／木村樹泰

ISBN978-4-04-870268-3

美少女屍霊術師（ネクロマンサー）・高嶋雪路の手でゾンビとして蘇った普通の高校生・不二由真。強い想いを糧に蘇った彼の未練とは「一度でいいから女の子と〝えっち〟してみたい」という願いで――!?

た-26-1　2075

アイドライジング！

広沢サカキ
イラスト／CUTEG

ISBN978-4-04-870239-3

寒村で快活な高校一年のモモ。たぐいまれな体躯と人柄を気に入られ、彼女はいきなりプロデューサーのサイとともに、夢の舞台へ飛び込むことになるのだが――!?

ひ-7-1　2076

青春ラリアット!!

蝉川タカマル
イラスト／すみ兵

ISBN978-4-04-870238-6

出てくる連中バカばっか。破壊力抜群の、一直線に疾走する青春コメディ!! 電撃文庫では異色か？ と評されるも、堂々の第17回電撃小説大賞〈金賞〉受賞!!

せ-3-1　2077

アンチリテラルの数秘術師（アルケニスト）

兎月山羊
イラスト／笹森トモエ

ISBN978-4-04-870316-1

「人は限られた時間（デルタ1）の狭間に生まれ、そして死んでいく」ある日俺が出会った、ビルから落ちていく儚い少女。彼女は〝数式を操る者〟数秘術師（アルケニスト）だった――。

う-5-1　2079

はたらく魔王さま！

和ケ原聡司
イラスト／029

ISBN978-4-04-870270-6

世界征服間近だった魔王が、勇者に敗れて辿り着いた先は、異世界〝東京〟だった!? 六畳一間のアパートを仮の魔王城に、フリーターとして働く魔王の明日はどっちだ!?

わ-6-1　2078

電撃文庫

狼と香辛料

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN4-8402-3302-0

行商人ロレンスが荷馬車の荷台で見つけたのは、自らを豊穣の神ホロと名乗る、狼の耳と尻尾を有した美しい少女だった。第12回電撃小説大賞〈銀賞〉受賞作！

は-8-1　1215

狼と香辛料Ⅱ

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN4-8402-3451-5

異教徒の地への玄関口、北の教会都市で大商いを仕掛けたロレンスだったが、思いもかけぬ謀略に嵌ってしまう。賢狼ホロでも解決策は見つからず絶体絶命に!?

は-8-2　1278

狼と香辛料Ⅲ

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN4-8402-3588-0

異教の祭りで賑わう町クメルスンを訪れたロレンスとホロ。そこで一人の若い商人アマーティと出会う。彼はホロに一目惚れし、それが大騒動の発端となった。

は-8-3　1334

狼と香辛料Ⅳ

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-8402-3723-9

ホロの故郷ヨイツの情報を集めるため、田舎町テレオを訪れたロレンスとホロ。情報を知る司祭がいるはずの教会で二人が出会ったのは無愛想な少女で……!?

は-8-4　1390

狼と香辛料Ⅴ

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-8402-3933-2

ホロの伝承が残る町レノス。ホロはのんびりヨイツの情報を探したがるが、ロレンスは商売への好奇心を拭えないでいた。そんな時、ロレンスに大きな儲け話が舞い込む。

は-8-5　1468

狼と香辛料VI

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-8402-4114-4

ヨイツまで共に旅を続けることを決めたホロとロレンス。二人はエーブを追って船で川を下る。途中、ロレンスは厄介ごとに巻き込まれた少年を助けることになるのだが……？

は-8-6　1519

狼と香辛料VII Side Colors

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-8402-4169-4

ロレンスと出会う前のホロの旅や、港町バッツィオでの二人の買い物風景、そしてホロを看病するロレンスなど、〝色〟をキーワードに綴られる、珠玉の短編集。

は-8-7　1553

狼と香辛料VIII 対立の町〈上〉

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-867068-5

「狼の骨」の情報を得るため、ロレンスたちは港町ケルーベでエーブを待ち伏せる。だがそこは、貿易の中心である三角洲を挟んで、北と南が対立している町だった！

は-8-8　1587

狼と香辛料IX 対立の町〈下〉

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-867210-8

伝説の海獣イッカクの横取りを狙う女商人エーブは、ローエン商業組合を抜けて自分のもとへ来るようロレンスを誘う。エーブの誘いにロレンスの出した答えは……!?

は-8-9　1644

狼と香辛料X

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-867522-2

狼の骨を追ってロレンスたちが次に目指すのは、海を渡ったウィンフィール王国にある、ブロンデル大修道院。そこには「黄金の羊伝説」があって……!?

は-8-10　1721

電撃文庫

狼と香辛料XI Side Colors II

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-867809-4

“色”をテーマに綴られる短編集第2弾。ホロとロレンスの旅の途中の物語2編のほか、元貴族の女商人・エーブの過去を描く書き下ろし中編「黒狼の揺り籠」を収録。

は-8-11　1758

狼と香辛料XII

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-867933-6

北の大地の地図を手に入れるため、ホロとロレンスはハスキンズの紹介で褐色の肌の美しき銀細工師のもとを訪れることになる。新感覚ファンタジー最新刊！

は-8-12　1802

狼と香辛料XIII Side Colors III

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-868140-7

リュビンハイゲンでの金密輸騒動のあと、ノーラは羊飼いをやめて旅をしていた。書き下ろし中編「羊飼いと黒い騎士」ほか、3編を収録した短編集第3弾！

は-8-13　1850

狼と香辛料XIV

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-868326-5

ついに北の地図を手に入れたロレンス。これでホロと一緒にヨイツまで行けると思った矢先、港町レノスでそうも行かない事情に直面してしまい!?

は-8-14　1900

狼と香辛料XV 太陽の金貨〈上〉

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-868829-1

ホロとロレンスは、ホロの仲間の名を冠するミューリ傭兵団に会うため、デバウ商会のある町レスコへ向かうことに。ヨイツを目指す二人の旅は、いよいよ最終章へ突入!!

は-8-15　2002

電撃文庫

狼と香辛料XVI 太陽の金貨〈下〉

支倉凍砂
イラスト／文倉十

ISBN978-4-04-870265-2

レスコでホロと共に店を持つことに決めたロレンス。しかし、デバウ商会の内部分裂による大きな事件に巻き込まれてしまい!?新感覚ファンタジー、本編感動の最終章！

は-8-16	2084

デュラララ!!

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN4-8402-2646-6

池袋にはキレた奴らが集う。非日常に憧れる高校生、チンピラ、電波娘、情報屋、闇医者、そして"首なしライダー(デュラハン)"。彼らは歪んでいるけれど——恋だってするのだ。

な-9-7	0917

デュラララ!!×2

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN4-8402-3000-5

自分から人を愛することが不器用な人間が集う街、池袋。その街が、連続通り魔事件の発生により徐々に壊れ始めていく。そして、首なしライダー(デュラハン)との関係は——!?

な-9-12	1068

デュラララ!!×3

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN4-8402-3516-3

池袋に黄色いバンダナを巻いた黄巾賊が湧れ、切り裂き事件の後始末に乗り出した。来良学園の仲良し三人組が様々なことを思う中、首なしライダー(デュラハン)は——。

な-9-18	1301

デュラララ!!×4

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-8402-4186-1

池袋の街に新たな火種がやってくる。奇妙な双子に有名アイドル、果ては殺し屋に殺人鬼。テレビや雑誌が映し出す池袋の休日に、首なしライダー(デュラハン)はどう踊るのか——。

な-9-26	1561

電撃文庫

デュラララ!!×5

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-04-867595-6

池袋の休日を一人愉しめなかった折原臨也が、憂鬱返しとばかりに動き出す。ターゲットは静雄と帝人。彼らと共に、首なしライダーも堕ちていってしまうのか――。

な-9-30　1734

デュラララ!!×6

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-04-867905-3

臨也に嵌められ街を逃走しまくる静雄。自分の立ち位置を考えさせられる帝人。何も知らずに家出少女を連れ歩く杏里。そして首なしライダー（デュラハン）が救うのは――。

な-9-31　1795

デュラララ!!×7

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-04-868276-3

池袋の休日はまだ終わらない。臨也が何者かに刺された翌日、池袋にはまだかき回された事件の傷痕が生々しく残っていた。だが安心しきりの首なしライダーは――。

な-9-33　1881

デュラララ!!×8

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-04-868599-3

孤独な戦いに身を潤れさせる帝人の陰で、杏里や正臣もそれぞれの思惑で動き始める。その裏側では大人達が別の事件を引き起こし、狭間で首なしライダーは――。

な-9-35　1959

デュラララ!!×9

成田良悟
イラスト／ヤスダスズヒト

ISBN978-4-04-870274-4

少年達が思いを巡らす裏で、臨也の許に一つの依頼が舞い込んだ。複数の組織に狙われつつ、不敵に嗤う情報屋が手にした真実とは。そして、その時首なしライダー（デュラハン）は――

な-9-37　2080

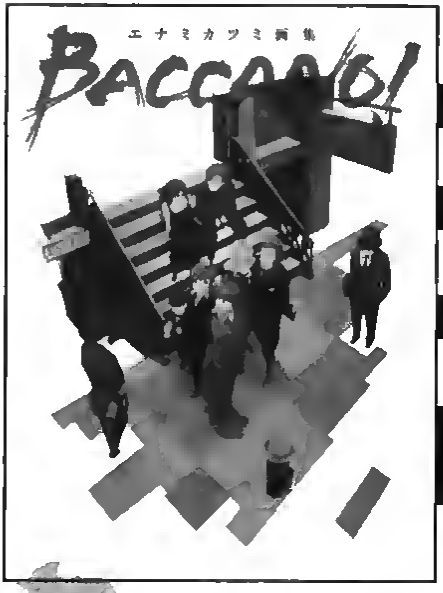
好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ!(バッカーノ)

エナミカツミ画集

『バッカーノ!』

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ　定価 2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!



注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!
「バッカーノ!」シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA
「ヴぁんぷ!」をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS
ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
チェスワフぼうやと(ビルの)森の仲間達
豪華描きおろしで贈る『バッカーノ!』のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

BACCANO!
画集

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス